324
681

30. 7. 15

自滿

大正
14. 10. 6
内交

324-~~671~~ 681

序

我輩は世に所謂日蓮信者でも無ければ日蓮の研究者でも無い、だから深くは日蓮と云ふ者を研究しないし、無論其教義も嚴密には知らぬのである。然し我輩は行住座臥、努めて古今を談じて居る、古今を談ずるのが好きである。是れ居ながらにして古今の英雄偉人と語るの所以にして、我輩は別に禪もやらなければお經も唱へぬが、靜かに想ひを往昔に還して、居ながらにして古へへの英雄傑士と相語るの體驗は有する。此八十四年の體驗は、我輩をして如何なる艱難に逢遭するも敢て意とせざるの一大信念を造らしめた。肉體上の病魔も此精神の力で

斥け得るの道をも心得て居る。宗派宗旨は一の形式で、其精神は何れもこゝに無ければならぬと思ふ。此意味に於て日蓮は一個英雄兒としての氣魄を有し、一面宗教家としては偉大なる平民僧として、我輩の大いに偉ぶ誇るに足るの一人であると信ずるんである。

抑々世に一宗の起る、蓋し偶然に非ずで、これは美しき犧牲の精神と佛の深祕とが結び着いて一の宗旨を生ずるので、これを日蓮に觀れば『法難』は即ちそれである。『法難』を經る毎に信仰を增すので、七字の題目偉大なるコムビクシヨンで、基督教で云ふ殉教者的である。一體に宗教の創始は迫害の多いものだが、日蓮は殊に全ゆる迫害と戰つた。牢固として拔く可らざる日蓮の意思は遂に此迫害に打克つて、萬難を切り拔けて日蓮宗を創あたのである。こゝに人間としての日蓮が實に犯す可らざる英雄兒としての面影を存するんである。

他の宗派が或は權門に取入り貴族と結托して居る際に、獨り敢然として時流を抽き、一切の權力者を惡み、權門勢家と戰ひ、平民的に終始し、所謂『辻說法』の傳道に民衆を對手としたのは日蓮であつたんである。遂に政府の迫害となり、所謂『法難』となつたが、從容死に就くの決心と自信とは何物もこれに打克つものは無かつた。これ即ち法力であるが、通俗に云へば、犧牲的精神が迫害に打克つたのである。こゝに日蓮の平民僧としての偉大さが現はれて居る。日本の宗教では恐らく日蓮が一番迫害を受けたであらうが、其代り日蓮信者が一番に强固な

やうである。

斯くの如く一宗の起る、決して偶然では無いが、而も熟々現代世相を觀るに、何れの方面と云はず、誠に寒心に堪へないものがある。此時に際して、此滔々たる現代相に對して偉大なる救ひの叫びと犧牲の精神とを投ずることは、洵に刻下の一大急務である。

報知新聞記者本山荻舟君、思ひをこゝに致して、今回『日蓮』一卷を上梓さる。蓋し今日此事ある、誠に我意を得たるものにして、『我れ日本の柱とならん』と叫んだる我が日蓮、必ずや獨り地下に莞爾たるものあらんと信ずるんである。

著者は曩に『名人畸人』『近世數奇傳』の著ありりて、文名嘖々、目下尚ほ報知紙上に『近世劍客傳』を執筆中で、史傳に於ては蓋し稀に見るの異彩である。行文の流麗云ふ迄も無く、史實正鵠、日蓮の信者たると否らざるとを問はず、大正の日本國民たる者の必ず一讀を要する好著と信じて疑はぬのである。

大正十年十月

大隈重信

初心者から初心者へ

初心者の書いた『日蓮』を、初心者に讀んでいたゞき度い。そしてそれが少しでも、初發心の助けとなる樣な事があつたら、編者の歡喜は此上もありません。

淺學菲才、殊に宗門の信徒でもない私に、兼知未萠の聖人、釋尊、上行の再誕ともいはるゝ、大人格者の傳記が、書けさうな筈はないのです。それを書き始めたのは、是迄種々傳記めいた物を、書き續けて來た行懸りから、聖誕七百年を記念する爲といふ、社命に背き難かつた爲です。それにしても是迄曾て、研究はおろか、殆んど覗いた事さへもない、宗門の祖師の傳記を、不用意に引受ける事の大膽は、自分でもよく知つてゐました。知つてゐて之を引受けたのは、持前の强情がさうさせたのです。

事實社命を受てから、愈執筆し始める迄の期間は、僅かに一月位しかなかつたのです。

此短時日の間に、而も他に尙ほ忙しい仕事を有つてゐる身で。充分の研究が出來さうな筈はありません。日々の紙上に連載する必要上、執筆も研究も一緒になつて、それは隨分苦しい事でした。隨つて專門の方に讀まれたら、杜撰の譏りを免れないでせう、また私自身にも、書き始めから終ひ迄の間には、漸次調子の變化して來た事を、よく承知してゐます。

併し前段と後段との間に、假に進歩の跡がありとすれば、それは即ち初心者の、漸次進んで來た徑路を、事實に示したものではありますまいか。果して私の研究が、進んだか何うかは判りません。但だ尠くとも初心者が、初めて門に入つてから、堂に至らんと努めつゝ、辿つた路には違ひないのですから、私と同じ樣な初心者で、私よりもまだ後から、門に入らうとする樣な方が、若しあつた節の栞として、故と攻訂を加へませんでした。

斯くて私の『日蓮』は、初心者としての編者が、研究の道程に嘗めて來た體驗を、其儘發表した物として、初心の方に讀んでいただき度いのです。專門的に教義を闡明し、宗風を顯揚される著述は、他に立派なものが澤山ありませう。私のは寧ろ宗門以外の、廣い一般の人達に、せめて朧氣ながらにも、此大人格者の面影を、傳へる事ができれば本望なのです。

本書の材料として、專ら遺文を基とした事は、いふ迄もありませんが、宗門に傳はる傳說をも、必ずしも捨てませんでした。それは人口に膾炙したものは、疑はしいもの迄も眞實として、信ぜられてゐる嫌ひがありますから、總て傳說は傳說として、其旨を斷つて置きました。

在來の傳記類には、事件若しくは人物を、縱斷的に記述してあるのが多いのに對し、成るべく年代を中心として、橫斷的に周圍の事柄をも、併せ記す樣に努めたのが、編者としては聊か苦心を經た處でした。

大隈侯爵の序文は、侯爵が御病中の爲、校訂を願ふ遑のなかつた事を、お斷りして置きます。

本篇を報知新聞に連載中、及び今回上梓するに方つて、屢同情ある注意を寄せられ、又

日　蓮

は種々御厄介になつた方々に、厚くお禮を申し上げます。

大正辛酉初冬

編　者

日蓮目次

一　開　教　迄……一
旭の森―誕生―清澄入山―懐疑―虚空藏に立願―下山の動機―鎌倉遊學―念佛研究―歸省と處女作―叡山留學―天台と眞言と―三井遊學―京都遊學―禪及び古宗―高野登山―太子廟參拜―儒學と國學―各宗考察―法華經の内容―今此三界の文―寶塔出現―地涌の菩薩―壽量品―行者の自覺―歸省開教

二　鎌　倉　入……四六
初法談―地頭の赫怒―清澄放逐―二僧の好意―華房の危難―兩親の歸依―鎌倉出府―松葉ヶ谷―日昭の歸伏

三　辻　説　法……六三
四箇格言―念佛無間―禪天魔―四條頼基―眞言亡國―律國賊―五字の功德―進士善春―日朗の入門―富木入道―船中の法談―池上宗仲―工藤吉隆―波木井實長―三類の法敵

四　安　國　論……八六
天變地夭―三災七難―父妙日の訃―守護國家論―日興の隨身―立正安國論―第一國諫―

草庵の夜襲——虎口を免る——下總巡化——草庵再建

五　伊豆流罪……一〇二

逮捕遠流——海上の危難——船守彌三郎——海中出現の佛像——四恩鈔——教機時國鈔——流罪赦免——妥協峻拒

六　小松原……一三五

最明寺時頼卒去——北條一門の早世——小湊歸省——舊師と對面——小松原法難——鏡忍、吉隆の殉難——日本第一の行者——日向の入門——母妙蓮逝く

七　蒙古來牒……一五〇

天變政變——日頂の隨身——豫言の的中——與時宗書——十一通書狀——必死の覺悟——甲州巡錫——富士埋經——日持の歸伏

八　龍の口……一六四

祈雨の爭ひ——良觀の敗走——日蓮の勝利——法敵の讒訴——問注所召喚——反問者——一昨日御書——第二國諫——逮捕護送——八幡諫曉——龍の口刑場——曉闇の怪異——處刑中止

九　佐渡流罪……一九三

依智の十三夜——明星降下——日朗等の就縛——土籠御書——寺泊御書——浪賀目——塚原三昧堂——阿佛房の歸伏——法敵の評定——最蓮房の歸伏——雪中の宗論——鎌倉合戰——自界叛逆

十　開目鈔……二二八

人生觀と國土觀——三大誓願——懺悔滅罪——佐渡御書——謫所の移轉——諸弟子の給仕——日妙尼御書——眞野陵——印性の妻——地頭の迫害

十一　本尊鈔……二三九

一念三千——三觀三諦——本門の肝心——諸法實相鈔——如說修行鈔——顯佛未來記——三國四師

十二　十界曼荼羅……二五一

蒙古來牒頻々——人法一如——本尊圖顯——諸天諫曉——北條彌源太——現世安穩——後生善處

十三　流罪赦免……二六三

歸國の先相——佐渡發足——歸路の順風——法敵の執拗——鎌倉歸府

十四　最後國諫……二六九

三度の高名——妥協の拒絶——法印の祈雨——雨後の大風——弘法公許——隱栖の決意

十五　身延隱栖……二七九

入山の途上——法華取要鈔——山陰の草庵——身延山御書——駿河傳道——亡國の呪咀——蒙古來襲——顯立正意鈔——與同滅罪——萬年救護の本尊——婦人觀——父母追慕——太田曾谷御書——鎌倉大火——兄弟鈔

十六　撰時鈔……三〇〇
法蓮鈔——日像の入門——阿佛房登山——現前の叱咤——閻浮第一人者——窮乏生活——元使の斬首——亡國即興國——本迹勝劣——山中の嚴寒

十七　報恩鈔……三一二
忘持經事——道善房遷化——種々御振舞御書——頭破作七分——報恩鈔送狀——妙覺の山——實相寺、瀧泉寺

十八　賴基陳狀……三二三
上野時光御書——桑ケ谷の法論——三位房日行——京都布教の魁——賴基の寃枉——疫癘猖獗——龍口の追憶

十九　池上兄弟……三三五
誠忠と至孝と——眞間弘法寺——草庵の朽破——寒中の所勞——天晴男の賴基——阿佛房歿す——賴基の參詣——兵法劍形——未聞の極寒

二十　三烈士……三五〇
駿河の法敵——熱原法難——悲壯なる殉教者——謗身、謗家、謗國——八寒地獄

二十一　三大祕法……三五九
海防と祈禱——諫曉八幡鈔——日本の佛法——戒壇の宣示

二十二　蒙古再來……三六八
病中の叱責——大軍襲來——小蒙古御書——筑紫の戰報——季長繪詞——國防策遑々——山中の熱禱——敵船覆滅——此土寂光土——皇統の二流——新堂の建立

二十三　出山入滅……三八一
宿痾重る——一期弘法鈔——戒壇の本尊——池上安着——最後の書簡——六老僧——遺物分與——臨終——身延埋骨——遺文蒐錄

二十四　滅後拾遺……三九五
老僧の離反——日興の峻厳——身延離山——富士經營——帝都弘教——海外布教——各派分立——五人所破鈔——老僧の遷化

開教迄

本山荻舟著

一

日蓮は曉の露を踏んで、清澄の山路を分上ツた。仄暗い足下から、篠木を透し、谷を越えて、太平洋の靜かな海は、短夜の明方に、白々として空に連ツてゐた。穩かな濤の音は、遙かな麓の岸に消えて、山上には風もなく、鷄犬の聲も聞えず、天地をくるめ

て寂寞と、たゞ靜まり返ッた中に、日蓮の力强い跫音のみが、間を措いて重々しく響いた。

身の丈は餘り高いと云ふ程ではないけれど、がッしりと肥ッた體軀と釣合ふ程に、立派な格幅を薄墨の法衣に包んで、草履穿の素足にも、精氣が充滿ッて見えた。

默々として、一歩、一歩と、徐に地歩を占めて行くのが、やがて旭の森に着いた。見渡しても見返ッても、周圍には人の影もなかッた。十方世界の中、唯だ一人目覺めてゐる此場の光景は、宛ら敎界の現狀と、同じであると日蓮は思ッた。

一眸遮るものもない、廣濶とした太洋に向ッて、明行く空を眺めてゐると、枝を鳴らさぬ程の風も、谷から吹上げる時は、法衣の兩袖に孕んで、さなきだに肥滿した日蓮の後姿は、一倍輪廓を偉大にして見せた。

海の涯に横雲が棚曳いて、東の空はほの〴〵と、早くも茜を潮して來た。靄の底に白い浪が、漸々光を添へて來ると、日蓮はやをら兩袖を合せて、靜かに珠數を爪繰り始めたが、而もまだ一語をも發しなかッた。

波は俄に金色を呈して、夜の名殘に靡いてゐた、薄絹の帳がさッと分れると、水と空との間から、最初は紅皿が浮んだかと、燃える樣な大日輪が、額からだん〳〵と、半顏を覗かせた。

日蓮の口は初めて開いた。高く、力强く、朗かに澄渡ッた調子で、『南無妙法蓮華經』と響いた。

第一聲に促されて、日輪は耳を傾ける樣に、目に見えてッ、と全面を露はした。

『南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經』と、日蓮の高唱は十度續いて、緩やかに繰返された。唱へ了ッてさッと珠數を鳴らした時、朝日は乘出す樣に波を離れて、赫灼たる光明を、日蓮の滿顏に浴せた。相對して何れから光を發するかと、莊嚴な光景に撲たれて、日蓮の胸は我ながら躍ッた、感激の涙が滂沱として、双の頰を濡らしたのは、瞬きをして後だッた。

妙宗開宣の第一式は、斯くして最も雄大に行はれた。建長五年（西紀一二五三）癸丑四月二十八日、日蓮が三十二歲の初夏だッた。――一說には三月二十八日とも云ひ、また閏三月二十八日だから、四月も同じだと傳へる者もあるけれど、建長五年に閏はないから、無論四月說に從ふべきである。

天に向ッて開宣を畢ッた日蓮は、次で人に向ッて弘通すべく、やがて旭の森を出て、淸澄寺の法蓮に臨んだ。

二

日蓮が房州小湊の浦、蓮華潭の畔に產聲を揚げたのは、人皇第八十六代後堀河天皇の御宇、貞應元年（一二二二）壬午二月十六日の午の刻（十二時）といふ事であッた。父は貫名次郎重忠、母は梅菊、日蓮は其四男であッた。

貫名の家はもと、藤原氏の後裔と傳へられる。大織冠鎌足から十二代の孫、少納言共資が遠江守に

任じて、其國村櫛の庄に住み、更に七代の孫井伊四郎政直が、別家して同國貫名の郷に移ッたので、以來貫名を氏とした。それから數代を經て、五郎重質に二人の子があり、總領は早世して、次が次郎重忠であッた。

重忠が三十三歳の、元久元年（一二〇四）二月、平家の餘類が伊賀、伊勢に起ッて、叛亂を企てた砌、鎌倉の執權北條時政から、豫て睨まれてゐた重質親子は、此密謀に加はッたとの寃を受けて、遂に其三月、國を逐はれて安房へ流罪となッた。――源家二代の賴家が、伊豆の修禪寺に弑せられたのは、此年七月であッた。

房州長狹郡（今安房郡）小湊の濱續き、寄浦の郷士瀧口兵庫を賴ッて、さすらひ着いた重質父子は、其儘土着して漁師の群に入り、暇々には浦の子に讀書習字を敎へ杯して、佗しい月日を送ッてゐたが、其中世話をする者のある儘、重忠の妻に迎へたのが、梅菊であッた。

梅菊の里は下總の船橋在、道野邊の舊家で、父を大野吉清と呼び、本性は清原氏、舍人親王十代の後胤と稱せられてゐる。夫婦仲睦まじく、多くの子寶を儲けて、長男は藤太重政と名づけ、二男は天切したが、三男は仲三重仲、四男が日蓮で、其後にもまだ、藤平といふ五男が生れた。

梅菊が日蓮を孕んだ時には、光明赫灼たる日輪が、八朶の金蓮華に乘ッて海上から飛來り、懷中に入ると夢みたといひ、又誕生の十六日には、附近の海上一面に、蓮華の咲いた奇瑞が現はれ、同時に住家の傍からは、水晶の樣な淸泉が迸り出たのを、直ちに汲んで產湯にしたとも傳へられる。父母の系圖、誕生の瑞祥、日蓮の生立を飾るには、孰れも立派な材料だけれど、名聞の嫌ひな日蓮は、後年に至ッても、自ら『旃陀羅の子』と稱して、家系の事などは曖にも出さなかッた。――旃陀羅は印度最下等の種族で、守獄、屠殺、漁獵等を業とし、常に他の種族から卑められてゐるのだッた。日蓮の斯く稱したのは、漁夫の子といふ意味であらう。

幼名を善日麿と命けられ、兄達にも增して父母から、掌中の珠と慈しみ育まれたが、其貞應元年は、彼の北條義時が、三上皇を遠所に遷し奉り、六公卿を流斬した、承久の亂の翌年であッた。

三

日蓮の善日麿は、嫩葉から香ばしい栴檀であッた。

幼少の頃から肉食を好まず、生魚の殺生にも眉を顰めて、自分は道に蟻をも踏まず、腕白な遊戯の群を避けて、夙くから讀書習字に親しみ、暇さへあれば紙を剪り、幡を作ッて佛を祀るやうな、不思議な眞似をして樂んでゐるので、父母は時々奇異の目を欹てゝ、或ひは遮る事もあッたけれど、おとなしい兒がそればかりは、親の目を掠めても止めなかッた。

小湊からは一里餘り、同じ長狹郡天津の郷に、東國最古の靈場として知られた、千光山淸澄寺の住職、法印道善といふのが、此噂を聽いて耳を傾けた。――天晴名僧となるべき卵を、我手で孵化して自ら育て

やうと、人を以て兩親の許へ申入れた。

清澄寺は清澄の山上にあッて、神武天皇の御宇、天富命鎭座の地と定められ、寺は光仁天皇の寶龜二年(七七一)、不思議律師に依ッて創建せられた。山頂に碧の池があッて、如何なる霖雨にも濁らぬといふ處から、清澄と名づけ、又池畔にある柏の大樹が　夜な〳〵光を放つといふので、千光山と呼ばれた。律師は何處から來たとも知れず、其柏樹を伐ッて虛空藏菩薩を刻み、本尊として安置して後、又何處へか去ッてしまッた。絕えて名を知る者もないので、唯不思議律師と傳へられてゐる。それから更に七十年後の承和年間、慈覺大師が再び此山に上ッて、不動明王の像を刻み、伽藍を建立して以來、天台眞言の古刹として、安房五大寺の隨一に數へられてゐる名山だッた。

當住の道善も、固より學德並び高く、名譽の法印であッたが、重忠は其懇望を受けて、容易に承引しなかッた。――他の子は兎も角も、此子は元の武士に仕立てゝ、天晴名を揚げ、家をも興させやうと思ッてゐる者を、無殘々々出家遁世させて、利及を木竹に化せしめる事は能ないといふのだッた。

梅菊も無論贊成して、夫婦相談の上、即座に拒絕しやうとしたが、善日麿はこれを聞いて、小さい膝を押進めた。――出家する事は兎も角も、せめて學問の弟子となッて、修行がし度いと熱心な願ひに、兩親もつい絆されて、其儀なら差閊もあるまいと、父親が自ら子の手を携へて、天津の鄕から更に一里餘の山道を、清澄寺に上ッて薫陶を托した。善日麿が十二の夏、天福元年五月十二日であッた。

道善は無論喜んで引受け、名をも藥王麿と改めさせ、和漢の學を授けて見ると、一を聞いて十を知る明敏に、出藍の兆は早くも現はれた。

初めから出塵の志を懷いてゐた藥王麿は、和漢の學問の外、師に乞ふて更に佛典を修め、十二から十六の秋迄、足懸五年一度も山を下らず、孜々として研鑽を積んだ結果、今は一山の同宿中、才學共に一人として、其右に出づる者はないに至ッた。

四

師の道善が自ら山を下ッて、小湊に重忠夫婦を訪れたのは、嘉禎三年(一二三七)の秋も更けた、九月中旬の事であッた。

藥王麿が學業の進境と、當人が得度の志とを傳へて、緇衣を望まぬ父母に對し、一子出家、九族生天の方便を說いた。――重忠夫婦も師恩に感じ、殊に我子の決心を聞いては、最早家門の爲抔に、執着する事は能なかッた。快く其懇望を納れて、改めて法印の佛弟子に托した。

道善は固より、藥王麿の喜びもいふ迄もなかッた。愈出家の望みが遂げられる事になると、藥王麿は先づ境內にある、慈覺大師の古道場に入ッて、三七日の練行を遂げ、滿願の後十月八日、道善に依ッて嚴かな剃度の式を受け、名をも是生房蓮長と改められた。時に年十六であッた。――一說には日蓮の得度を、二年後の延應元年、十八歲とも傳へてゐるけれど、遺文其他諸書に依ッて、玆には十六歲說に隨ふ。

氣魄雄大、精力絶倫、夙くから意地の强かッた蓮長は、人一倍の功を收めるには、人一倍の行を積まねばならぬと、机に就けば食事を忘れ、三昧に入れば寢りをも棄てゝ、且讀み、且念じ、刻苦精勵、寒暑を分たず勵んだので、さなきだに一山の驚異となッてゐた才學は　日と共にめきめきと進み、心氣鍛練の効は、月と共に益顯はれて、學と、識と、才との上に、斗の如き膽を加へて、獅子に翼を生じた如く、早くも一搏して飛ばんとするの兆を見せた。

蓮長は一日師の前へ出て、『お師匠樣にお尋ね申し度い事がムります』と云ッた。

道善は莞爾やかに顧みて、『何ぢやな』、『外の事ではムりませぬ、釋迦牟尼世尊は何れのお宗旨でムりませう』、『何といふ』、『いえ、戯れではムりませぬ、私には何うしても解りませぬ、多くのお經を讀めば讀みまする程、益々解らなくなッてしまひまする』、『其方迷ふてはならぬぞ、總ての佛敎は、皆世尊のお弘めなされたものぢや、されば何れの宗門も、皆世尊のお志を繼ぐものではないか、唯だ據る處の經文に、差別があるばかりぢや』、『それが私には解りませぬ、世尊お一人でお說きなされた佛敎でムりますならば、一天四海の中に唯だ一つあッて、二つはない筈と存じまする、然るに當今の狀を見ますれば、日本國の中だけでも、先づ南都の古宗として、倶舍、成實、三論、法相、華嚴、律の各宗がムりまする、平安朝に至りましては、傳敎大師の天台宗、弘法大師の眞言宗、また當代に及びましても、法然の念佛宗、榮西の禪宗と、既に十宗に岐れて居りまする、此中倶舍は法相の附宗となり、成實は三論の寓宗となッて、倶に一派とは申されませぬが、それでもまだ八宗互に自らを正しいとして、各法門を爭ふて居りまする、八宗がまた岐れて十數派となり、更に止まる時のムりませぬ節は、本佛の釋迦如來は、何れの宗門に宿らせ給ふのでムりませう』と、蓮長の言葉には、熱誠が溢れてゐた。

五

道善は靜かに點頭きながら、『それは今も申す通り、據る處の經文に差別がある爲、各宗の說く處も異るが、既に涅槃經に於て說かせられた如く、法に依りて人に依らざれ、義に依りて語に依らざれ、智に依りて識に依らざれ、了義經に依りて不了義經に依らざれと、四依の法を定め置かれてあれば、疑ひはない筈ぢや』、『それは解ッて居りまするが、抑も一切諸經の中、了義と不了義との區別は、何を以て定める事ができませうや、各派立宗の基は各々同じからず、華嚴宗は華嚴經に依り、天台宗は法華經に依り、念佛宗は大無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經、往生論に依り、また眞言宗に於ては、大日經、金剛頂經、蘇悉地經の三部を以て、依經と定められて居りまするが、此中了義經として、世尊の御本意に適ふものは、何れの經文にムりませうや』。蓮長の質問は、單刀直入であッたが、道善は遑がに受止めて、『申す迄もない、了義經とは究竟の理を說き明された經文の謂ぢや、義は高からねばならぬ、一切經を判釋して、顯敎と密敎とに分たれたのは、眞言の宗祖弘法大師ぢや、一切衆生の爲に說かれた顯示敎は、いか程難解の經文と雖も、相手は多寡が人間ぢや、金剛界の法性宮に、法身の諸菩薩を集めて、大日如來の說かせ給ふた、眞

言密教に比ぶれば、月蝕霄壤の差は、申さずとも判ッて居るであらう、大恩教主の釋迦如來と申すも、實は天上の大日如來が、暫く下界に化現し給ふた迄ぢや』と、說得て自らも滿足した樣に、襟を直しつゝ微笑んだ。

蓮長は尙も疑ひの目を睜ッて、『一切衆生を悉く子として、三界に憂る諸〳〵の患難を、我一人にて救護し給はんとは、本佛永劫の御本願と、法華經譬喩品を拜して、承知致し居りますゥ、其人間に解し難く、諸菩薩にのみ示された經文で、人間の患難が、救護さるゝものでムりませうか』、『そこが即ち眞言の秘密ぢや、人間の智慧には難解でも、如來の法力が現はるゝ故、如何なる患難をも救護し得らるゝ、顯敎に比べて密敎の、尊い所以もそこにあるのぢや』、『それで眞言三部の經文を、了義經と仰せられまするか』、『さうぢや、寧ろ釋尊の所謂、了義經以上の尊い經文ぢや』、『それは誰方がお定めなされたのでムりまする』、『申す迄もない、宗祖大師の敎法ではないか』、『左樣でムりまするか』と云ッて、蓮長はそれ以上に及ばず、神妙に師の前を退ッたが、胸中の疑團は、無論其位の說明で、氷解する筈はなかッた。

再び自分の部屋に歸ッて、更に未見の經を讀み始めたが、一旦疑ひを生じては、山內にある經文だけで、其惑ひが解かれやうとは、どうしても思はれなかッた。――蓮長の煩悶はこれから始まッた。

淵に臨んで魚を羨むより、退いて網を結べとあるけれど、自分には其網を結ぶべき智慧が足りぬ、才覺がない。退いて網を結ぶ前に、先づ如何にして智慧を得べきかゝ問題であッた。

六

清澄の山頂、明星ヶ池の畔に年經る、不思議律師自刻の虛空藏菩薩は、智德福德如意の靈佛として、一山の尊崇する處、蓮長はこれに大願を立てゝ、佛法根本の大疑團を解く爲、世に比類なき智者になし給へと、三七日の參籠をした。

滿願の夜に至ッて、偶と後門の方から、氣高き一人の老僧が、忽然として立現はれ、虛空藏所持の如意寶珠を持來ッて、望みの智慧を今與ふるぞ、と手づから投渡されたのが、左の袖に入ッたと見ると、夢は忽ち覺めて、室內には馥郁たる異香の薰ずる心地がした。

蓮長は靈夢の奇瑞に感じて、更に一七日の間、堂中に殘ッて求聞持の法を修し、愈々大願の終りを告げて、下向の途に就かんとする時、俄に眼が眩み、息が詰ッて、撞と大地に倒れた途端、何とも云へない胸苦しさと共に、カッと其場へ嘔き出したのは、一升に近い碧血であッた。

我血の赤さに魂が消えて、暫くは昏々と、醉へるが如く突伏してゐたが、漸く落ち着いて我に返ると、胸中の鬱懷が悉く去ッて、身も心も輕々と、曾て覺えぬ爽快を感じた。

此時だ、此爽かな心を以て、諸〳〵の經文に對すれば、如何なる疑ひも必ず解けて、大願成就するに違ひないと、纔に練行を出たばかりの蓮長が、再び大勇猛心を振ひ起して、直ぐに又經藏に入り、刻苦晝夜、寢食を忘れて、一切經に眼を曝した。

一日無量義經を取ッて、繰返し繙讀する中に、釋尊の大莊嚴菩薩に告ぐるの文がある、讀んでこゝに至ッた時、蓮長は思はず膝を叩いた。

『佛眼を以て之れを見るに、衆生の性慾種々なれば、強て正法を說くと雖も、或ひは耳に入り、或ひは耳に入らず、入らざれば則ち是れ空文なり、故に其時に應じて、種々にして法を說くに、皆方便力を以てす、此間四十餘年、未だ眞實を顯はさず』。

これだ、これに違ひない。四十餘年未顯眞實、一代聖敎の研究は、これを起點として發起しなければならぬ。釋尊は三十歲にして成道し給ひ、七十九歲にして滅度を示し給ふた。法を說かるゝ事五十年、其間の四十餘年、未顯眞實と宣はすからは、以前の諸經は方便に過ぎぬ。正法ではない。眞に正法を說かれたのは、以後の經卷でなくてはならぬ。一代聖敎は悉く、釋尊の口に說かれたものには相違ないけれど、華嚴、阿含、方等、般若から、法華涅槃に至る五時の間の諸經には、假もあり、眞もあり、權もあり、實もあッて、悉く釋尊の正息に出たものといふ事は能ぬ。了義經に依りて不了義經に依らざれと宣はせられた、其了義、不了義の區別を辿るべき、一道の光明を發見したと感じて、蓮長は胸の躍るのを覺えた。

山を下らう。山を下ッて天下に游學し、汎く諸宗を講究して、眞に釋尊の正意に適ふた、眞實法を修めねばならぬと、猛然として決心したのは、仁治元年、蓮長が十九の歲だッた。

修行の爲とは云ひながら、八年住馴れた山を棄てゝ、初めての旅へ出やうとする蓮長は、打明けて師に願ふても、許されない事を知ッてゐた。

須彌よりも蒼海よりも、高く深い師恩だけれど、忍び難きを忍んで一時反むくのは、但日これに幾倍する、報恩の機會があると思ふからだ。一身の爲ではない、衆生の爲だ。私の思ひ立ではなく、總て法門の爲なのだ。假令無斷で脫出しても、十方菩照の御佛は、必ず咎給はぬであらう。師も亦其時に至れば、喜んで許して下さるに違ひないと、信じて固く決心した蓮長は、人知れず旅裝を整へて、半夜竊に山を遁れた。――當座の毀譽を顧みるに及ばず、師にさへ暇を告げなかッた身の、固より父母の門を過る筈はなかッた。

故と天津の鄕へは下らず、間道を山越に、上總へ取ッて下總に出で、隅田川を渡ッて蓬々たる、武藏野の平原に入ッた。――指して行く手は相州鎌倉、政權の中心として、文化の進運と共に、佛法の興隆亦目覺しく、名僧智識の淵叢と、豫て傳へ聞く儘に、先づ目的地と定めたのだッた。

孤筇短鞋、道を海道筋に求めて、武州も漸く盡きんとする、保土谷の宿近く、帷子の里に行暮て、唯ある百姓家に、一宿を乞ふた夜の事だッた。

偶と見ると子供の玩具函に、雜然と詰ッた玩具の中から、一體の佛像が現はれた。古び缺けてはゐるけれど、紛れもない釋尊の立像なので、『勿體ない事をしたものぢや、主は此木像を、何と思ふて此樣な處へ、

投り込んで置かるゝのぢやな』と、眉を顰めて怪しみ問ふた。

『何とも思ひませぬ、それはお釈迦様でムりますよ』、『左様ぢや、釈迦牟尼佛と知ッてゐながら、何故あッて此様に、麁末にはせらるゝのぢや』、『はゝゝゝ、さう仰有る御出家は、何のお宗旨か存じませぬが、わしの方の宗旨では、此様な物は木偶同然で、何の勿體ない事もムりませぬよ』、『一體何のお宗門ぢやな』、『法然上人のお説きなされた、有難い念佛宗でムりますよ』、『ほう、念佛宗では釈迦如來を、麁末にしても構はぬと教へまするか』、『お釈迦様も薬師様も、皆同じでムりますよ、わし等が宗旨で御本尊と申すは、唯だ阿彌陀様ばかり、他の佛様を信仰すると、禮拜雜行とか申して、千に一つも極樂往生は、能ぬけにムりまする』、『一體其様な事は、誰が教へなされましたな』、『今鎌倉で活如來様と云はれる、大阿上人のお説法も、其通りでムります、法門の數は八萬四千と、教へ切れぬ程あるなれど、末世のわし等が修行には、唯だ念佛を唱へるに越した事はない、お念佛さへ唱へて居れば、どの様な罪も赦されて、極樂淨土へ參れるといふ、有難いお宗旨でムりますよ』と、主は得意顔に説いて、再び其佛像を、舊の函へ投げ入れた。

——蓮長は呆れて目を睜るより外はなかッた。

八

數多の佛弟子の中では、舍利弗が智慧第一と稱せられた。其再來の如く、日本で智慧第一と謳はれた、法然の念佛宗とは果して那麼ものか。教主の釈尊を忘れて、他に本尊を求める事が、他力往生の本旨とすれば、それでも佛法と云へるだらうか。

宗祖法然（源空）は約三十年前、建暦二年に入寂したが、今鎌倉には法孫の然阿（良忠）が、佐介ヶ谷の蓮華寺に蟠居して、專ら宗門の弘布に努め、執權北條泰時の嫡孫經時が、主としてこれに歸依してゐるので、上下の信仰翕然として集り、宗風の盛んなる事、當時隨一と傳へ聞く。愈〻鎌倉に着いた上は、何を措いても先づ此念佛宗を、研究して見ねばならぬと、蓮長は深くも思ひ定めた。

保土ヶ谷から鎌倉迄は一日程、翌日直ちに入府すると、取敢ず車大路の宿に笈を解いて、長途の疲れを息める間もなく、翌朝は食事もそこ〳〵に、飄然として蓮華寺を訪れた。——寺は經時の開基に係り、此年（仁治元年）建立されたばかりで、木の香がまだ高かッた。然阿はそれ迄悟眞寺にあッたのを、招ぜられて開山になッたので、其後材木座に移して、光明寺と改められたのは、四年後の寛元元年だッた。

蓮長は貫主に謁を乞ふて、淨土門研究の希望を述べると、然阿は快く承諾して、法然の『撰擇集』を授け、緩々逗留して、念佛三昧を勸めた。——『撰擇集』は正しくいふと『撰擇本願念佛集』の事で、法然が闕白兼實の請に依り、諸經論の中から、念佛を勸める根據となるべき説を蒐め、自己の論斷を加へた、三卷の大論文で、念佛宗の眞先に押立てる、旗幟と見るべきものであッた。

蓮長は勸めらるゝ儘に、暫く蓮華寺に留まッて、法話の聽聞と、經卷の閲讀とに、晝夜精進を勵んだが、撰擇集の所論に對しては、首肯の能ぬ節が多いと思ッた。

一代聖教を二つに分ッて、一に聖道、難行、雜行、二に淨土、易行、正道と定めたのは、遠く源を龍樹菩薩の十住毗婆沙論に發し、唐土の曇鸞、道綽、善導三師も、これを傳へたには違ひないけれど、それは無量義經に所謂、末劫眞實四十餘年の諸經に就て分けたので、法然の撰擇集に說く處とは、自ら趣を異にしてゐる。

聖道、難行、雜行とは、華嚴、阿含、方等、般若、法華、涅槃、大日の諸經を指し、淨土、易行、正行とは、淨土三部經の稱名念佛を指したのが、撰擇集の眼目である。聖道門は聖の修する、難行の道に聳えてゐるのだから、末代の凡夫がこれを行じても、百の時に希に一二、千の時に稀に三五を得る事があるかも知れぬけれども、恐らくは千の中に一つも無い事があらう、依ッて『千中無一』と名づける。淨土門は彌陀の願力に縋ッて、唯だ念佛をさへ唱へれば、極樂往生が能るのだから、如何に末世の凡夫と雖も、一念これを行ずれば、十は即ち十を生じ、百は即ち百を產む、易行即ち正行であるといふのだ。

難きを避けて、易きに就き度がる人心から、風を望んで歸依者の集まるのも、無理はないと思ッたけれど、蓮長はそれに滿足する事は能なかッた。

九

帷子の宿の主から、活如來と迄云はれた大阿は、當時霧ケ澤に庵室を結んで、盛んに他力往生の法を說き、信徒の渴仰を集めてゐたから、蓮長も時々出懸けては、其法談を聽聞した。

大阿の說く處も無論同じで、末代の衆生は下根下機、鈍根の者であるから、迚も濁惡の娑婆世界で、善根を積む事は能ぬ。それを能る樣に考へて、自力を恃まんとするのは、我執である、自惚である。佛から見れば猿猴の、月を取らんとするに異らぬ。水に映る月を取らんとして、いくら猿猴が手を伸ばしても、千に一つも取れる筈はない。即ち千中無一である。

罪障の深い諸の衆生が、現世の苦患から免れて、西方安養世界へ赴かんとするに、十即十生、百即百生、必ず疑ひないといふのは、唯だ南無阿彌陀佛と唱へて、如來の願力に縋る外はない。如何なる罪障と雖も、一遍の稱名に消滅して、極樂往生を遂げられる事は、既に無量壽經に於て、彌陀の誓願中に說かれてある。千中無一の雜行を廢して、百即百生の易行を勸めるのが、他力法門の功德であるといふので、歸依の男女に隨喜の涙を、流さしめてゐる事にも異りはなかッた。

蓮長の鎌倉修學は、斯くて足懸三年に及んだ。

偶其間に、大阿が稀代の惡病に罹ッて、劫熱連日、晝夜苦悶叫喚し、果は惱亂虛空を攫んで、淺猿しい死狀をした。遺骸は縮まッて芋蟲の如く、皮膚は黯んで鼠の如くだッたと傳へられたので、蓮長は思はず身顫ひをしながら、『それは正しく地獄の相ではないか、大阿上人は世にも知られた、智德圓滿の聖と思ふて居るのに、多年の修行も其甲斐なく、臨終の正念を失ふばかりか、現世に地獄の相をさへ顯はすとは、何たる淺猿しい事であらう、他力本願の敎旨も、極樂往生の說法も、土臺から覆へされたものぢや』

と、眉を顰めて太息と共に、嗟歎せずにはゐられなかッた。

念佛宗の斯究も、愈これで終りを告げた。此上は一旦故郷に歸ッて、心にもなく背いて出た、恩師や父母の安否を問ひ、改めて許可を受けた上、再び遠い旅へも出やうと、蓮華寺の然阿に暇を告げて、一旦小湊へ歸ッたのは、仁治三年、二十一の歳だッた。

父母の喜悅はいふ迄もなかッた。道善の慈愛も濫らなかッた。蓮長は劬はらるゝ儘に、暫く清澄寺に逗留中、初めて筆を執ッて、『戒體即身成佛義』と題する一書を著した。——日蓮の遺稿としては、論文、書簡四百餘篇、夥然たる大册を成すに至ッてゐるが、開宗前の著述としては、これが處女作であッた。

再度の修行に出る時は、師父も快く納得したので、蓮長は身も心も共に輕く、今度は叡山に登ッて、天台の奥旨を究めんと、傳手を得る爲再び鎌倉へ立寄ッた。

十

法華經を正依とする、天台宗の研究は、當時の蓮長に取ッて、最も心躍る事の一つだッた。

四十餘年未顯眞實と、釋尊自ら告白して、次に說かれたのが法華經である。其法華經を正依とし、般若、涅槃、維摩、金光明の諸經、大論、中論等の諸論を傍依として、印度の龍樹菩薩から傳承し、隋の天台智者大師に依て開創されたのが、一心三觀の天台宗である。必ず正法でなければなるまい。

大師の著書が我國に渡來したのは、孝謙天皇の天平勝寶年間であッたが、一宗として流布されたのは、四十年後の延曆七年(七八八)、傳敎大師(最澄)が叡山に、一乘止觀院(延曆寺)を建立して以來だッた。

越えて同二十三年、最澄は空海(弘法大師)と共に入唐し、天台山國淸寺の道邃法師、並に佛隴寺の行滿座主から、一宗の敎義を傳へて、始覺、本覺の二門を會得し、別に眞言、牛頭禪、菩薩戒を受けて、翌年歸朝すると同時に、密、禪、戒の三宗を加味した、台宗の法幢を高く揭げた。これが日本天台の起源であッた。

一念三千といひ、一心三觀といふ、三諦圓融の敎旨は、まだ淸澄にゐた時分、聊か窺ふた事はあるが、眞に一切萬法の實相を、止觀の一心上に證悟して、涅槃の門戸を認むるといふ事は、如何なる理法に依るのであるか。其深奥を究めると同時に、『末法太だ近きにあり、法華一乘の機、今正しく是れ其時なり』と喝破して、鎭護國家の道場を開いた、傳敎大師の遺業を偲ぶ事は、情に於ても蓮長が、多年憧憬の的であッた。

偶〳〵鎌倉に、叡山の學僧尊海といふのが、宗務を帶びて逗留してゐたので、蓮長は其寓を叩いて、登山の志を述べると、尊海は快く承引して、歸りに同道して呉れた。

鎌倉に幕府の開けて以來、殊に承久の亂後、山僧が自ら守護を以て任ずる、王城の榮は衰へたけれど、敎界に於ける叡山の勢威は、尙昔に異らず、中堂、講堂の甍は、山上の老杉と高さを競ひ、峰々谷々に軒を並ぶる、堂塔、坊舍、學院は、宛として一大王國の如く、規模の宏大と、設備の整頓と、道は開祖大師

以來四百年、天下の大戒壇、日本佛教の大學院として、學問、美術、音樂の大淵叢といはれるだけの事はあると、僻陬の山寺に人となり、草創間もない鎌倉を、見て來たゞけの蓮長には、見るもの聞くもの一として、眼を奪ひ、魂を驚かさぬはなかッた。

尊海の紹介で、師の坊と賴んだのは、東塔南谷無動寺の住職で、學德一山に高く、全山三塔の總學頭を努めた、俊範法印であッた。蓮長は俊範の知遇を受けて。無動寺の西ヶ岳にある圓頓房、又は華房谷の華光房（後に定光院）等にも住して、出ては交はりを三塔三千坊の學僧に結び、入ッては眼を一宗の註疏に曝し、孜々として勵む程に、學識は駸々として進み、加ふるに天性の俊秀が穎脫して、ここでも一山の驚異する處となッた。

十一

當時叡山の學僧には、京の公卿や殿上人、それ等貴族出の子弟が多數を占め、孰れも幼時から山に登ッて、其學坊に人となり、只管師說に聽從して、山內に於ける位地の昇進を希ふ外、大した野心も新しい希望も、殆ど有たぬ者ばかりだッたから、氏も素性も誇るに足らぬ、片田舍の漁夫の子と生れて、比較的廣い世界をも見て來た、蓮長の生氣潑溂だる言動は、確かに一山の異彩だッたに違ひない。事實また蓮長は、學僧中での論客であッた。

『何れか是れ眞佛敎』といふ、大懷疑の解決を、諸宗研鑽の眼目としてゐる蓮長が、叡山に入ッて其正依とする、法華經に最も心を潛めたのは、當然の事であッた。而して日夕讀誦する中、法師品の一節、『藥王今汝に告げん、我が說く所の諸經、而も此經中に於て、法華最も第一なり』の句に至る毎に、生々として眼を睜ッて、云ひ知れぬ歡喜を覺えたのも、いふ迄もなかッた。

『法華最第一』、釋尊の眞意は、必ずこれに違ひない。已に說き、今說き、當に說くべき諸經の數は、無量千萬億に及ぶと雖も、此法華經の右に出るものはないと仰せられたのが、何よりの證據でなければならぬ。天の一日、國の一王、一切經中の第一經は、此法華經の外にはないと、堅く信ずるに至ッた蓮長は、扨此經を正依とする、天台の宗風に就て、更に考へなければならなかッた。

一念三千は、宗祖天台大師の所說で、上は佛界より下も地獄迄、十界の萬法を該羅して、三千三諦とし、一心に於ては念々に、即空、即假、即中の三觀を以てし、これを三千三諦の敎理の上に立てる。即ち一切萬法に、悉く三千三諦の理を具して、諸法何れか實相でないものはないから、近く現實の一心に、涅槃の門戶に認むるといふので、一切諸法の三諦を圓融し、法々三千の理を、止觀の一心上に證悟し、實現するのが、一心三觀といふ事になる。止は禪定の消極方面、觀は積極方面で、止があれば觀があり、觀があッて止の用が現はれるといふのが、此宗門の敎義である。

傳敎大師の傳へた日本天台宗には、中に眞言、戒律、禪の三宗が混ッてゐるけれど、尙ほ法華經迹門の旨を失ッてゐないが、弘仁十三年大師の沒後、弘法大師が禁裏に勢力を得るに及び、承和五年に入唐した

法弟の慈覺大師（圓仁）は、在留十年の間に、台、密、禪の法を傳へ來ッて、大いに眞言かぶれがし、法華經と眞言三部經との比較に、理同事別、又は理同事勝と稱へて、法華經と三部經との義は、所詮の理は同じだけれども、事相は眞言の方が勝ッてゐると說いた。

法華最第一と信じて疑はない蓮長は、此異說に對して、當然非常な反感を抱かずにはゐられなかッた。法華經の頭を切ッて、眞言經の頂とする事は、鶴の頸を切ッて、蛙の首につける樣なものだ。眞言の蛙も死ねば、法華經の鶴も生てはゐまいと、蓮長は此問題を提げて、學友の尊海を訪ねた。

十二

『開山の大師が御生前に、天台、眞言二宗の勝劣を、分明にお敎へなされなんだ爲、後の人の迷ひとなッたのでムらうが、それは大事の大戒壇御建立に、諍論の煩はしさを厭はれた故ではムるまいか、大師の御眞意は依憑集に、正しく眞言宗は、法華天台の正義を偸み、大日經に取入れて、理同とせるものなれば、彼の宗は天台宗に落ちたる宗と、お記しあるに見ても顯然と存ずる、然るに慈覺大師入唐の後、誤れる密敎に誑かされ、理同事勝の說を立てらるゝに至ッたは、師說に戻るのみならず、敎義の豹變、宗門の退轉、ゆゝしき謗法の沙汰ではムるまいか』と、蓮長の舌鋒はいつもながら、錐の樣に鋭かッた。

山內に一日の長ある尊海は、靜かに其說を聞流して、宥める樣に微笑みながら、『それも一應は尤もなれど、開山の大師は顯敎に執して、未だ密敎の妙味、眞の醍醐を嘗むるには及ばれなんだ、慈覺大師の之を得らるゝに及んで、顯密兼備はり、滋味全く整ひ、日本天台の特色として、事理圓融の無上宗門となッたのぢや、先づこれを讀んで見なさるが可い』と、慈覺大師の著述に係る、金剛頂經の疏と、蘇悉地經の疏と、各七卷を貸與へた。

眞言三部經の中、大日經の疏は、唐の先輩のがあるから、それに讓ッて餘の二部に就き、同じ心を以て慈覺大師が、承和十三年（八四六）歸朝の後、足懸三年を費して、嘉祥三年に初めて發表したもの。而も尙ほ此疏が、果して佛意に協ふや否やを危み、十四卷全部を寶前に供へて、一七日の祈願を籠めた處、五日目の五更に至ッて、忽ち靈異の夢想を感じた。唯見ると晴渡ッた中天に、赫々たる日輪が懸ッてゐる。大師が弓を把ッて之を射ると、箭は飛んで天に上り、日輪の眞只中を貫くと齊しく、日輪動轉して已に地に落ちんとすると見て、目が覺めた。大師は思はず歡喜の聲を揚げて、我に吉夢があッた、眞言が法華經に勝ッたと作ッた文は、確に佛意に協ふたと云ッて、愈國中に弘通したといふ事が、大師の傳記に殘ッてゐる。

蓮長には此傳記からして、眉唾物と思はれてならなかッた。——一心の血を傾けて、後世に傳ふべき敎を作りながら、これが是非の判斷を、夢に任すとは何事であらう。我と我說を信ずる事が能なかッたのか、それならば尙更深く究めなければならぬ。自分の心には信じながら、他人の信ぜざらん事を虞て、佛意の保障を賴んだとすれば、本尊を弄ぶの譏を免れるであらうか。殊に況んや、見る夢に事を缺いて、日輪を射

ると見たとは何事であらう。正ならば大惡夢、本尊を弄んだ佛罰に依ッて、法滅の凶兆を示されたものではあるまいか。

まことや慈覺大師は、名は傳敎大師の弟子だけれども、法門は全く異端である。而も圓頓の戒ばかり、弟子に似た處を見ると、或ひは蝙蝠の類か。鳥でもなければ鼠でもない。梟禽、破鐸獸が、法華經の父を喰ひ、持者の母を嚙んだのだ。法敵である、佛敵であると、二經の疏を讀めば讀む程、蓮長には一層反感が、深くなるばかりだッた。

十三

蓮長は一日講堂に出て、『法華經と大日經との差別如何』といふ問題に接した。

日頃言はんと欲する處、此時こそと大衆の中から、衝と講主の前に進んで、『申す迄もムりませぬ、法華最第一とは、世尊自ら說かせ給ふ所、此法華經は諸佛如來の秘密の藏とも、諸經の中に於て最も其上に在りとも仰せられ、能く是の經典を受持する事あらん者も、一切衆生の中に於て、亦是れ第一なりともムりまする、されば此法華經こそは、大日經等の衆經の頂上に住し給ふべき正法、醍醐の極說と申さねばなりますまい、眞言三部の經の如きは、申さば生酥の權敎、比べものには相成ませぬ、既に此事は法華、眞言兩宗の源と仰がれ給ふ、龍樹菩薩の大智度論にも、分明に說かれてムりまする、疑ふ餘地がムりませうや』と、席を拍ッて論斷し、進んで慈覺大師の僻說か、傳敎大師の法流を濁した事を難じ、滔々として法統復舊の廣長舌を揮ッたので、一座の會衆は駭然として耳を蔽ふた。蓮長の師事する俊範法印は、當時山內の勢力を二分する、迹門始覺の檀那院派と、本門本覺の慧信院派と、兩派の中の後者に屬し、而も調和と包容とに富む、高德の長者であッたから、蓮長の言說に對しても、敢て壓迫は加へなかッたけれど、三千坊の衆徒は殆んど悉く、慈覺大師の鵜的敎旨に、心醉してゐる者ばかりだッたから、兄弟子の尊海は非常に心配した。

蓮長は形勢を察して、到底自說の容れられさうな、望みのない事を悟ると同時に、豫て山僧の操行に對しても、伍する事を屑しとしなかッたから、旁此機會に於て、山を去らんと決心し、尊海に其意中を告げると、說の異同は兎も角も、才を惜んで切に引留め、暫く鋒鈍を裏んで、只管修學を勸めるので、知己の志默し難く、心ならずも足を停めて、更に未見の書を繙いた。——而して折々山を下ッては、各宗の敎義を討ねる事を念とした。

叡山の山門といふに對抗して、三非の寺門と稱する園城寺は、智證大師（圓珍）の中興に係り、日本天台の別派として、常に延曆寺に對して、一敵國の觀をなしてゐる巨刹であッた。

智證大師は叡山第一世の座主、義眞法師（傳敎大師の高弟で、慈覺大師の法兄）の弟子で、夙に叡山に學んだが、仁壽二年（八五二）入唐して、台、密の義を傳へ、在留七年にして、天安二年歸朝の後、翌貞觀元年園城寺を中興し、暫くこれに住してゐる中、同六年慈覺大師が入寂したので、推されて叡山第四世の

座主になッたのだから、當時は無論山寺の間に、爭ひのある筈はなかッたが、寛平三年(八九一)滅後に及んで、慈覺、智證兩大師の、遺弟間の勢力爭ひから、遂に山門、寺門兩派と、對立するに至ッたのだッた。既に山門派の宗風を閲した蓮長は、當然進んで寺門派の宗風をも、探らなければならなかッた。——蓮長が初めて三井寺に上ッたのは、寛元四年、二十五歲の時と傳へられる。

十四

智證大師は、讃岐の產れで、弘法大師の甥であッた。必ずしも其緣の爲ではなからうけれど、蓮長が園城寺に入ッて、普く經藏を探り、古書舊記を繙讀して、具さに考察した處に依ると、寺門派の宗義は山門派に比して、一層眞言かぶれのしたものであッた。

慈覺大師の說く所は、法華、眞言を理同とし、唯だ事相のみ眞言が、勝るといふ程度であッたが、智證大師に至ッては、進んで顯劣密勝と說き、眞言密敎を以て、法華圓敎の上に位せしめた。これでは天台の座主が、眞言の座主に移ッた樣なものだ。獅子身中の虫にして、已今當の經文を破るは、釋迦、多寶、十方諸佛の怨敵ではないか。

山門、寺門、共に謗法の罪を免れず、兩派兄弟牆に鬩いで、修羅と惡龍と合戰暇なく、園城寺が燒かれば延曆寺も燒かれ、無間地獄を現世に見せて、互に火宅の劫苦を嘗めたも、佛罰其處であッたのだと、蓮長は數多たび嗟嘆しつゝ、間もなく三井を去ッて京に上ッた。

京では五條油小路の書店、天王寺屋淨本の家を定宿と賴んで、更に各宗の探究に進んだ。——眞言、淨土、天台と、既に見了ッた蓮長の知識慾は、更に當時新渡の宗門として、京に根ざしを張りかけた、敎外別傳の禪へ向ッた。

深草に道元和尙を訪ねて、曹洞の宗義を聽き、稻荷山の畔に圓爾和尙を叩いて、臨濟の敎旨をも問ふた。共に近く宋から歸ッて、大智の聞えある禪僧だッた。當時既に唐は亡びて、支那は宋の世になッてゐた。泉涌寺の來迎院には、宋の道隆禪師が滯在して、佛心宗を唱へてゐると聞いたので、蓮長はそれにも就いて、見性成佛の法を修めた。——佛心宗は佛の精神を、經に依らず悟に依ッて、其儘傳へるといふので、日本でいふ禪宗の事であッた。後年鎌倉建長寺の開祖となッたのは、此道隆禪師だッた。

蓮長が最初の志としては、佛法の蘊奧を究める爲、入宋の望を懷いてゐたけれど、此三僧の說を聽いて、彼土に正法の隱れた事を知り、これを斷念したのだとも傳へられる。——斯くて京に在る事前後三年に及んだ。尤も其間に於ても、時々叡山へは歸ッて、山と京との間を、隨時往復してゐたものと察せられる。

寶治二年、二十七歲に及んで、更に古宗硏究の爲、轉じて奈良の舊都に遊んだ。——華嚴、三論、律、法相、俱舍、成實の各宗を、南都の六宗と稱へ、七大寺に依ッて相承され、都の跡は荒れたけれど、佛法はまだ存じてゐた。

蓮長は先づ元興寺に入ッて、三論、成實の宗意を探り、次で興福寺を訪ねて、法相と倶舍とを究め、更に東大寺に華嚴を修め、法隆寺に移ッては、三論、成實の註疏ノ讀み、唐招提寺、西大寺に、所依の四分律を修めて、六宗悉く通じた上、最後に藥師寺に入ッて、再び一切經を閲した。――此上は愈眞言の本據を衝いて、密敎の奥義を叩かんと、更に紀州高野山に向ふた。

十五

延曆二十三年、傳敎大師と同年に入唐した弘法大師は、青龍寺の慧果阿闍梨に就て、眞言密敎の奥旨を受け、傳敎よりは一年遲れて、大同元年(八〇六)歸朝し、翌二年京に上ッて、新たに一宗を開いたので、年齡から云ッても傳敎よりは、後輩たるを免れなかッた。――大同二年は弘法が三十四歳で、傳敎は四十一歳だッた。

弘仁七年(八一六)、嵯峨天皇から高野山を賜ふて、最後隱栖の地と定めたのが、金剛峯寺の開基であッたが、越えて同十三年、傳敎大師の入定と共に、禁裏に於ける勢力は、自然弘法大師に移ッて、翌十四年東寺の長者に推され、號を眞言和尙と賜ふに及んで、新たに密敎專修の法場を起し、鎭護國家の靈場として、勢ひ叡山を凌ぐに至ッた。――事實敎理や修行よりも、直接感覺に愬へる、儀禮、修法の莊嚴さに於ては、遙かに眞言の方が、人目を惹く力に富んだから、特に華麗を好む宮廷の、貴族者流の間に歡迎されたので、天台の慈覺や智證等に、いつしか此風が染みて、更に之に對抗する爲、弘法よりも一層新しい、密敎の事相を傳へて來たのも、强ち無理ではなかッたとも云へる。

其弘法大師は、一代聖敎の優劣を判じて、第一眞言大日經、第二華嚴、第三法華涅槃と定め、法華經は阿含、方等、般若等に對すれば、眞實の經であるけれど、華嚴、大日に比べる時は、戲論に過ぎぬと斷じてゐる。敎主釋尊は、佛には相違ないけれど、大日如來に向ふ時は、無明の邊域と云ッて、皇帝と俘囚との差だと說いたのだ。

蓮長は高野山に上ッて、普く書庫の經卷を繙いたけれど、豫て信ずる法華最第一、諸經中王との確信を、覆へす樣な明文には、遂に接する事が能なかッた。――此間の消息に就て、後年眞言宗の徒は、東寺に存する弘法大師の遺法として、密敎專修の道場に、異宗者の雜住を禁じてあッた事を楯に、日蓮は此障碍の爲、眞の密敎を學ぶ事が能なかッた者とし、異論の動機を學閥の爭ひと、誣ふる者もあッたけれど、日蓮をして云はしむれば、其東寺さへ弘法の歿後は、中心を仁和寺に奪はれて、寺寶の大部分を迄、御室へ持去られたのみならず、戒は傳敎相傳の弟子として、叡山の圓頓戒を受ける事になッてゐる。又入定の高野山でも、本寺、傳法院の二派に別れて、古義と新義と、例へば叡山、園城の如く、晝夜合戰の絶間がない。これ皆謗法の佛罰で、糞を集めて栴檀となすとも、燒く時は唯糞の香ばかり、大妄語を集めて佛法と號するとも、但だ無間大城たる現證だと、『報恩鈔』に喝破してある。

密敎の眞價も解ッたと信じて、山を下ッた蓮長は、途を泉州に取ッて、岸和田から國府に赴く途中、江

川太郎左衞門吉久と道伴になり、國府の家に請ぜられて、其供養を受けたと傳へられる。

既に新古の十宗を渉ッて、日本佛敎の總てを盡した蓮長は、更に途を難波に轉じて、佛法最初の天王寺へと志した。

十六

推古天皇の元年（五九三）、聖德太子に依ッて建立された四天王寺は、日本最古の佛寺として、歷朝の尊崇淺からず、當時尙ほ一般佛學の道場として、百濟傳來の古經卷をも、多く蓄へてゐた。――蓮長は乞ふて其經藏に入り、普く秘書を閲覽した後、更に河內に入ッて、石川郡科長の里にある、聖德太子の御陵を拜した。

太子は用明天皇の皇子で、日本佛敎の開祖とも仰ぎ奉るべき方、夙に法華經を講じ給ひ、其『法華經義疏』は、今に尙ほ傳はッて、世に南岳大師の後身と稱せられ給ふた。――南岳大師は天台大師の師で、太子と天台大師とは、實に時を同じうして、和漢に正法を說かせられたのだッた。

蓮長は廟前に拜跪して、滿腔の抱負を奉告し、七日七夜の參籠中に、靈夢の感應を得たと傳へられる。――既に佛法一通り修め盡した蓮長は、再び山城に引返して、男山八幡に參詣の後、更に和漢の學を修める爲、京に入ッて天王寺屋淨本に、然るべき儒家の紹介を賴んだ。

『それなれば恰度好い方がムりまする、西八條東寺のほとりに、大學三郎能本と申された、博識多才の上に、能文の聞えも高く、常に雲上の方々とお交りなされ、時には仙洞御所へも召されて、經史百家の書を御進講なされると承はりまする、幸ひ手前も御入懇に願ひ居りますれば、何時でも御紹介せ仕りませう』と、淨本は快く承け入れて、即座に添書を認めて與れたので、蓮長は大いに喜んで、早速能本の宅を訪れた。

旨を通じて導かるゝ儘に、主人の部屋へ通ッて見ると、驚いた。思はず聲を亢ませて、『比企殿ではムりませぬか』と、いきなり呼かけたので、能本も意外な顏をして、暫く凝乎と目を睜ッた。

『お見逸れ申して相濟まぬが、誰方でムッたな』、『久しくお目に懸りませねば、お見忘れも御無理はムりませぬ、小湊の善日でムりまするよ』、『何、善日殿、おゝ、さう云へば貴名殿の、何さまこれは珍しい、確かに幼顏は見覺え申す、先づ〳〵』と、俄に打解けて席を讓り、二人は懷しい奇遇の喜びに、そゞろ懷舊の涙を交へた。

大學三郎能本は、將軍賴朝の乳母子、比企判官能員の末子で、源家譜代の重臣であッたが、能員の女若狹局が、二代將軍賴家の寵を得て、一幡、竹姬の二子女を產むに及び、尼將軍政子は、外戚の勢威が北條氏を離れて、比企家に移らん事を憂へ、竊に謀ッて關西の地頭職を、賴家の弟千幡に分ち、一幡には唯關東の地頭職と、守護職とを讓る事にしたので、能員は大いに憤慨し、不法を賴家に訴へて、北條氏討滅の謀計を勸めたのを、時政が早くも探り知ッて、それとなく能員を名越の邸に招き、不意に之を殺した上、

軍兵を催して比企ヶ谷を襲ひ、遂に其一族を滅ぼした、――それは建仁三年(一二〇三)九月で、同時に世子の一幡も、富士の卷狩で有名な、仁田四郎忠常も殺された。

時に三郎は僅かに三歳、まだ頑是ない者を殺す憐さに、一門の僧伯耆坊が、百方命乞ひの結果、漸く死一等を減じて、安房へ流罪に處せられた。

十七

同じ境遇にある重忠夫婦が、流人の孤兒を憐んで、我子の如く劬はッてやッたのは、さもあるべき事であッた。

承久元年正月、實朝公曉に弑せられて、源氏滅亡の後、北條氏が政略上、京から當時三歳の藤原頼經を迎へて、將軍職に擁立したのは、其年七月だッたが、寛喜二年頼經十三歳の時、簾中として選ばれたのは、頼家の忘れ形見で、十五も年上の竹姫だッた。曩に三郎の命乞をした伯耆坊は、更に其緣に縋ッて、化條家の手前は當人を、出家させる體に云ひ拵へ、京に上して儒學を修めしめた。以來比企の姓を憚ッて、大學三郎能本と稱し、蔚然たる大家となッてゐるのだッた。――能本は蓮長に比べると、二十二歳の年長であッたから、當時の善日麿は、まだ九つの垂髫兒だッた。

『何からお談し申さうやら、上洛以來は打絶えて、房州の消息をも承はらぬが、一方ならぬお世話を蒙ッた、御兩親は御健勝か、お懐しう存じ申す』と、鬢髪に既や霜を交へた能本が、滿眼に涙を浮べて、幼少時代の追懐に、聲さへ顫はせて訊ねるのだッた。蓮長も暫しは涙に暮れて、兎角の挨拶も前後になッた。

能本の懇な待遇に、蓮長も喜んで其指導を受け、四書五經から諸子百家の書と、絶倫の精力に任せて、僅かの間に書庫の藏書を、悉く讀破した。――後年大小の著述が、氣魄の雄大、引證の該博はいふ迄もなく、單に文章のみとしても、堂々たる風格を備へてゐるのは、此能本に負ふ處が尠くなかッた。

佛儒兩道に達した蓮長は、更に國風を學ぶ爲、冷泉爲家の門にも遊んだ。爲家が京極黄門(定家卿)の子として、和歌の名家である事はいふ迄もない。諸藝諸學、之くとして可ならざるなき蓮長は、又筆札にも長じて、師の爲家から古の三蹟にも越えたと激賞され、秘藏の軸や家寶の什器に、標題或ひは箱書を、需められた事も屢だッた。

學ぶべきを學び、修むべきを總て修めた蓮長は、再び叡山に歸ッて、愈各宗の比較考察に取懸ッた。而して歸結する處は、やはり法華經以外には出なかッた。――諸經中王、最爲第一、これを除いて釋尊の、正意に適ふべき經典はないと、確信益堅固になると同時に、多年の大懐疑が、朝日の前の淡雪と消えると、次は一宗建立の準備時代に移らなければならなかッた。――日蓮は最後迄、自ら何宗とは云はず、唯だ『法華經の行者』と稱して、一生をこれに捧げたが、其不言の宗門が、直ちに立派な一宗であッた。

蓮長は横川の定光院に入ッて、改めて天台三大部の隨一たる、『摩訶止觀』の玩讀に耽ッた。――摩訶止觀は教主の再現と迄云はれた、天台大師最終の說法で、當宗正依の根本聖典、法華圓妙の理を、餘蘊なく

説明したもので、辭句の端麗、理義の深玄、而して感化の偉大なる事は、古今を貫き東西に渉ッて、佛教第一書と推稱されてゐる、一部十卷の大著述である。

十八

摩訶止觀を讀んで、天台大師の妙理に心服した蓮長は、又同じ意味に於て、傳教大師の宏謨を追想せずにはゐられなかッた。

『正像稍過ぎ已ッて、末法太だ近きにあり、法華一乘の機、今正しく是れ其時』と喝破した、傳教大師の抱負は、いふ迄もなく佛教の統一であッた。

佛滅後の教法變遷期を、正法千年、末法萬年に分つ事は、釋尊自らの讖言で、更に之を五期に分ち、第一期の五百歳を解脫堅固、第二期の五百歳を禪定堅固、第三期の五百歳を讀誦多聞堅固、第四期の五百歳を多造塔寺堅固、第五期の五百歳を鬪諍堅固とし、且これを白法隱沒の時となす事も、大集經に說かせらるゝ處である。

正法の千年は、佛の遺教未だ衰へず、人に解脫の心があり、稍怠ッても尙禪定の行ひがある。像法の千年は、戒法稍弛むと雖も、尙ほ信は篤く、讀誦多聞、寺塔建立に依ッて功德を積む、即ち正法の面影を映す像法である。末法に入ッては鬪諍を事とし、人に惡心强く、白法隱沒して、爭亂頻りに起るといふのである。——堅固とは的確にして、違はず、誤らずとの謂である。

佛陀の入滅を、周の昭王の二十四年（神武紀元前二百八十九年）とする說に隨ふと、正法の終りは我垂仁天皇の八十年（西紀五一）で、像法の終りは、後冷泉天皇の永承六年（一〇五一）に當る。而して日本へ百濟から、初めて佛像經卷を齎した、欽明天皇の十三年（五五二）は、恰も第三期の讀誦多聞から、第四期の多造塔寺に移る境目、像法の半程であッた。

佛讖聊かも違はず、第三期の讀誦多聞には、天竺に漢土に、佛學盛に行はれ、第四期の多造塔寺には、唐土に日本に、堂塔伽藍が頻りに建立された。——天台大師が一切經の中に、法華第一、涅槃第二、華嚴第三と立てゝ、南北諸師の大迫害を受け、陳王の面前に、悉く之れを責破して、敎主の再現と迄褒められたのは、日本に佛法の渡來したのと、殆んど同じ時代であッた。傳敎大師が其遺風を傳へて、日本一國皆謗法と、南都の六宗を難じて、七大寺の碩學十四人と、高雄寺に大法論を催し、桓武天皇御前に於て首尾克くこれを析伏し、相手に謝表を奉らしめた、延曆二十一年（八〇二）は、第四期に入ッて二百五十年、剩す處僅かに二百餘年で、正像の二千年は盡き、將に萬年の末法に入らんとする時であッた。

それから更に五百年、像法疾くに過ぎて、末法の第五期、鬪諍堅固の時代に入ッて、各宗諸寺の爭ひはいふに及ばず、同じ天台を奉ずると稱する、山門寺門の間にさへ、干戈歇む時なく、殊に保元、平治の戰ひ以來、天下麻の如くに亂れて、源平の合戰、平家の末路、源家骨肉の爭ひから、承久の廢立に及んで、佛法王法一時に滅びた程の淺猿しさを思ふと、餘りに炳焉たる佛讖の的中に、蓮長は悚然として、一度は

胸も潰れる程に感じたであらう。――勇猛心は其底から、油然として湧き起ッた。

十九

『白法隠没すれば、妙法流布すべし』とは、同じく佛陀の讖言である。妙法とはいふ迄もなく、妙法蓮華經である。

法華經を正しく云へば妙法蓮華經、一部八卷二十八品、金玉の文字六萬九千三百八十四、一代聖教の結晶として、諸經中の王である事は、釋尊自ら說かせられた通りであるが、客觀的にこれを觀ると、實に佛の人格を中心とした、一大詩篇であると同時に、又一大管絃樂であると云はれてゐる。

四十餘年未顯眞實、而して初めて其眞實を顯はし給ふたのが、此法華經である。――天竺は摩竭陀國の王舍城を距る東北十里、其形鷲に似たるを以て、靈鷲山と名づけられ、略して靈山とも云ふ。釋尊が晩年の心血を濺いで、八年間法華經を說かれたのは、此山だッた。

經に依ると佛陀が、先づ此說法を始めんとして、暫く冥想に耽ッてゐる時、忽ち額上から光明を放ッて、上は最高の佛天から、下は最底の地獄迄、十界十方を遍く照らし、虛空に華降り、靈香薰じて、圍繞の諸弟子を驚かしたとある。

其時佛陀は、靜かに嚴かに目を開いて、三つの方便の由來を說いた。第一智解學問を求める、聲聞の弟子の爲には理解を說き、第二自ら靜思冥想して、安きを求める緣覺の爲には、安穩寂靜の法を授け、第三力行邁進、自ら救ふと共に他をも救はうとする、菩薩の爲には修行道を示し來ッた。三つの道が三乘であるが、最高の理想としては、進んで各自佛となるの一乘あるのみである。此一乘道――即ち眞實道を示す爲に、法華經を說くと云はれるのだッた。

三界を火宅と知らず、無心に遊んでゐる子等の爲に、美しう飾ッた三つの車を見せて、危い中から救ひ出す、車は三乘の方便であるが、目的はあらゆる患難を脫れて、佛果を遂げしむるにある。『今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり、而も今此處には、諸の患難多し、唯だ我れ一人のみ能く救護を爲す』といふのが、佛陀の宣言として有名な、譬喩品第三の『今此三界』の文である。

有福な長者の子が、放蕩の結果家出をして、家督相續の意識を失ッた。それ〴〵漸く連戾ッて、種々の敎育を施し、漸次自覺に導いてやる。一切衆生が佛子である事を忘れて、種々の途に迷ッてゐる。之を誘導啓發して、本然の佛性に立歸らしめる。長者窮子の譬喩を引くと、數多の諸弟子は喜んで、『我等昔より以來、眞に是れ佛子なりき、然るに但だ小法を樂ひにき、若し我等にして、大を樂ふの心あらましかば、佛は則ち我が爲に、大乘の法を說き給ひなん』と云ッた。

佛陀の說法は更に進んで、一閻浮提（全世界）の草木は、幹の大小、花葉の種類、千差萬別であるけれど、一度雨に遭ふ時は、大小百千の草木、皆其濕ひを受けて、雨は一味の雨ながら、濕ふものは各自の、品に應じて茂り榮える。佛の智水は一味だけれど、衆生の受ける心に應じて、それ〴〵悟りの花を開き、

佛果を遂げると說かれるのだッた。

二十

三界を皆我が有とし、一切衆生を吾が子として、唯だ我れ一人能く救ひ護るといひ、一味の法水に衆生の佛果を遂けしめるといふ、廣大無邊の力を示す爲に、佛陀は先づ其大弟子に對して、將來孰れも無上覺の、佛に成り得る保證を與へた。

將來の理想を力づけるには、過去に根柢がなくてはならぬ。佛陀はこゝに於て、自ら過去の修行を語り、伽耶城外の菩提樹下に、正覺を得てから四十餘年、其久しい間俱に修行し來ッた、諸弟子の宿種は今熟しつゝあるので、過去に蒔いて置いた種が、現在に熟するのであれば、更に將來に及ぼして、佛果成道の疑ひなき事は、理路の當然であるべき筈である。大弟子が既に然りとすれば、他の諸弟子は勿論、一切衆生に於ても、其資格のある事は同じである、それを知らずして自ら卑しめるのは、禁に無上の寶珠が縫込んである事を忘れて、徒らに貧を愬へてゐる樣なものだと警告してある。——而して如何にせば成佛の大理想が、成就し得られるかといふと、唯だ法華經を信じ、法華經を實行せよである。

佛は更に大衆の上首、藥王菩薩を顧みて、『我が滅度の後に、能く竊かに一人の爲に、法華經の一句をだにも說かんに、當に知るべし、斯の人は則ち如來の使、如來の遣はし給ふ處にして、如來の事を行ふなり』と諭し、又た『而も此經は、如來の現在にすら、猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや』とも警められた。——此時忽然として空中に大寶塔が現はれ、塔中に聲あッて、『妙法華經皆是眞實』と、大音に證明したのは、東方寶淨世界の主多寶佛であッた。續いて十方分身の諸佛も集まり、孰れもこれに裏書をした。

佛の最大怨敵として、極惡人の標本にされた、提婆達多も此時救はれて、未來は天王如來となる事を保證された。八歲の龍女が珠を捧げて、刹那に成佛を遂けたのも、此時だッた。

これ等大神變の光景に感奮した諸弟子は、必ず佛の滅後に於て、各自法華經弘通の任に當り、末世の惡德と鬪はんと決心し、中にも彌勒菩薩の如きは、身を以て法戰の難難に當らん事を願ふたが、佛はこれを許さずして、却ッて大地の底から、無數の菩薩を召出した。——地上の諸弟子は驚いて、其何人であるかを問ふと、佛はにこやかに、孰れも久遠以來の弟子で、末法に法華經を弘布すべき行者だと答へた。これを地涌の菩薩と名づけ、無邊行、淨行、安立行と共に、四人の上首の中、第一位にゐたのが上行菩薩であッた。

佛陀の本體は、愈明かになッた。現在の現はれは、假の現はれであッて、則ち始覺の佛である。本覺の佛は、久遠無量の過去以來の佛、即ち無始の本佛であると同時に、地涌の菩薩も亦、久遠以來の佛弟子で、今釋尊の滅度が近づく前に現はれ、今後も時に應じて出で、法華經弘通の使命を帶びるといふのである。——日蓮が其上首上行菩薩を以て任ずるに至ッたのは、此點に因由したのであッた。

久遠無始の本佛は、同時にまた盡未來不滅の本佛であらねばならぬ。

假に現身の一生を終り、涅槃に入るの狀を示すのは、決して生命の終りではない。現世諸の衆生をして、佛陀が現前の感化に馴れ、信仰に懈怠を生じないやう、死に依ッて彼等の心を驚かし、油斷を警め、自ら猛省し、奮進せしめる爲の方便である。即ち不滅の滅を示すのであッて、衆生の信心さへ純一であッたなら、佛陀は常住に其人の頭に宿り、何時でも其人に現前して、融通自在に法を說く、久遠本佛の由來を明かにしたのが、有名な如來壽量品第十六、法華經の心髓である。——餘の十二品は孰れも、本佛法門の永續流通に就ての說法で、これを流通分と名づける。

一代聖敎の中、三乘の方便を說くのが小乘、一乘の成佛を說くのが權大乘、此經をさへ唱へれば、二乘も共に成佛すると說かれたのが、法華經の特色で、即ち實大乘たる所以である。

法華經の中にも、地涌の菩薩の現はれる前、現實世界に於ける始覺の佛のみを見てゐる間の、十四品の說法を迹門といひ、久遠本覺の佛として、常住不滅の本體を顯示されてからの十四品を、稱して本門の法華經といふ。——白法隱沒して、當に妙法の出べき時、進んでこれを一閻浮提に、廣宣流布すべき者は誰であらう。

迹門法華經は迹化の大士觀世音菩薩、藥王菩薩に付屬して、正像の衆生を化度せしめ給ふた。觀世音菩薩は南岳大師となり、更に聖德太子と現はれ、藥王菩薩は天台大師となり、次で傳敎大師と現はれて、既に世尊の付屬に答へ給ふた。

本門法華經を流布して、末法の衆生を救護すべき、本化の菩薩は地下にある。末法に法華經を弘むる行者あらば、上行菩薩と思へとは、釋尊の宣はせられた所だが、其菩薩は何所に現はれたか。天竺にも見なければ、漢土にも聞かぬ。

彌勒菩薩の瑜伽論には『東方に小國あり、其中唯だ大乘の種性のみあり』とある。肇公の觀經疏には、『佛日西に入ッて、遺燿將に東に及ばんとす、此經典東北に緣あり、汝愼んで傳弘せよ』とある。西天の天竺は未申の方、東方の日本國は丑寅に當る、東北に緣ありとは、豈日本國の事ではないか。遵式の筆に、『始め西より傳ふ、猶ほ月の生ずるが如く、今復た東より返る、猶ほ日の昇るが如し』とある。正像の二千年には、西より東に流れる、夕月の西の空から始まるが如く、末法の五百年には、東から西に進む、朝日の東天から出ると異らぬ。——これ等の文を讀んだ時、日蓮の兩眼からは、涙瀧の如く、一身悅びに潤ふたと、自記の文書に殘ッてゐる。

時は末法の初期、地は東方の日本、有緣の菩薩は何處の大地から涌出して、如何に法華經を弘通するであらう。如來の使、法華經の行者、末法萬年の衆生を救ふべき、上行菩薩とは抑も誰か。蓮長の全身は、沸返る血の爲めに、そゞろ肉の躍るを覺えた。

三三

『如來の現在にすら、猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや』と說かれた、法華經を行ぜんとするには、不惜

身命の勇氣がなくてはならぬ。而も如來の滅後に於て、能く此經を受持し、讀誦し、供養し、他人の爲に說かん者は、如來則ち衣を以て、之を覆ひ給はんと云はれてゐる。

自ら上行菩薩の化現、末法に於ける法華經の大導師たる確信と、抱負とを得た蓮長は、佛陀の此大慈悲に對して、また新たなる感涙に、咽ばずにはゐられなかッた。――更に法華經の行者たらん者は、如來の室に入り、如來の衣を着け、如來の座に坐して、廣く此經を說かねばならぬ。如來の室とは、一切衆生の中の大慈悲、如來の衣とは、柔和忍辱心、如來の座とは一切法空、即ち超世間の車である。『是の中に安住して、然して後に、懈怠せざる心を以て、諸の菩薩及び四衆の爲に、廣く是の法華經を說くべし』とあるのが、佛滅後傳道の心得である。自覺と、抱負と、感激との後に、蓮長が最も深く感じたのは、此大責任であッた。

妙法弘布の大責任、これを果す爲の大覺悟、不惜身命の勇猛心は、既に全身に漲り渡ッた。此上の問題は、如何なる方法、形式に據ッて、開宣の途を講ずべきか、先づ法幢を揭げるに、何れの地を選ぶべきかであッた。京洛は王城の地であるけれど、國家の實勢力は、夙く轉じて鎌倉に移ッてゐる。叡山の鎭護戒壇といふも、實は形骸に過ぎぬ。東國に生れて、東國に育ッて、東國雄大の氣宇を備へた蓮長が、志を東國に向けたのは、自然の勢であッた。

牛國の安房は古から、天照太神垂跡の地と傳へられてゐる。天津の太神宮には、右幕下賴朝が、神田を寄附した事もあり、地頭の東條景信は、伊勢の御厨の給人として、近鄕に威勢を揮ッてゐた。東方有緣の經典、朝日の東天より出るが如しとある、眞佛敎の開宣に、日本國中最も早く日の出を拜する、故鄕の太平洋岸を選ぶ事は、蓮長に取ッて又最も、意義の深い事であッたに相違ない。

何を措いても、一旦鄕里の安房へ歸らう。斯く決心した蓮長は、最早一刻の猶豫もなく、師の俊範を始め、尊海以下多年の交友に別れを告げて、愈住馴れた叡山を辭した。――時は建長五年(一二五三)彌生の初め、山上の春はまだ寒かッたけれど、麓の花は今を盛りに、鳥の湖も霞んでゐた。蓮長は三十三歲だッた。

勢田の長橋に承久の昔を偲んで、王師敗衂の跡を弔ひ、更に路を伊勢に取ッて、宇治山田の相の山、天台宗常明寺に投じて、齋戒沐浴の上、皇太神宮の寶前に額づいて、一宗開創の大願を叙べ、神明の擁護を祈ッたとも傳へられる。――當時蓮長が、身を淨めたと稱せられる泉は、阿伽井の水と名づけられて、常明寺の境內に殘ッてゐるが、此傳說は足利時代に始まッたので、今其眞否を確かめる事は能ぬ。

東海道の旅に幾日かを費して、十餘年振に蓮長が、故鄕の土を踏んだのは、散急ぐ花の葉となッた、夏の初めの四月であッた。

二三

久し振に歸省した吾子が、見違へるばかりの風丰に接して、年老いた兩親の喜びはいふ迄もなかッた。

一夜は夜と共に語り明して、翌日は早々清澄に上ッた。

舊師の道善を始め、先輩だッた淨顯、義淨、其他同宿の諸僧は、宛ら海外の留學からでも歸ッた者の樣に、目を欹てて喜び迎へた。一日隔て父の重忠も、寺からの使を受けて登山した。――齡既に六十に達して、退隱の志を抱いてゐた道善は、此機會に於て蓮長に、寺を讓り度いと思ひ立ち、先づ重忠に內意を告げる爲、態々呼び迎へたのだッた。

多くの同輩、先輩を超えて、吾子が意外の拔擢に遇ふ事を、親の身として喜ばぬ筈はなかッた、而して翌日下山した蓮長に、早速其旨を告げると、二つ返事で承知すると思ひの外、蓮長は徐に法衣の襟を搔合せた。

『思召は忝けなう厶りまするが、其儀は何卒惡からず、お斷りを願ひ度う存じまする』、『何と云やる』と、色を變へたのは父よりも、寧ろ母の梅菊であッた。

『親の恩は須彌よりも高く、師の恩は蒼海よりも深い事は、よう存じて居りまする、其御恩の萬分一なりとも報じまするには、如何なる仰せにも背いては、相成らぬ筈で厶りますれど、私には今大願が厶りまするゆゑ、其願業を遂げまする爲には、父上、母上、師の坊の思召に、暫く背きまする事も、是非が厶りませぬ、恩を棄てゝ無爲に入るが、眞實の報恩者と、佛の敎にも厶りますれば、只今の不孝は何卒お赦し下さりませ』、『うむ、而て其大願といふのは、どの樣な事ぢやな』、『末法の世に、正法を說く事で厶りまする』、『何、それでは今の佛法を、正法でないといふのか』、『左樣で厶ります、八宗十宗と分れて居りまする佛法に、一宗として邪法でないものは厶りませぬ』、『はてさて、恐ろしい事をいふ、其樣な事を何處で習ふて來たのぢや』、『初めて國を出ましてから、十五年の學問修行に、一切の經文を讀み究め、眞實の正法を確かめて厶りまする、それは私の才覺では厶りませぬ、釋迦牟尼世尊が明かに、說き置かれた事で厶りますれば、決して誤りは厶りませぬ』、『ふうむ、それ程の學問をして來たといふなら、豈夫間違ひはあるまいが、一體其正法を、どの樣にして弘めやうといふのぢや』、『それは近々の中、清澄のお山に於て、披露致します積りゆゑ、何卒御覽下さりませ、此大願の前には、一箇寺の住職如きは、大風の前の塵も同樣、物の數でも厶りませぬ』と、心に誠が籠れば、聲にも力が溢れて、磐石の決意は、動かすべくも見えなかッた。

初めは唯だ驚きの目を睜ッて、氣遣はしげに聽いてゐた梅菊も、漸次に壓せられたやうになッて、太息と共に深く俛首れた。重忠にも制する力はなかッた。

再び山に上ッた蓮長は、其月廿二日から一七日の間、山頂の森に籠ッて水行を行ひ、滿願の廿八日を以て、太平洋上の旭日を證人に、壯大無比な開敎の題目を唱へたのだッた。――『妙法蓮華經』の五字が、法華經二十八品の結晶である事をいふ迄もない。

鎌倉入

一

清澄寺の持佛堂には、朝から多數の僧俗が、續々と押寄せて來て、午の刻近い頃には、さしもに廣い堂内も、人の頭で一杯になッてゐた。地頭の東條左衞門景信迄が、從者を連れてやッて來た。佛法教學の中心たる、叡山、京洛、南都、高野と、十餘年に亘ッて普く遊歷し、具さに修行を經て來た蓮長が、歸山後初めての說敎を、此日正午の刻から行ふ事は、豫て檀信徒を始め、近鄰一圓に觸出されてゐたのだッた。

高座は南面して設けられ、上手、下手、前面には、師の道善を始め、年長の義淨、淨顯、淨圓以下、一山の衆徒が居流れて、法皷は蓼々と響き渡ッた。

新歸來者の風采を想望して、一同の眼を睜る前へ、蓮長は質素な薄鼠の法衣で、諍抑の態度は昔と瀧らず、師を始め一同に、會釋をしながら座に上ッたが、天性魁偉の風格は、自ら滿場を壓して、颯爽の氣が四邊を拂ッた。聽衆は唾を嚥んだ。

蓮長の法談は直往邁進であッた。佛法多門なるが中に、法華最第一と先づ喝破して、それから諄々と說き進んだ。

『釋迦牟尼世尊一代の聖敎、五千七千の經文には、各〳〵特長、功德もあるが、一切經の眼目は、靈山八年の法華經に集まる、譬へば諸々の小河大河が、一つの大海に濺ぐやうなものぢや、既に無量義經に於て、四十餘年未顯眞實と、明かに說かれてある通り、法華以前の諸經、即ち爾前の經文は、孰れも皆方便權敎で、佛の眞實意ではない、如來の敎は醫者の藥で、輕病は凡藥にも癒す事が能るなれど、重病となると仙藥でなうては功驗が見えぬ、今末法の世となッて、衆生の罪障益深く、濁亂愈加はる時節は、病人ならば瀕死の重體ぢや、一切經中の仙藥を用ひねば、成佛得道は思ひも寄らぬ、末法萬年の世を救ふ經文として、法華經を定め置かれたのは、これが爲ぢや、然るに今の諸宗門は、皆此根本を忘れて、孰れも枝葉の末に走ッて居る、小乘の諸經は小河の如く、露と、滴と、井と、渠とは收めても、大河を收める事は能ぬ、權大乘の諸經は大河の如く、露から小河迄は收めても、大海を收める事は能ぬ、法華經は此一切の水を、一滴も漏さぬ大海ぢや、諸の小河大河が、各己れを大なりと梅して、大海の大を謗るのが、今の佛法諸宗門ぢや、謗法の罪は墮地獄の因、これを救はんが爲に現はるゝ、末法の行者は斯くいふ蓮長ぢや、正直に方便を捨てゝ、權門の理を破り、身命を愛せずして、但だ無上道を惜む、如來の敎が直ちに此、蓮長の大覺悟となッて、今日の高座へは上らしめられたのぢや、方々よくお聽きなされい』と、力强い調子で、滔々と述べ來ッたのが、一寸句を切ッて座中を見渡すと、大衆の中には既や幾分、不安の色を浮べた者もあッたが、まだ大體は靜肅に、一句も漏さじと聽耳を立てゝゐた。――慈悲大師の中興以來、天台眞言

の清澄寺で、法華經の有難さは、多少聞知ッてもゐるからだッた。

二

壇上の蓮長は、益〻嚴肅な態度になッて、『抑も此法華經は、敎主釋尊、在世の最後に世に示されて、諸佛如來の秘密の藏、諸經の中の最上位と說かれ、我滅度の後、後の五百歲の中に廣宣流布して、閻浮提に斷絕せしむる勿と仰せられた、後の五百歲とは、正法像法二千年過ぎて、末法の初めの五百年、恰度今が其時ぢや、佛滅後千五百年、震旦(支那)にあッては天台大師、佛說に依ッて此眞義を明し給ひ、更に三百年の後、我朝にあッては叡山の傳敎大師、止觀の法を相承して、日本天台の礎を築かれた、正像二千年の間に、此法華經を行して、眞實の佛法を弘通せられたのは、天台、傳敎の兩大師と、敎主釋尊との三人ばかりであッた、外典にさへ曰く、聖人は一千年に一度び出で、賢人は五百年に一度び出づ、黃河は經淸流れを分けて、五百年には半河淸み、千年には共に淸むと、然るに我日本は、傳敎大師の時ばかり、叡山に正法はあッたれど、其後の有樣は何うぢや、今は何うぢや、理同事勝抔と唱へて、眞言を法華の上に置き、正義眞理を混亂して、宗門の退轉を來させた、慈覺大師は取も直さず、獅子心中の蟲ではないか』と、玆迄說き進んだ時、聽衆の面上には、さッと怒の色が現はれた。

慈覺大師が、淸澄寺の中興である事は、前に述べた。開山の不思議律師は、もと〳〵去來不明の雲水、中興とは云ッても事實に於て、慈覺大師は開創者と、同樣に仰がるべき地位にある人、それを獅子身中の蟲と罵られて、檀信の徒が且驚き、且怒ッたのに無理はなかッた。

無禮と呟き、不埒と口走る者もあッた。列座の中でも淨圓の如きは、赫となッて肱を張ッたが、蓮長は騷ぐ氣色もなく、聽衆の聊か鎭まるを待ッて、更に析伏の舌鋒を鋭うした。

『弘法、慈覺、智證等、眞言師の謗法はまだしも、玆に最も見逃しのならぬ、大謗法の大邪義、無間墮地獄の業といふは、近頃諸方に行はるゝ、法然房の念佛宗ぢや、抑も此他力宗門は』と、一段調子を張上げた時、忽ち堂の一角から、砌鐘の樣な聲が起ッて『默れッ』とばかり、俗衆の上座にぬッくと立ッたのは、地頭の東條景信だッた。大衆は時を待ち得たやうに、わッと云ッて聲を合せた。

『法印、法印、蓮長が法談お止めなされ』と、滿面に朱を濺いで、道善を呼かけた景信の手には、刀の柄が摑まれてゐた。人の好い道善は、唯だおろ〳〵するばかりであッた。

蓮長は其樣な中にあッて、聊か臆する色もなく、益〻聲に力を籠めて、念佛析破の說法を續けるのであッたが、さしもの大音聲も、大衆の喧囂に遮られて、杜切れ〳〵にしか聞えなかッた。淨圓は堪り兼て、高座の蓮長を打ちにかゝッた。

蓮長はそれでも動じなかッた。强盛に聲を張上げて、『眞言は畢竟亡國の敎、念佛は無間地獄の業ぢや』と叫んだ。――景信は太刀に反を打たせて、つか〳〵と高座へ詰め寄ッた。

三

『狂氣坊主、これへ出え、成敗して呉れる』、『まア〳〵』と、慌てゝ止めに入ッたのは道善だッた。淨圓は猿臂を伸して、蓮長を高座から引摺り卸さうとした。

『淨圓、其方も靜まれ、左衞門殿、お靜まり下され、まこと蓮長は、亂心致した者でムらう、斯樣な者をお手にかけられては、却ッてお刀の穢れ、また佛前に血を流しまする事は、出家の身として見るに忍びませぬゆゑ、先づ〳〵、暫くお待ち下され、其方も待て』、『ぢやと申して、餘りと云へば言語道斷、當山中興の大師を、獅子身中の蟲杯と、其口を引裂いて、覿面に佛罰を見せませいでは』、『念佛無間とはよく申した、其舌の根を斷ち切ッて、我とおのれが無間地獄へ、墮ちて行く圖を見せて呉れるわ』、『お腹立は御尤も、其方のいふのも無理ではないが、亂心者を相手にすると、相手にする者迄が、亂心者に見えるの譬、何卒此場は穩便に、暫く手前へお任せ下され、任せて呉れ、決して惡うは計らひませぬ』、『惡うは計らはぬとは、蓮長が事か、我等が事か』、『固より斯樣な者を、弟子に致したは手前の過り、屹度成敗は致しまするが、それにしても狂氣か正氣か、これにて確かめますする間、一刻の御猶豫を願ひまする』と、憎い弟子にもやさしい道善が、身を以て庇護ふのを見ると、遉に一徹な景信も、强てといふ事は能なかッた。淨圓も腕を撫ッて控へた。

『折角法印が、それ程に申さるゝなら、暫くの猶豫は致さうが、まこと本心と定まッたら、此儘には過させませぬぞ』、『宜しうムるとも、只今の樣な惡口を、正氣で申す樣な者なら、弟子とも思はず、蓮長とも申させませぬ、方々はお宥しなされても、此道善が赦しませぬわい』と、老眼に涙をさへ浮べながら、座から卸した蓮長を、膝元近く引据ゑた。

『一體何としたものぢや、學問に慢じて氣が狂ふたか、それとも天魔に魅られたか、護國の眞言を亡國の、欣求淨土の念佛を無間のと、豈夫本心ではあるまい、早く正氣に立返ッて、左衞門殿を始め、參會の方々に手をついて詫るが可い、さすれば此道善が、どの樣にも執成してやらう程に』と、子供に箸を持添へてやる樣に、諄々と賺し宥めるけれど、蓮長の聞入れる筈はなかッた。

『お志は忝なうムりまするが、此蓮長狂氣も致さねば、亂心も仕りませぬ、多怨難信の法華經を、末法の世に說かんとすれば、三障四魔紛然として競ひ起り、瓦石刀杖の難に遭ふ事は、豫て覺悟の上にムりまする、固より惜まぬ身命、假令此首を鋸にて引かれませうとも、正法を正法として、邪法の前に額く事は能ませぬ』、『それ其口ぢや、自ら本心と申す以上、法印の成敗は何とでムる、それとも我等が申受けやうか』、『此上は是非に及ばぬ、弟子師匠の緣も今日限りぢや、此場に於て勘當する、疾とゝ山を下ッて行け』と、道善の聲も怒りに顫へて、涙がほた〳〵と膝を濡した。景信もそれ以上に、進んで斬るとは云へなかッた。

大衆は口々に、蓮長の擧動を狂氣と嘲り、奇怪と罵りつゝ退散して往ッた。

東條左衞門は、餘憤を跫音に洩しながら、疊障りも荒々しく、從者を連れて歸ッて往ッた。

蓮長もやをら暇を告げて立上ッた。石の樣に押默ッて、會釋さへしなかッた道善が、其後姿を見ると、急に沈痛な聲で、『蓮長、待ちやれ』と呼止めた。

『何か御用にムりまするか』、『勘當すれば赤の他人に、用とては無いが、構へて左衞門殿の目には懸るまいぞ』と、慈愛の言葉に蓮長も、初めてはら〳〵と落涙した。

厚く師恩を謝して山を出ると、日は既や西に傾いて、殘照が淋しう後から射した。朝に開敎の對象となッた日輪が、夕には故鄕を逐はれて行く、豫言者の護衞となッてゐるのだッた。

『棄恩入無爲、眞實報恩者』と、蓮長は低音に念じて、不退轉の心を勵ましながら、從容として下山の途に就いた。――經文に記された、惡口の難は忽ちに來た。遠離於塔寺の難も次で來た。刀杖の難だけは免れたけれど、やがてまた再び來るであらう。數々見擯出とあるからは、今日の小難の如きは、固より數の中にも入るまい。如來の現在にすら、猶怨嫉多し、況や滅度の後をやである。さう思ふと蓮長の全身には、更に新なる勇猛心が、加はらねばならなかッた。

『此經難持、若暫持者、我則懽喜、諸佛亦然』と、今度は稍高らかに誦しながら、物の一二町下ッたと思ふと、不意に後から呼懸ける聲が聞えた。――一身の外は皆敵である。味方のある筈はない。何者であらうと振返ると、それは常から兄事して、弟の樣にも愛せられた、淨顯、義淨の二僧であッた。

『蓮長坊、お待ちやれ〳〵、申す事がある』と、二人は息を切らしてゐるのだッた。蓮長は徐に立迎へて、『まだ何か、御用がありましたか』、『一大事ぢや、此道を下ッては危い〳〵』、『それはまた何故でムるな』、『其方は御存じあるまいが、最前歸られた左衞門殿、師の坊の扱ひに依り、一旦は無事に引取られたなれど、日頃の嫉妬偏執といひ、尋ならぬ顏色に油斷ならずと、他處ながら樣子を探らせた處、果して其方の下山を待伏せ、不意に討ッて取らうの害心、明かと申す事ぢや、手筈の場所は此下の辻堂と、小僧の注進に依ッて、急ぎ後を追ひ申したのぢや、君子は危きに近づかず　左樣な處へ通り合せて、若し過ちでもある時は、多年の修行も水の泡ぢや、疾く〳〵我等に從ふて、間道を下られい』、『身外皆敵と存じたに、思ひも寄らぬお二人の御厚志、何とお禮を申さうやら、それに就けても今日の振舞、嘸かし亂心狂氣とも思召されたであらうが、蓮長の本心は、決して師匠の意に逆らひ、師匠の寺を毀けん爲ではムらなんだ、東國一の靈場が、邪法に穢され居るを憂へ、正法開宣の說法を、先づ當山で致したも、憚りながら師の坊を始め、一山の方々が、遂には阿鼻大城へも、墜ち給はん事の歎かしさに、それを救ひ參らせん爲でムッた、地頭の旨に作らへば、やはか此首の胴についてゐぬ事も、覺悟の前の法談でムッた』といふ、蓮長の瞳は依然として、決死の光に燃えてゐた。

五　鎌倉入

蓮長は猶も言葉を繼いで、

『法華經の御爲に棄つる命ならば、石を以て金を購ひ、糞を以て米に替ふるも同じ事、さらく惜しいとも存ぜねば、三類の法敵競ひ起ッて、此身を八つ裂に致すとも、恐るゝ處はムらぬが、方々の御芳志、危きに近寄るなとのお諫めも、御尤もと存ずるに依り、お言葉に隨ひ何れへなりとも、暫く難を避けるでムらう』、『早速の御承引忝ない、師の坊のお心も、やがては解ける時節がムらう、口にこそ氣强うは申されても、慈愛の昔に渝らぬ事は、其方にもよう解ッて居る筈、我等がこれへ參ッたのも、それを察したからの事ぢや』、『ではやはり、師匠のお情でムりましたか』、『それを思ふて、必ず輕擧は致すまい、左衞門殿に覘はるゝからは、當山ばかりでなく、小湊とても心許ない、幸ひの隱れ家は、我等が思ひついたれば、兎も角もついてムれ』と、親切な二人に導かれて、谷を降り、流を渉り、道なき道を分け行く程に、日は全く暮れて、月もない闇夜に、星の光さへ疎だッた。

左衞門の住む東條は、山越に迂回して、同じ長狹郡西條華房の、蓮華寺に辿り着いたのは、短夜の既や二更過ぎた頃だッた。——寺僧の靑蓮房は、豫て淨顯、義淨等と、親い仲であッたから、快く蓮長を匿ッて呉れた。

偶〻蓮華寺に工事中だッた、阿彌陀堂の建立が出來上ッたので、逗留中の蓮長に、開堂の法談を賴まうといふ議があッた。——南都叡山歷遊の學僧として、片田舍の法場を賑すには、適任者と思はれたのに無理はなかッた。

蓮長は即座に快諾して、やがて新堂の高座に上ッた。聽聞の大衆は、此未知未見の學僧の口から、怎麼有難い極樂往生の道が說かれるかと、耳を欹てゝ膝を進めた。——念佛破析の好機會として、蓮長が一層舌を銳くしてかゝッた事は、固より知る筈がなかッた。

『天に二日なく、國に二王のない事は、方々も承知でムらう、若し又日本の住民が、日本の天子を棄てゝ、漢土の國王に隨ふとしたら、何とであらう、いふ迄もなく國賊ぢや、逆徒ぢや、謀叛人ぢや、佛法も其通り、釋迦牟尼世尊は本土の敎主で、阿彌陀如來は西方の化主ぢや、若し本土の敎主を棄てゝ、西方の化主に歸する者があッたら、それは果して何とであらう、法門の賊、宗旨の謀叛人、我等日本の住民が、日本の天子に背いて、漢土の國王を仰ぐと、同じではあるまいか、國賊の首が獄門に梟けらるゝなら、法敵の身は地獄に墮つるが當然ぢや、方々は何の宗門に歸依し、どの樣な本尊を信仰さるゝか知らぬが、若し正法を棄てゝ邪宗に迷ひ、本土の敎主に背いて、西方の化主に就くやうの事もあッたら、それこそ法の賊、敎の謀叛人、謗法の罪は五逆にも勝る、無間地獄は目のあたり、極樂往生杯とは思ひも寄らぬ事ぢや』。

阿彌陀堂で阿彌陀佛の前に、念佛攻擊の說法を始めたのだから、驚ぎは想像に餘りがある。動搖した聽衆は、忽ち蜂の巢を突き崩した如く、怒聲、罵聲を八方に沸騰させた。

六

蓮長は强盛に聲を勵まして、

『天に二日なく、國に二王のない以上、佛に二佛のある筈はない、今此三界、皆我が有と仰せられたのは、唯一佛の釋迦牟尼世尊ぢや、其中の衆生は悉く吾が子と仰せられてある、子として親の恩を忘れ、正法を忘れ、南無妙法蓮華經を忘れて、無緣の他力に縋らうとは何事ぢや、日本國の住民が、日本の天子に事へる如く、一切衆生の歸依すべきは、教主釋尊の他にない、末法萬年の教としては、唯だ法華經があるばかりぢや、一天四海皆同音に、南無妙法蓮華經と唱へよ、念佛唱名は無間の業ぞ』と、舌端に火を發するばかり、熱辯滔々と說破するけれど、一旦沸立ッた聽衆の耳には、最早何を云ッても入る筈はなかッた。

喧囂は益々加はッて、賣主、狂人、惡魔、外道と、有ゆる罵聲が口を衝いて、礫のやうに浴せられるのだッた。それでも蓮長は驚ぐ色もなく、いふだけの事を云ひ了ると、悠々と高座を降りて、法衣の袖を拂ひながら、寺房の方へ歸らうとした。

『逃すな引摺り倒せ、毆れ、殺せ』といふ諸聲が、鯨波を作ッて押寄せると、後から瓦石がばら〳〵と、霰の如く飛んで來た。蓮長は纔かに其中を脫れて、蓮華寺へ歸ッて來たけれど、青蓮房も後難を恐れて、もう寺へは入れなかッた。――遠離於塔寺の難は、又々こゝにも來たのだッた。

蓮長は己むなく華房を去ッて、的もない道を上總に取ッた。日が暮れて雨が降り出した。長生郡笠森の觀音堂に一夜を明して、

憂きに降る涙の雨に濡じとて、
今日笠森を身に着ぬるかな

と、述懷の一首を口吟んだと傳へられる。近鄕墨田村の鄕士、高橋五郎時光と、同郡藻原の地頭、齋藤遠江守兼綱とが、交々我館に迎へて、厚く供養したのは此時で、傳說に依ると兩人共、同じ夜の夢に、觀世音の示現を見たのだとある。――半月ばかり經ッて、蓮長は再び竊に小湊へ歸ッた。

無事な顏を見た兩親は、死んだ子の蘇生ッた程に喜んだが、如何に正法の爲とは云へ、僧俗諸人の怨みを受けて、其身を危うする樣な、餘り過激な言說は、成るべく避けて呉れるやうと、涙と共に口說かれた時は、道がの蓮長も胸が迫ッて、刀杖瓦石の難よりも、堪へ難い苦痛を感じたであらうが、併し眞實の報恩者は、一時の情に引かされて、不退轉の心を、鈍らす樣な事はなかッた。

法華經弘通の方法には、勸持と攝受の二行があッて、勸持は戰鬪の生活、攝受は安樂行であるが、上世有德の世には、安樂行でも濟むけれど、末世濁惡の世となッては、勸持折伏の外に途のない事を、諄々と說いて父母を宥めた。

漁師こそはしてゐるけれど、素性は正しいと云はれ、物事の辨へも、そこらの人には優れてゐる重忠夫婦が、理を聽いて服さぬ筈はなかッた。蓮長は最初の歸依者として、先づ父母に戒を授ける事が能た。――これより以後、父は妙日、母は妙蓮と法名を呼んだ。

蓮長が日蓮と改めたのは、此時父の妙日と、母の妙蓮との一字宛を貰ッて、名づけたのだと傳へられるが、名は實の賓である以上、自ら此二字を選ぶに至ッた動機は、夙く旭の森の開敎題目と同時に、決してゐたものと想像せられる。

清淨と光明とは、日蓮の理想であり、また抱負であッた。釋尊は日月の光明の如く、能く諸の幽冥を除くと云ひ、彌勒菩薩は蓮華の水に在るが如く、地より湧き出づと云ッた。清淨は蓮の德、光明は日の力、『明かなる事、日月に過ぎんや、淨き事、蓮華にまさるべきや、法華經は日月と蓮華となり、故に妙法蓮華經と名づく、日蓮亦日月と蓮華との如くなり』とは、後年自ら書記して、這間の消息を語ッたものであッた。――母の妙日が、日輪の懷に入ると夢みて、此子を孕んだと云ひ、誕生の朝海上に、青蓮華を生じたといふ樣な、不思議な傳說の起りも、これ等の事から來たものと察せられる。

地頭を敵に持つ日蓮は、父母の家にも長く留まる事は能なかッた。また元來の志しでもなかッた。目指す處は覇府鎌倉である。名殘を惜む父母に別れて、再び故鄕を去る日蓮の行く手には、風浪の妨げが先づ起ッた。西房州から海を蹈えて、三浦三崎へ渡る積りで、富浦迄來たけれど、折柄五月中旬の雨續きで、海上は屋波が荒く、便船の出る的もなかッた。

空しく海岸に佇んで、翼のない身を嘆じてゐる處へ、偶と通り懸ッた一人の男があッた。

『旅の御出家には、何れへお越しでムりますな』。『相州へ渡ッて、鎌倉へ參らうと存ずるに、便船がなうて難澁して居りますぢや』、『それはお困りでムりませう、此空合ではまだ〳〵容易に晴れますまい、手前は此邊りに住む、和泉澤太郎と申する者、穢ろしうはムりますが、我家へお越し下されば、幾日でもお宿を仕りませう』、『扨も殊勝なお志、千萬忝う思ひますぢや』、『ではお越し下されまするか』、『お言葉に甘へて、御報謝に預かり申さう』、『御案內致しませう』と、連立ッて話しながら、其家へ往ッた。家には一人の老母と、次郎三郎と呼ぶ弟とがあッて、懇に待遇した。太郎は元、伊勢の生れだといふ事だッた。

『鎌倉へは御修行でムりまするか』、『左樣ぢや、わしは法華經の行者で、弘通の爲に參るのぢや』、『法華經と申しますと、淸澄の蓮長とか申される法師が、先達て其爲に、お山を逐はれたとかの噂を、承りましたが』、『其蓮長がわしぢや、今では日蓮と改めて居る』と、こゝで諄々と、法華經の功德を說いたので、一家は益々敬重して、遂に妙宗の歸依者となッた。――日蓮は老母の爲に、妙福の法號を與へた。

後年太郎が此處に、一宇の寺院を創立して、母の法號に因み、成就山妙福寺と名けるに至ッて、里の者も其功德に感じ、地名の泉谷を、南無妙法谷と呼び、後略して南無谷と呼ぶ樣になッた。

八

雨は數日にして漸く霽れた。

晴れると靜かな海を隔てゝ、三浦半島の連山は、近く目の前に見える。便船は順風に乘じて駛ッた。對岸の米ケ濱は、今橫須賀軍港のあるあたり、日蓮はそこから上陸して、陸路を鎌倉に向ッた。船越を越え、

田越を越え、やがて名越の坂をも越えて、鎌倉の南端に出た。折柄の炎天に渇を覺えて、道傍の清水を掬んだのが、『日蓮の乞水』と呼ばれて、今も滾々と湧いてゐる。

仁治三年二十一歳で、日蓮が鎌倉を去ッてから、今年は恰度十二年振りであッた。――當年の執權北條泰時は、恰度日蓮が去ッた年に卒し、後を承けた嫡孫の經時も、既に八年前に歿して、弟の時頼がこれに代り、將軍には京から宗尊親王を、去年迎へたばかりの時であッた。

經時の時代には、專ら念佛宗を尊び、材木座の光明寺に、然阿上人が獨り時めいてゐたが、時頼の代に至ッては、更に禪宗に歸依し、曾て日蓮が京に於て、說を聽いた事のある、宋の道隆禪師が、既に鎌倉に入ッて、建長寺の建立が、方に成ッた處であッた。大佛の銅像も既に竣工してゐた。北條長時の淨光明寺も、眞言禪律兼學の道場として、新たに出來上ッた處だッた。

戰亂の痛苦から免れる爲に生れた、淨土念佛宗に次いで、天台眞言の複雜を厭ふた、直截一路の禪宗と共に、僧侶の腐敗を憤慨して、戒律修行を復興した、西大寺の叡尊思圓の弟子に、良觀坊忍性といふ、後年極樂寺に住して、大いに慈善事業を起し、藥師如來の權化と迄云はれた律僧も、恰度鎌倉に下ッてゐる頃だッた。――後に日蓮が當の敵となッて、鎬を削ッたのは此良觀であッた。

斯くの如き鎌倉へ、徒手空拳、一人の加擔人もなく飛込んで、孤軍奮鬪をしやうといふのである。日蓮は玉の汗を流して、烈日の下に憩ひながら、起伏する鎌倉山を眺めた。何處に足を駐める的さへないのだッた。

『旅の御出家に、主人が報謝を致し度いと申して居りまする、何卒お越し下さりませ』と、不意に聲を懸けたものがあッたので、振返ると何處かの從僕らしい男が、小腰を屈めてゐるのだッた。

『それは近頃奇特のお志、いづれのお館でムるな』。『主人は石井の藤五郎と申しまする、名越の住人で、佛へ供養の爲と申されました』。『左樣か、佛への供養とあらば、お造作に與るでムらう』と、導かるゝ儘に其邸へ赴いた。

藤五郎は長勝と呼び、本姓は三浦氏で、源氏に名ある武士であッたが、去る寶治元年六月、泰村が時頼に殺されて、三浦の一族滅亡の後、弟半次郎光國と共に、鄕士となッて名越に住んでゐるのだッた。

邸内に岩を切拔いた井戸があッて、清冽氷の如く、俗に岩の井と稱して、鎌倉十名水の一に數へられてゐた處から、三浦の姓を憚ッて、遂に石井と呼ぶやうになッたのだと傳へられる。――建長五年は寶治元年から七年目で、其六月五日は、泰村の忌日に當るのだッた。

九

長勝の好意で、暫く其館へ足を駐める事になッた日蓮は、やがて一家を化導して、法華經の歸依者とし、越えて八月には、屋敷續きの一角に、草庵の寄進を受けて、これを法華堂と名け、轉法輪最初の道場とした。――松葉谷の草庵趾に就いては、現在長勝寺、妙法寺、安國論寺の三寺が、互に靈跡を爭ひ、各執

ッて讓らぬけれど、地勢其他の關係から察して、こゝでは姑く前說に從ふ。

精力主義の日蓮は、其間にも鶴岡八幡宮の別當に手蔓を求めて、境內の經藏にある、宋版の一切經一千六百八十六部、五千三百五十一卷を、悉く讀破したと傳へられる。日蓮は既に淸澄寺の一切經と、興福寺の一切經とを讀んでゐる。今度は三回目で、文の異同を試みやうといふのだッた。

建長五年も暮れて、翌れば六年の正月となッた。湘南の春暖く、庭前の梅は既に綻びてゐた。日蓮は朝の勤行を濟まして後、やをら庵の軒を出て、

時なれや松葉谷の鶯の、聲きゝ初むる日の本の人

と口吟み、試筆に認めた、一遍首題の本尊と共に、長勝へ授けたと傳へられる。――開敎以來本尊の染筆は、恐らくこれが最初と稱せられ、今長勝寺の什寶となッてゐる。詠歌の梅は『廣布梅』と名づけられた。

叡山の學僧成辨が、遙々庵を訪ねて來たのは、多分此前後であッたらしい。三千坊の學僧が、悉く相識である道理はないけれど、叡山にゐて叡山の宗風に反對し、慈覺大師を法敵と罵ッて、山を下ッた蓮長の事は、少くとも成辨の方では、知ッてゐた者と見るのが當然であらう。――成辨は下總國鶴飾郡平賀鄕の豪族、平賀三祐昭の子で、日蓮と同じ關東生れ、而も才學優れて、主義見解迄同じうした者が、僅か一年にも足らぬ前に下山した蓮長の事を、知らぬ筈はなかッたらうと思はれる。

『房州へお歸りと承はり、お後を慕ふて參る途中、今は此鎌倉にと、人傳に聞きましたゆゑ、故とお驚かし申したは、御高敎を仰がん爲でムッた』、『これは珍しいお客僧、何故山をお下りなされた』、『我等愚蒙ではムれど、天台傳敎兩大師の敎旨を承はり、下ッて慈覺、智證兩大師等の、理同事勝の說を味はひますると、腑に落ちぬ節が數多ムる、學頭に質しても分明致さず、却ッて引合に出されたのは、山を下られた御坊の事でムッた、此上は同じ『志』の人を尋ねて、智解を求むる外はないと、俄かに思ひ立ッて、これ迄罷り越したのでムる』といふ、熱心な言葉に、日蓮も覺えず膝を進めて、『扨々喜ばしい事を承はる、前後十年叡山にゐて、一人の同志もないと存じたに、今御坊に邂逅ふ事、これも傳敎大師のお引合せでムらう、我等には百萬の味方を得たよりも心强い、苦しからずば草庵に御逗留なされて、共々談合申し度い』と、懇に法義を說き、種々の疑問に答へたので、成辨も其博識に歸服し、日蓮よりは一つ年上の、承久三年生れであッたが、自ら進んで弟子となり、其儘草庵に留まッた。

日蓮の日と、父祐昭の昭とを取ッて、法名を日昭と授けたが、別に元の名に因んで、辨阿闍梨とも呼んだ。――これが後年六老僧の筆頭であッた。

辻說法

一

日蓮は小町の辻に出て、日々折伏の說法を行ふた。

松葉谷の草庵に、唯だ一人ゐた間でも、機に觸れ、時に應じては、無論これに努めたけれど、新たに同心の法弟を得て、若し法難に殪れても、後繼の憂がなくなると、勇氣は一層加はッた事いふ迄もない。

『濁劫惡世の中にあッて、此經を說かんとする時は、三類の法敵群がり起ッて、行者に害を加へんとする事は、既に經文に明かぢや、固より不惜身命の法門なれば、惡口の禍も、刀杖の難も、喜んでこれを受けやうが、唯だ一つ忍び難く思ふたのは、日本に二人とない法華經の行者ぢや、若しも此日蓮が、命を殞す樣な事でもあッたら、一閻浮提にわが志を繼いで、本化妙宗の廣宣流布に、從ふ者が絕えやうと、それのみ心懸りであッたが、今幸に此方を得て、最早後顧の憂はない、日蓮は死んでも法華經は滅びぬ、進んで法敵と戰ひ、法門の爲に殉する事ができる、出て敵を破るのはわしぢや、內に在ッて寨を守るのを、此方の勤めと覺悟して欲しい、それが即ち法の爲、拔群の忠功といふものぢや』と、諄々として說かれた時、日昭は涙を垂れて感激した。

『數ならぬ身を、左程迄に思さるる嬉しさには、如何なる仰せにも違背はなりませぬ、私の情より申すならば、生死も共にと願はしう厶れど、宗門の爲にはそれも叶ひませぬ、師匠が先陣にお進みあらば、手前は後陣を承はッて、及ばずながら殿りの役を、一相勤めるで厶らう程に、邪宗析伏の發途、お心置きなう遊ばされい』と、潔よく付屬を奉じたので、日蓮も奮ッて街頭に立ッたのだッた。

若宮大路の東、幕府にも執權屋數にも、鶴ヶ岡の八幡宮にも亦近い、當時鎌倉府中の目貫、人馬の來往最も繁き、小町大路の路傍に、一個の捨石を發見して、『南無妙法蓮華經』と記した、一旒の法幢を眞額に、蠹乎と立ッた日蓮が、天性魁偉の風采は、物見高い都人士の、目を欹てしめるに足るものであッた。——而も其獅子吼して、眞先に說く四箇の格言は、

念佛無間、禪天魔
眞言亡國、律國賊

といふ、過激を極めた標語であッたから、奇を好む群衆は、忽ち潮の如く寄ッた。中には幕府へ出仕の武士で、往復に立寄る者も、尠くなかッた事はいふ迄もない、——日蓮の揮ふ舌には、三斗の毒が含まれてゐた。

『慈悲身口に薰じて、二身の應現と、二皷の宣揚とあり』とは　佛陀の大慈大悲を讃した、佛敎全體の發現點である。釋尊の出現は、それ自身が慈悲である。慈悲の結晶から、慈悲の說法が發する。大慈大悲の香氣が、馥郁として身口に薰ずるのである。

印度比馬拉山に生ずる藥王樹は、閻浮提一切草木の根本である。佛陀は藥王樹の如く、一切衆生の根本である。根本は一つの樣だけれど、大小無數の草木となッて現はれる如く、佛陀の分身も、十方世界に無數の現はれとなッて活動する。之を藥王樹身と名ける。今一つ如意寶珠は、僅か一寸餘りの珠であるけれ

ど、宇宙の森羅萬象を、悉く此中に收める事が能る。佛陀の現身には限りがあるけれど、其中に無限の慈悲が籠ッてゐる。これを如意珠身と名ける。即ち二身の應現である。

二

身口に薫ずる大慈大悲の、佛陀に二身の應現があると同時に、同じ慈悲の說法にも、天人天鼓を打つが如き、微妙の音樂となッて、衆生を歡喜に醉はしめるのと、武人毒鼓を鳴らすが如き、痛烈な音響となッて、觸るゝ者を殪さねば止まぬのとがある。——毒鼓は印度の戰爭に、此鼓を打つ時は、音の聞える限りの者は、悉く毒に觸れて死ぬとある、激しい威力を譬に取ッたので、天鼓を攝受とすれば、毒鼓は析伏である。即ち二鼓の宣揚である。

末法弘通の手段として、日蓮が析伏を選んだ理由は、既に幾度も述べた。舌に毒は含んでも、心は慈悲の薫發に外ならぬ。——四個の格言を掲げて、小町の街頭に獅子吼する、日蓮の廣長舌は、滔々として淀まなかッた。

『念佛は何故無間の業であるか、漢土の人師が事は姑く措き、近くは我朝の法然坊が、權に就いて實を忘れ、難きを避けて易きを貪り、劣れるを揚げ優れるを抑へて、大乘經六百三十七部、二千八百八十三卷、並びに一切の諸佛、諸菩薩、及び諸の世天等を、捨、閉、閣、抑の四文字に遮斷し、即身即佛の直路の行法を、千中無一の雜行抔と罵り、末世の愚人共を說いて、唯だ西方の阿彌陀佛ばかりに、縋らしめんとした結果は、世を擧げて臆病風に襲はれ、現世を厭ひ苦を避けて、後世の安樂をのみ願ふの餘り、勇猛の氣は日に薄れて、卑屈の根生のみ增長し、身の安穩を第一として、主を忘れ親を忘れ、果は國をさへも忘るゝに至る、無間の業でなうて何ぢや』。

群衆はわッと騷ぎ立ッたが、日蓮は自若として、色をも動かさぬ。

『抑々念佛唱名を勸むる、觀無量壽經の因緣は何とぢや、牢舍の女人が苦患を訴へ、赦免の慈悲を求むるに對して、娑婆全體が苦の世界ぢや、出づればとて苦を免れやうやと、說かれた經文ではないか、日本國の者悉く牢舍に住ふならいざ知らず、一閻浮提の間に、萬を以て算ふる國土の中、他に比類のない我國に於て、方便、權敎が何の要ぞ、良知良能の人間を、無智無能に導かんとするのが、今の念佛他力宗ぢや、世界の物は悉く腐ッても、法のみは腐ッてはならぬ、天下の鹽が腐ッたら何とする、法は天下の鹽と同じく、他の諸の物の腐りを防がねばならぬ、而も其法を以て、衆生の魂を腐らさんとするものが、今の淨土易行門ではないか。』

日蓮の論鋒は、益々峻烈になッた。好奇心を以て聽く彌次馬の中には、譬喩の面白さに、思はず歎呼の聲を揚げる者もあッたが、群衆の大半を占る、念佛宗門の輩は、眞先に自宗の痛擊を受けて、孰れも蒼くなッて憤慨した。

『默れ賣僧ッ』と叫ぶ聲と共に、瓦石がばらぐゝと飛んで來た。

日蓮は屹然と其中に衝ッ立ッた儘、聲を勵まして、

『罵る者は罵れ、喋を打つ者は打て、諸の無智の人あッて、正しき導師を罵り、辱むとある、文の意がまのあたりぢや、刀杖も瓦礫も、法華經の御爲には喜んで受けるぞ』と、一歩も退かず、寧ろ莞爾として、珠數を押揉むのであッた。

三

日蓮の舌端から迸る、毒皷の響は蓼々として、連日小町の街頭から、鎌倉中に鳴渡ッた。

『禪宗を何故に天魔といふか、自ら教外別傳抔と稱し、一切經を閑文字と罵る、直指人心、見性成佛と、言葉は殊勝に聞ゆれど、それが扨もの大間違ひぢや、禪は佛の心、法華經は佛の言といへど、言がなうて心が解るか、解らぬ心を其儘に、我が心へ移し入れたとて、それが何で佛心と云へやうぞ、如來の心は廣大無邊ぢや、狗子にも佛性はありといふが、一斗の甕に盛られた水が、一合の器に移せると思ふか、若し移す事が能たなら、それは底のない器ぢや、今の邪禪の輩が、自ら得たりと思ふ佛心は、實は此底なき器を通り抜ける水ぢや、根本有漏定とあるのがそれぢや、世尊五十年の說法は、決して左樣なものではない、教を忘れて心のみ得らるゝ道理があらうか、得たと思ふのは慢心ぢや、慢心を以て聖經を謗る、天魔破旬でなうて何ぢや』。

『御坊暫く』と、動搖めく群衆の中から、衝と進み出た一人の武士があッた。それは北條氏の一門、江馬遠江守光時の家臣、四條金吾頼基であッた。――武士の相手が現はれたといふので、群衆は周圍から、面白がッて犇めいた。

『何か御不審がムるかな』と、日蓮は徐に顧みた。

『如何にも、禪は佛の心、法華經は佛の言と、今も御坊の云はれた通りぢや、かるが故に教外の別傳には文字を立てず、以來傳心を以て要とす、佛一切經を說かせ給ふて後、最後に一房の華を以て、大迦葉一人に授け、其證として御袈裟を付屬し、乃至付法藏の二十八六祖迄に傳ふとある、衣鉢傳授の佛心宗を、根本有漏定抔とは、以ての外の僻事ではあるまいか、法華經は月をさす指、禪は本體の月ぢや、月を得て指を何かせん、一切經を閑文字といふに、何の妨げがあらうや』と、頼基の意氣込も鋭かッた。――付法藏とは佛滅後、法藏を結集した迦葉尊者から、阿難、商那和修を經て、師子尊者に至る、法藏付屬の諸尊者の事である。

日蓮は莞爾と微笑んで、『それこそ誑惑の大妄語ぢや、眞如の月は佛心でも、禪は本體の月ではない、濁水に映る月影ぢや、取らんとすれば影は碎くる、法華經の指はまことの月を指して、まことの光に照さるゝ、一切經を棄てゝ教外を立つるは、譬へば珠を棄てゝ石を取り、地を離れて空に上らんとするやうなものぢや、佛誡めて宣はく、惡象に値ふとも、惡智識に値はざれと、止觀の七に、昔娑洛の禪師、名は河海に播き、住する時は即ち四方雲の如くに仰ぎ、去る時は即ち阡陌群を成す、隱々轟々亦何の利益かある、

臨終に皆悔ゆとあるのはこれぢや、世尊は五十年の説法を終へて、涅槃の床に入られて後も、須跋陀羅が最後の需めに、再び起直ッて涅槃經を説かれた、何が故に斯く説法を重しとせられたか、一切衆生を濟度の途は、説法の外にない事を、確乎に究められたからぢや、教外別傳の、不立文字のと、左樣な事で佛心が得らるゝなら、生れ子に母の乳は要らぬ道理ぢや』と、口を衝いて出る巧な譬喩に、群衆もつい釣込まれて、いつしか鳴を靜めたのだッた。

『教主世尊に對する時は、一切衆生は皆赤子ぢや、大涅槃經に現はれた、佛弟子の偈を御覽ぜられたか、我は初生の嬰兒の如し、母を失へば久しからずして必ず死すべし、世尊よ如何ぞ放捨せられて、獨り三界を出でゝ安樂を受け給はんやとある、經文が立派な證據ぢや、佛の慈悲は人の母が、其子に乳を哺めんとする心と、聊かの異りもない、佛は悲母で、説法は乳房、流れ出る乳が經文ぢや、其經文を離れ、乳を離れて、壯健に育つ嬰兒はあるまい、頓悟して佛心が得らるゝといふのは、乳のない嬰兒の口へ、餅飯を運ぶやうなものではないか』と、日蓮の説く處は、諄々として盡きなかッた。

賴基はもどかしさうに、

『いゝや、其樣な引事こそ、經に執した末節で、佛の眞實意には遠いのぢや、直指人心の法に依れば、地を離れて空に登る事もできる、經に執して意を得ず、地に執して月が得られやうか』、『待たれい、月は空にあれども、普く十方世界を照す、其光を受くるものは、即ち月を得るものぢや、水に映る月に光はない、影を逐ふて取らんとすれば、却ッて其身は水に陷り、波を起せば影も消ゆる、空に登らんとして水に溺れ、碎けた影を求めるのが、お身達の行ずる禪ぢや、佛心を得んとして佛心を破る、何の知見ぞ、何の悟りぞ、迷ひの夢を覺されい』。

賴基は當時建長寺の、道隆禪師に參禪して、相應得意の積りでゐたから、多寡が道路の一貧僧、立地に屈服せしめんと、先づ問答を始めたのだッたが、固より智解に於ても、確信に於ても、更に其辯舌に於ても、到底及ぶ筈はなかッた。初めには憤然として去ッたのが、二度目には悄然として去り、更に松葉谷の草庵へも、幾回か出入する樣になッた。――法談の回を重ねる毎に、漸次邪見の心も挫けて、法華經に接近して來た事はいふ迄もない。

小町の辻説法は、翌日も、翌々日も續いた。

『眞言は何故亡國の教であるか、弘法が法華經を、大日、華嚴の下位に置きて、第三の戲論と貶したる、慈覺が夢に日輪を射たりと見たる、それ等の事は扨置くとも、近き例は承久の亂ぢや、隱岐の法皇（後鳥羽院）が、權大夫殿（義時）を失はんと遊ばすに、國主の思召なれば、何の助けを借らずとも、獅子王の兎を伏すが如く、鷹の雀を取るやうにもあるべき上、叡山、東寺、園城寺、高野、御室の寺々に命じて、數年が間調伏の祈禱を、修せしめ給ふたと申すではないか、然るに其驗はどうぢや、關東の勢ひ嵐の如く、都方は宇治、瀨田に敗れて、纔に二日三日が間も支へず、佐渡、阿波、隱岐の島國へ流され給ひて、つひ

に崩れさせ給ふた、其時關東は、何の佛を祈り、何の法を修したか、祈る者祈らざる者に敗れ、呪ふ者呪はざる者に陷されて　還著於本人の證を示されたは何が故ぢや、皆これ眞言師共が、邪法を修した爲ではないか、佛法王法を亡ぼした眞言は、亡國の敎でなうて何ぢや』と、斯く說き來ッた日蓮の目には、今更の如く悲憤の涙が湧いたのだッた。

五

『律は何が故に國賊か、經、律、論の三藏は、もと一具の法、共に期する處は轉迷開悟ぢや、戒律は賊を捉ふるが如く、禪定は賊を縛するが如く、慧學は之を殺すが如しとある、故に天竺に於ては、別に戒律を以て、一宗を立つる事はなかッた、然るに漢土に於て、隋唐の初運に當り、智首、道宣等の律師、四分律を興してより一宗を生じ、我朝にありては人皇四十五代、聖武天皇の御宇に、道宣の法孫鑑眞和尙、之を南都に傳へ來りて、東大寺に戒壇を立て、更に唐招提寺を創めて、普く皇朝の道俗に令す、戒行淸淨なれば定慧自ら立し、非業を制禁すれば慧惑を破見すると稱し、五戒二百五十戒を定めて、義は大乘に通ずと云へど、所詮は小乘の戒律ぢや、されば叡山の根本大師（傳敎）に打破られて、一旦南都に影を潛め、大乘の圓頓戒ばかり行はるゝ樣になッた、然るに當代に至りて、泉涌寺の俊芿、西大寺の叡尊等、再び小乘戒を興して、一切の諸惡を斷捨し、一切の諸善を修行し、遍く利益を施すと稱し、自ら尊びて世の尊びを享く、其末流を汲む者、此鎌倉にも來ッて、表に聖者の振舞を裝ひ、裡には布絹財寶を蓄へ、利錢借請を業とす、假令戒律堅固と雖も、自ら淨うするのみにて、世に合はず、時に應ぜず、諸人を救ふ事能はずば、魂のない傀儡も同然、勉めて益なき無用の行ぢや、章安大師（天台の高弟）涅槃の疏に、昔は時平かにして法弘まる、戒を持すべし、杖を持する事勿れ、今は時嶮しうして法弱る、杖を持すべし、戒を持する事勿れ、今昔倶に嶮しくば、倶に杖を持すべし、倶に戒を持すべし　取捨宜しきを得て、一向にすべからずとあるのが、何よりの明證ぢや、況や今の律僧等は、敎行既に相違せるをや、國賊といふに不思議があらうか』。

日蓮の揮ふ毒舌が、當時鎌倉に來ッて、北條重時、長時父子から、生如來の如く尊崇されてゐた、良觀に上に及んだのである事はいふ迄もない。――四分律は佛滅後百年、曇無德尊者の集むる所で、四度に集められた爲、四分律と名けられたのだ。

群衆の中には、無論良觀の歸依者も數多あッた。

『默れ』、『惡僧』、『良觀樣は活如來ぢや』、『おのれこそ讒賊ぢや』といふ樣な聲々と共に、また瓦礫が雨の如く飛んだ。

日蓮は物ともせず、

『愚かな人達ぢや、如何に行者が敬はれたとて、人に依ッて法の尊くなる道理はない、されば佛は依法不依人と定め給ひ、文殊、普賢等の諸菩薩が、法門を說き給ふとも、經文を手に把らずば、用ひざれと仰せ

られた、龍樹菩薩も白論に依りて、黑論に依らざれと説かれた、白論白法は正法で、黑論黑法は邪法ぢや、法華經一の卷方便品には、正直に方便を捨てゝ、たゞ無上道を説く、二の卷譬喩品には、たゞ樂うて大乘經典を受持し、乃至餘經の一偈をも受けざれとある、捨方便とは念佛、眞言、禪、律等の權教を、正直に捨てよとの文意、乃至餘經の一偈をも受けざれとは、只管に妙法蓮華經を信ぜよとの佛意ぢや』。

六

『今此妙法蓮華經とは、請佛出世の本意、衆生成佛の直道ぢや、されば釋尊は、地涌の菩薩に付屬を宣べ、多寶は證明を遂け、其他分身の諸佛は、舌相を梵天に付けて、皆是眞實と宣べ給ふた、八卷二十八品の經文、一字も諸佛の本懷、一點も多生の助けぢや、一言一語と雖も、虛妄あるべからず、此經の禁めを用ひざる者は、諸佛の舌を剪り、賢聖を欺く人ではないか、其罪まことに怖るべしぢや、されば二の卷に曰く、若し人信ぜずして此經を毀謗せば、即ち一切世間の佛種を斷ずと、文の意は、若し人此經の一偈一句をも背かんには、過去現在未來、三世十方の佛を、殺さん罪と定められてあるのぢや、經敎の鏡明かに、一點の疑ふ處もない、八萬聖敎の肝心、一切諸佛の眼目たる、法華經の文字は六萬九千三百八十四字、一字一佛の功德を結要して、更に五字の題目とす、凡そ妙法蓮華經とは、上は梵天、帝釋、文殊、彌勒、三世十方あらゆる諸佛の佛性と、下は我等一切衆生の佛性と、一體不二にして、人法一如、十界圓具、一念三千の妙理、悉く備はるの理を、一音に現はしたる經名なるが故に、一度妙法蓮華經と唱ふれば、一切の佛、一切の法、一切の菩薩、一切の神祇、乃至地獄、餓鬼、畜生、修羅、人天、一切衆生の心中の佛性を、唯だ一聲に喚び顯はす、其功德無量無邊ぢや、假へば籠の中の鳥鳴けば、空飛ぶ鳥の呼ばれて集るが如く、空飛ぶ鳥の集まれば、籠の中の鳥も出でんとするが如しぢや、口に妙法を唱ふれば、我身の佛性も呼ばれて必ず顯はれ、梵王帝釋の佛性は、呼ばれて我身を守り給ひ、佛菩薩の佛性は、呼ばれて俱に悅び給ふ、三世諸佛出世の本懷、一切衆生皆成佛道の妙法といふはこれぢや、聽聞の方々も、我慢偏執の心なく、同音に南無妙法蓮華經と唱へられい、南無妙法蓮華輕』と、莊重に唱へ出した日蓮の面上には、我れとわが聲に對する、感激の光が輝き溢れた。

釣り込まれて、『南無妙法蓮華經』と唱へる者もあッた。『痴け者、賣僧の說法に魅いられたか』と、まだ罵る者もあッた。錢と礫とが一緒になッて、ばら〳〵と飛んで來た。

春から夏へ、夏から秋へと、日蓮の說法は一日も忘らなかッた。或時は名越に於て、或時は米町口に於て、其他隨處の路傍に陣を布いて、折伏の法戰を開いたので、必ずしも小町の辻とのみは限らなかッたらしい。――法敵の妨害が加はると共に、正論に耳を傾けて、漸く信を寄せて來るものもあッた。松葉谷の草庵には、常に日昭が內を守ッて、偶々訪ね寄る篤信者の爲に、師に代ッて法を說く事もあッた。

定めない空に雲が翳して、村雨がぱら〳〵と降ッて來た。街頭の日蓮を圍んでゐた群衆は、罵る者も庇ふ者も、一樣に俄か雨を怖れて、蜘蛛の子の樣に散ッて往ッた。短い晷の傾き易く、物の隈から暮れ初めて、

早くも四邊は薄暗くなッた。

今日の說法もこれ迄と、日蓮は法幢を捲いて、徐かに歸り路に就いた。其背後から、無言で傘を翳しかけた、一人の若い武士があッた。

七

通り雨が歇んだかと、偶と振返ッた日蓮は、此體に厚く會釋をしながら、

『いづれの御仁かは存ぜぬが、御芳志辱けなう受けまするぢや』。年若い武士は、輕く點頭いて、『御坊は御存じなうても、我等はよう存じ居り申す、松葉谷の日蓮法師でムらう』、『ほゝう、此日蓮を御存じか、それで斯る御親切は、一段と嬉しう存じまするぢや、いづれの御仁でムりますな』、『我等は北條殿の近臣、進士太郎善春と申す者、法の上では敵でムる』、『其法敵に何故あッて、斯樣な御親切はかけらるゝぞ』、『敵とは御坊の方こそ、我等は事を好まぬ者、敎網にかゝりて言說に滯る、僧俗諸人の煩惱を、唯だ〳〵不便と存ずるばかりぢや』、『はゝあ、お身も禪宗の歸依者ぢやな、四條左衞門と申さるゝ仁が、やはり左樣な僻見を抱いて、よく法論に見えられたが、今では漸う迷夢が覺めて、妙法歸依の信者となられたぢや、お身も問答がお望みなのでムらう』、『如何にも其左衞門は、豫て入懇に致す者、我等と共に建長寺に參して、是心即佛、即心是佛の法を行じながら、今更相傳を失ひ、本心の月を雲らすとは、言語道斷、不便の至りと存じ居る、法華經如何に三說に秀で、一代に超ると雖も、言說に拘らず、經文に留まらざる、我等

が心の本分の、禪の一法には若くべくもムらぬ、凡そ萬法を拂遣して、言語の及ばざる處を、禪法とは名けられたのでムるぞ』、『其禪法なら手前とても、囊に學んでよう存じ居る、併しながら其至極を見るに、甚だ以て僻事ぢや、若し敎を離れてこれを傳ふと云はゞ、敎を離れて理なく、理を離れて敎はない、理全く敎、敎全く理といふ道理を御存じないか、跋提河の邊り沙羅林の下にして、釋尊金棺より御足を出し、拈華微笑して、吾れに正法眼藏の涅槃、妙心、實相、無相、微妙の法門あり、敎外に別に傳ふ、文字を立てず、摩訶迦葉に付屬すとて、迦葉相傳を受けられたといふも、是れ則ち敎ぢや、不立文字といふ四字も敎ぢや、文字ぢや、又た若し言說に滯ると云はゞ、娑婆世界には何を以て、佛事善根を營むべきや、さいふ禪林の輩も、言說を以て人には示さぬか、文字を離れて解脫の義を談ずるか、達磨西來して直指人心、見性成佛すといふも、斯程の理は華嚴、大集、大般若等、法華以前の權大乘經にも、在々處々に談ぜられてある、何のいみじき事であらうぞ、されば習禪の初祖、達磨大師の傳にも、敎に藉ッて宗を悟るとあり、其弟子慧可の傳には、達磨禪師四卷の楞伽經を授け、これに依ッて佛になれと云はれたとある、これ等の祖師既に經文を先とす、當世の禪人は、自宗にさへ迷ふて居るのでは ムらぬか、而も禪宗の依經とする、楞伽經、首楞嚴經、金剛般若經等は、孰れも法華以前の權敎覆藏の說ぢや、世尊示來を鑑み給ひ、邪禪の惡比丘が、速に我法を滅すと仰せられたは、當世に見て符節を合せる樣ぢや、畏るべく、愼むべしとは思されぬか』と、傘下の法談は、また諄々として盡きなッた。

八

初めは爭ふ心を以て、これに對ッた善春も、相手が意外の博識に、漸く氣遲れがして、後には貝の如く口を噤んで、唯だ其説に聽いてゐるより外はなかッた。

其中に葉谷の草庵も近くなッた。善春の第もやはり名越にあるのだッた。

『御高説の義は、略會得致してムるが、尙ほ不審の節もムれば、いづれ改めて御草庵の方へ、お訪ね申す事に致さう、今日圖らざるお道伴も、やがて斯く御坊の傘下に、參るべき佛緣かも知れませぬな』と、善春は莞爾として、優しく其面を仰いだ。日蓮もにこやかに點頭きながら、

『左樣ぢや、同じ傘は一樹の蔭、一味の法雨に潤ふも、淺からぬ佛緣でムらう、御不審があるならば、何時でもお訪ね下されい、幸ひ雨も小歇みになッた、小庵も直ぐ目の前、これにてお別れ申しまするぢや』、

『さらばお別れ申す』と、互に袂を分ッたが、果して善春は、其後屢々庵室を訪れて、法談を聽く樣になッた。四條頼基とも、無論一緒になる事があッた。

秋も漸く半となッて、石の井の清水も冷く、朝寒を衿に泌む頃となッた。

日蓮は早朝床を離れると、日昭は既に起きてゐて、朝餉の用意にかゝッてゐた。

『これは思ひの外寢過した、辨殿、今日の日和は何うぢやな』、『結構な晴天でムります』、『左樣か、不思議な夢を見るものぢや、時ならぬ夕立に、雷が落ちて、庵の屋根を打拔いたと見たが、後は一天拭ふが如くに晴渡ッた』、『何かの奇瑞でムりませう、決して惡夢とは思はれませぬ』、『わしも吉夢ぢやとは思ふが、はて何の前兆であらうな』と、師弟不思議の思ひを語り合ッてゐる處へ、偶と門外に人の訪れる聲が聞えた。

日昭が立ッて取次に出ると、急に驚きの聲を發して、暫く親しげに言葉を交してゐたが、やがていそ〳〵と引返した後には、一人の武士と、一人の少年とが從ふてゐた。

『珍しい客が參りました、これなるは私俗緣の者、下總國匝嵯郡能手の鄕の住人、印東治部左衞門有國と申し、日昭の爲には姉婿に當りまする、此度お願ひの筋あッて、態々出府致したと申す事、何卒御對面下さりませ』、『ほう、それは遙々のお越しぢやな、どの樣な事か存ぜぬが、先づ〳〵これへお進みなされ』、『では御免下さりませ』と、有國は室内に入ッたが、少年は其儘緣側に控へてゐた。

『早速ながらこれなるは、手前一子吉祥麿と申し、當年十二歲に相成りまする、御見知り置かれ下さるやう、其方も御挨拶申し上げい』、『お上人樣、お初にお目に懸ります、此後共によろしうお願ひ申しまする』と、慇懃に兩手を衝いて、言葉も爽かに一禮した。

『お〻賢さうな好いお子ぢや、神妙な御挨拶、確に受けましたぞ』、『お願ひと申すは、餘の儀ではムりませぬ、これなる吉祥麿を、上人のお弟子にお願ひ申し度く、俗緣の日昭を賴ッて、これ迄推參致したのでムる』と、思ひ入ッた調子で述べた。――有國は千葉氏の一族で、妻は平賀祐昭の女、即ち日昭の姉であ

ッたから、吉祥麿に取ッては日昭は、肉親の叔父に當るのだッた。

九

日蓮は暫く、父子の顔を凝乎と見てゐたが、

『それは奇特のお志ぢやが、わしは見らるゝ通りの貧僧、而も法華經の行者ぢや、末法の世に此經を弘めんとすれば、三類の法敵競ひ起ッて、惡口罵詈、刀杖瓦礫を加ふるとある、三類の法敵とは、第一に俗衆增上慢、在家にて邪法を信じ、自ら正しと思へる者、第二に道門增上慢、沙門にして同じく正法の敵となる者、第三に僭聖增上慢、世間の歸依を受けて、自ら聖人の如く思へる者ぢや、今日本國を見るに、これ等の怨敵は、到る處に充滿て居る、罵詈杖木はまだしも、數々見擯出とあるからは、屢々流罪にも行はれやう、身命を喪ふかも知れぬ、吉祥どのはまだ幼い、其辛抱ができますかの』と、先づ其決心を問ひ試みるのであッた。

有國は徐かに引取ッて、『其儀ならば、決して御懸念下さるな、既に清澄に於けるお噂も承はり、又これなる日昭が、入門の次第も存じ居りまする、吉祥幼年ながら、夙に出塵の志これあり、願はくば叔父と共々、上人の御弟子に參じたいと、寢ても覺めても の懇望、宿世の因緣かとも存じ申す、憚りながら法華經の功德、末世に類なき正法と申す事は、拙者先つ頃出府の砌、小町大路の御法談を、再三ならず拜聽致して、聊か辨へ存ずる儘を、申し聞けありますれば、假令如何なる難儀に遭ひ、一命を召さるゝとも

さら〳〵厭はぬ程の覺悟は、致し居る事と存じまする』と、決然と云ひ放ッて、我子の方を顧みると、吉祥麿も兩手を衝いて、點頭く樣に平伏した。

『左樣か、近頃珍らしい堅固なお志、それを承る上は、如何にも喜んでお引受け致さう、日昭、最前の夢は、此知らせであッたかも知れぬな』、『左樣かも計られませぬ』、『有國殿、實は今朝草庵に、落雷がありましてな、いや夢の話ぢやが、それにしても不思議なは、今吉祥どのゝ坐ッて居る席か、恰度雷の落ちた處ぢや、これは有國殿のお子でも、實は日蓮が許へ、天から授かッた弟子かも知れませぬな』と、殊の外機嫌よく、膝元近う呼び寄せるのだッた。

有國は却ッて恐縮して、『靈夢の奇瑞は兎も角も、不肖の子を早速の御承引、忝なう存じ申す』、『お師匠樣、有難う存じまする』と、古祥麿も幼心に、可愛い瞳をくる〳〵と睜りながら、心から感謝の意を述べた。

『落雷と共に雲晴れて、天朗になると見た、夢の心を取ッて、得度の上は日朗と名けやうぞ』。——以來常侍の弟子として、師の一生に影の如く附隨し、恰も釋尊に於ける阿難の如く、日昭の智辯第一と云はれたのに對して、孝行第一の名を博し、後年六老僧の第二に數へられたのは、此日朗であッた。

日昭の鄕里も下總である。日朗の鄕里も下總である。法緣淺からぬ國と見て、日蓮は其秋松葉谷の草庵を、日昭、日朗の叔姪に預けて、暫く下總へ巡錫に出た事があッた。——其歸途便船に乘り合した武士が、

後年中山法華經寺の開基となッた、富木五郎胤繼であッた。

十

後に入道して常忍と云ッた、富木五郎胤繼は、下總國葛飾郡八幡の庄若宮の地頭で、地方の有力家である外、相應の學問もあり、肯かぬ氣の議論好であッたらしい。

暫く鎌倉を空けた日蓮が、下總の敎化を了へて、歸りの便船を求める爲、若宮の海岸に出て見ると、今しも一艘の船が、錨を拔いて出帆せんとする處だッた。

『おゝ、それは金澤への便船ではないか、序にわしをも乘せて往て呉れ』、『最う錨を拔いた處ぢや、一旦上げた歩板を、また懸ける譯には行きませぬわい』と、水夫が素氣なく斷るのを、『待て〳〵』と制めて、『餘人なら兎も角も、相手は出家ではないか、殊に海上は徒然ぢや、其法談を聽いてやるも、時に取ッての一興であらう、乘せてやれ』と、指圖したのが胤繼だッた。

『お前樣がさう仰有るなら、致し方はムりませぬ』と、水夫は面倒臭さうに、再びずる〳〵と歩板を突き出した。日蓮は漸く便乘する事が能た。――下總から海路を鎌倉へ行くには、武州金澤へ渡るのが順路だッた。

胤繼は曖々と、日蓮の容子を見てゐたが、『御坊は何の宗門ぢやな』、『別に何宗とも定めてはムらぬが、唯敎主世尊の敎へを守ッて居りまするぢや』、『不思議な事を云はるゝ、佛法いづれか釋尊の敎へでないものがあらう、唯依る所の經に依ッて、各宗各派と岐れて居る、其何宗に依らるゝかと申すのぢや』、『それ故にこそ、いづれの宗派にも依りませぬぢや、世尊の敎は唯一つぢや』、『ふうむ、近頃鎌倉に、日蓮とか申す奇僧があッて、諸宗を悉く誹謗し、唯法華の題目を唱へると聞く、御坊御存じか』、『如何にもよく存じ居りますぢや』、『然らば其說く所は何とぢやな』と、膝を進めた胤繼の目には、好奇の色が一杯に漲ッてゐた。日蓮は平然として、

『左樣、佛法、王法を一軌にして、守護國家、濟度衆生を念とする外に、何事もムらぬ樣ぢや』、『それは如何なる宗門にもの大事ぢや、今少し詳しく承はらう』、『念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、諸宗無得道、法華一人の成佛と申し居りまするぢや』、『其仔細は』、『抑も佛法の本意は、王法を扶けて國家を守護し、風雨順次諸難を拂ひ、一切衆生を救ふにあり、王法はまた佛法を助け、邪法を斥け正法を護り、諸民の歸依を導くに存す、王法昌んなれば佛法も亦興り、佛法興れば王法も亦昌んぢや、然るに今の世、宗〻の高祖と呼ばるゝ者も、敎主世尊の眞意を覺らず、妄りに己が依經に泥み、傳來の邪義に囚はれて、時機相應の敎へに背く、故に却ッて國家を亂し、衆生をして暗に迷はしむ、邪宗昌んにして王法衰へ、日月も光を失はんとして居る、日蓮深くこれを歎いて、釋尊正意の法華經を說き、權門邪見の諸宗を摧くと雖も、大聲は俚耳に入らず、良藥口に苦くして、諸の無智の者共の爲に、或ひは狂僧と呼ばれ、或ひは讒賊と罵られて居りまするぢや、佛勅を奉じて正法を說き、國家諸民を守護する爲、謗法の徒を折伏するが、

何で犯僧、何で讒賊ぢや、經に依れば如來の使ではムらぬか』と、日蓮の舌鋒には、漸次に熱を帶て來た。

十一

默ッて聽いてゐた胤繼は、にッこりと笑ひながら、『其日蓮法師とは、御坊の事でムらう』と、圖星を指した。

『はゝゝ、知らるゝ上は隱すに及ばず、如何にも其日蓮でムるよ』と、こゝで互に名乘り合ッて、船中の法談盡きず、胤繼は即座に信を表して、遂に大檀那の一人となッた。——一說には胤繼を、日蓮の生母梅菊の緣者とし、日蓮の蓮長時代、鎌倉、比叡、京洛、南都と、十餘年の修學中、衣食の料を給した人で、此度の下總行も、其謝恩の爲であッたとも傳へてゐる。

船は順風に追はれて、早くも金澤の入江に入ッた。六浦の濱から上陸して、胤繼も勤番の爲の出府であッたから、俱に鎌倉に入ッてから、再會を約して別れた。——法緣淺からぬ下總の巡錫は、斯くて一層の深緣を加へた。

鎌倉に歸れば相變らず、日々街頭の析伏戰に從ふた。貝の中にある眞珠を獲んとすれば、先づ其貝を碎かねばならぬ。敵の中に信者を求めんとすれば、先づ其敵を摧かねばならぬとは、日蓮が逆化の信條であッた。而して眞珠は累々と獲られた。

富木胤繼、印東有國、四條賴基、進士善春を始め、賴基、善春等と共に、出府の都度建長寺に參してゐた、武州荏原郡千束の地頭、池上右衞門大夫宗仲、同じく仲延の地頭で宗仲の緣者たる、荏原左衞門義宗、房州天津の地頭、工藤左近丞吉隆、甲州巨摩郡波木井の地頭、南部六郎實長等、武家の信者が續々と現はれ、所謂本化戴髮の弟子として、外護の力を添へる樣になッた。下總國佐野の庄、德永重光の三男熊王丸の如きは、求めて草庵の下部となり、薪水洒掃の勞に服して、終には無比の忠僕と呼ばれた。

建長六年も暮れ、七年も過ぎて、翌る八年には、十月に改元があッて康元となり、其十一月には、執權時賴が致仕して、家督を其子時宗に讓ッたが、時宗はまだ六歲だッたので、一門の長時が執權となッた。——重時、長時父子の尊信を受くる、良觀坊忍性が、愈〻勢力を得る時は來た。

一方には歸依者が現はれると同時に、他方に於る法敵の迫害も、益〻加はるのが當然であッた。光明寺の然阿、建長寺の道隆、孰れも一度は日蓮が、法を聽いた事のある、當時の名僧であッたが、今では良觀と共に、日蓮に取ッての大敵となッてゐる。三類の法敵の中、所謂僭聖增上慢であッた。——俗衆增上慢は、まだ忍ぶ事が能る、道門增上慢も、忍んで忍べぬ事はない、僭聖增上慢に至ッては、法敵中の大法敵、到底忍ぶ事は能ぬ。

三類の法敵が顯はさずば、法華經の行者とは云はれぬ、顯はさば必ず身命に及ぶ。『寧ろ身命を喪ふとも、敎へを匿さゞれ』とは、經文の示す處、『身は輕く、法は重し、身を死して、法を弘めよ』とは、章安大師の釋である。固より不惜身命の日蓮は、如何なる大敵が現はれて、如何なる迫害を加へやうとも、それに

恐れて一歩でも、假借する筈はなかッた。諸宗無得道の宣言は、彌鋭く、益々嚴しく、天下に向ッて呼號せられた。

初めは多寡が狂僧の、蟬噪蛙鳴と蔑視して、齒牙にもかけなかッた良觀や、然阿や、道隆等の諸僧も、漸く默視してゐられなくなッた。それ等の黨與に依ッて、辻説法の妨害は、一層甚しくなッた。

安國論

一

法華經の教理に對する日蓮の解釋は、大體に於て天台の三大部に依ッてゐるが、而も其活用の上に於ては、日蓮獨自の所見に依ッて、經に現はれた功德、理想、榮光を、悉く自分の生命に實現しやうといふにあッた。法華經即自分といふ自覺で、經を讀むに口や言葉では何にもならぬ。心で讀み、軀で讀む、所謂色心二法の修行を以て、行者の使命と信じてゐるのだッた。――つまり天台の解釋は、主として理論方面に優れ、日蓮のは徹頭徹尾、實行主義であッた。

實行主義の前には、常に實際問題が横はる。建長から康元と改元になッた年の二月には、時ならぬ大雷雨があッて、洪水諸川に汎濫し、又六月にも未曾有の豪雨があッて、鶴ヶ岡八幡の祠が鳴動した。十月に年號を改められたのも、これ等の事に關聯した、御幣擔ぎの結果かと見られる。而も翌二年には、二月二十三日といふに、大地俄に震動して、日々經ても歇まぬので、改元僅か半年にも足らぬ、三月に再び正嘉と改められたが、變異は益々頻發するばかりだッた。

四月十六日の月蝕に次いで、五月朔には日蝕があり、更に其十八日子の刻（夜半十二時）、又も激震が起ッて、戸障子塀等を倒した。當時の諸民が日蝕や月蝕を、何等かの凶兆として、怖れた事はいふ迄もない。

八月に入ッては、朔戌の刻（午後八時）の强震を皮切に、屢小震を續けてゐたが、遂に其二十三日同時刻に至ッて、空前の大地震と勃發した。鎌倉中の神社佛閣、一宇として全きはなく、山は崩れ、家は倒れ、築地は悉く破損し、龜裂した地面からは、熱湯を吹き、或ひは火炎が燃え出たとある。無論壓死者も尠くなかッた。

それから九月にかけても小震熄まず、四日にまた强震があり、十一月八日には、再び大地震が來た。人心の恐怖は頂點に達した。

法華經の行者たる日蓮は、これ等の天變地妖を見て、日本一國、擧ッて法華の正法に背き、邪法の歸依者に充滿てゐる爲、善神聖人は國を見捨てゝ去り、惡鬼外道がこれに入代ッて、斯の如き災異を下すのだと斷定した。それには經説の裏書がある。所謂三災七難の豫言である。

三災とは、穀貴、兵革、疫病である。七難とは、人衆疾病、他國侵逼、自界叛逆、星宿變化、日月薄蝕、非時風雨、過時不雨である。――三災は大集經に、七難は藥師經に、かれ、更に金光明經には、國土正法に歸せざる時は、佛神悉く其國を捨去らんとあり、仁王經は、一切の聖人去らんは、七難必ず起るとある。四經の文明かにして、一點の疑ふ餘地もない。これを救ふ爲の實際運動として、實行家の日蓮が選んだ相手は、寧ろ個人でなくて國家、即ち時の政府であッた。

一人々々を敎化して、佛家を造り、佛國を造り、佛界を造らうとする樣な、手緩い方法の執ッてゐられる、悠長な時代ではない。先驀然に國家を衝いて、國主を正法に歸せしめれば、日本一國は自然と之に倣ふといふのが、日蓮の實行方針であッた。――こゝにいふ國主とは、實際政權を握ッてゐる、北條氏を指したのである事、いふ迄もない。

二

既に三度迄一切經を閲した日蓮は、更に國諫の準備を進むる爲、正嘉二年正月六日、松葉谷の小庵を發して、駿州岩本の實相寺へ向ッた。

實相寺は叡山横川に屬する天台の寺院で、智證大師が唐土から持歸ッた、二部の一切經の内、一部は三井寺に納めたが、曩に治承の兵亂に燒亡し、殘る一部を當山に傳へて、東國に於ける重要の道場となッてゐた。

貫主播磨殿慶律師は、豫て日蓮の世評を聞いて、餘り快く思はなかッたから、經藏へは入れても面會はしなかッたが、學頭の智海は親しく交はッて、其博識と、熟心と、爲人とを知るに及び、心中深く敬服して、遂に一山の學徒を會し、日蓮が閲經の間を求めて、摩訶止觀の講義を聽く樣になッた。

日蓮も快くこれを容れて、講說の間には、例の四個の格言杯を持出し、盛んに毒皷を鳴すので、感心して聽く者もあれば、又反對する者も多かッた。

斯る間に日蓮に取ッて、最も悲痛の出來事は、此年二月十四日、鄕里に於ける父妙日が、突如として歿ッたとの訃音であッた。享年八十七、年に不足はない樣だけれど、幼少の頃から、多く膝元を離れて、何等の孝養を盡した事もなく、今度鎌倉へ出てからも、明ければ足懸六年の間、面影は夜々の夢に見ても、現には一度も相見なかッた父の、思ひがけない報せに對して、日蓮は驚きと哀みとの餘り、殆ど喪心せんばかりになッて、三日三夜身動きもしなかッたと傳へられる。

四日目に至ッて、漸く我に復ると、急ぎ鎌倉に歸ッて、人々の留むるをも肯かず、後事を日昭に託して、更に房州の生家に向ひ、一百日の間、父の喪に籠ッたとの說もあるが、故鄕の東條鄕は、景信の領邑として、日蓮に取ッては敵地である。殊に國家諫曉の準備といふ、重大事を前に控へて、大義の爲に親を減し、淚を呑んで歸省しなかッたといふ方が、此場合事實であッたらしい。

災害は尙ほ熄まず、此年夏の旱魃に續いて、八月朔には暴風雨があり、二日には洪水が汎濫して、田

畑の被害甚だしく、次いで同二十八日には、熒惑星と稱する惡星が現はれて、南斗諸星の光を奪ひ、又其戌の刻（午後八時）には、光芒四丈餘の尾を曳いた大流星が、乾から巽（西北から東南）に向ッて飛んだ。

此間に日蓮は、『守護國家論』を草して、教理の上から諸宗の邪義、特に法然の念佛宗を破析し、末法の世にあッては、法華弘通の必然である事を說き、進んで各宗の謗法が、天下災異の原因である事を痛論した。守護國家論は後に現はれる、『立正安國論』の魁と見るべきものであッた。

其年も暮れて、翌三年三月には、又々正元と改元されたが、災異はまだ〳〵熄なかッた。日月屢薄蝕して、疫癘四方に流行し、續いて饑饉も迫ッて來た。

日蓮の岩本滯在は、正嘉二年から正元元年に及んだ。――其間智海の斡旋で、日夕給仕を勤めた小僧に、甲斐坊と呼ばれたのがあッた。

三

甲斐坊は甲州巨摩郡鰍澤の住人、大井橘六の子で、母が懷胎の時、腹中に白蓮華を生じたと夢み、生れた子の右の額には、七曜星に似た七つの黑子があッたと傳へられる。

幼にして父を喪ひ、母の實家なる駿州河合の由比氏に養はれ、八歲の時、實相寺に入ッて徒弟となり、嚴慶律師の推擧を得て、十一歲から三井寺に上り、當時尙ほ修學中の身であッたが、偶武州綱島へ再緣してゐた、母の喪に當ッて歸國し、暫く岩本に逗留中、日蓮に近侍する機會を得たのだッた。寬元四年の生れといふから、當時まだ十四歲の少年であッたが、天性の穎悟、早くも日蓮の識德に服して、山內の毀譽半する中に、獨り深く心を寄せ、法談の席には眞先に進んで、傍目も振らず傾聽してゐた。――後年やはり六老僧の一人、白蓮阿闍梨日興と呼ばれたのが、これだッた。

岩本の閑經を終へて、鎌倉に歸ッた日蓮は、經に照し、事實に徵して、法華信者の行くべき道を示す爲め、豫ての草案を整へて、愈勘文の大成に取蒐ッた。――これが有名な『立正安國論』で、其間にも、『災難對治鈔』抔の著述があッた。

正元元年も暮れて、翌二年には、正月に、また地震があッた。二月には三井寺の戒壇勅許を沮む爲、叡山の衆徒が大擧して、寺門を襲ふたといふ樣な騷亂もあッた。三月再び地震があり、次で洪水、山崩れと、天變地妖が益〳〵續くので、四月にまた改元があッて、文應となッた。而も其六月には、暴風雨があッて五穀實らず、飢饉に次ぐに疫癘を以てし、餓孚道に橫はり、牛馬巷に斃れて、雨露に打たれ、烈日に曝され、酸鼻面も向けられぬ光景を呈した。幕府は諸國の社寺に命じて、大般若、仁王經等の祈禱をさせたが、驗は少しも見えなかッた。

大集經に說かれた三災の中、飢饉の爲の穀貴、疫病の二災は既に起ッて、殘るは兵革の一災のみとなッた。藥師經に見えた七難の中、人衆疾病、星宿變化、日月薄蝕、非時風雨、過時不雨の五難は既に來ッ

て、殘るは自界叛逆、他國侵逼の二難のみとなッた。其他金光明經に現はれた諸々の禍の中、まだ起らないのは、異賊我を掠むるといふ、唯だ一つの禍のみである。仁王、般若經にも、やはり七難が數へられてあるが、これに依ると既に六難迄來て、殘るは唯だ四方の賊來り伐つといふ、一難のみであッた。

佛讖火の如く明かなる以上、殘るものもやがてまた、必ず來るに違ひない。自界叛逆と云ひ、他國侵逼といふ、內亂と外寇とが、必然に起るものとすれば、一闍浮提に類のない、日本國も亡びねばなるまい。其原因が惡く、謗法の罪にあるとすれば、これを責め、これを正して、國家を滅亡から救ふ事は、法華經の行者として、最も大なる使命でなければならぬ。——日蓮の猛然として、愈起つべき時は來た。

日蓮は乃ち初稿の安國論を取ッて、更に意を簡明にする爲、嚴密なる改訂を加へると共に、折伏主義の宣明を一層强めて、自ら淨書携帶の上、寺社奉行宿屋左衞門光則の邸を叩いた。——それは盂蘭盆も過ぎた、七月十六日辰の刻（午前八時）であッた。

四

宿屋左衞門の邸は、松葉谷からは稍離れた、長谷觀音の西にあッた。日蓮が訪れた時、光則は將に出仕せんとする處であッた。

『これは名越に住む、日蓮と申す沙門、天下の一大事に就き、推して參上申した、左衞門尉殿に御面會が願ひ度い』、『暫くお控へ下され』と、奧へ入ッた從者の取次に、光則は眉を顰めながらも、天下の一大事といふので、取敢ず引見した。

『日蓮法師とは御坊が事か、我等がお尋ねの左衞門ぢや、一大事とは如何なる事の申出か、早速承はらう』、『餘の儀ではムらぬ、近年打續く天變地異を、上には何と思召されてムらうな』、『申す迄もない、最明寺殿（時賴）を始め、殊の外の御心痛で、既に先年御落飾の上、執權職は御一門、武藏守殿（長時）に讓られたれど、若し天の怒り、地の怨みもあらば、御罰は我身に下し給へ、諸民に罪はないと申されて、諸國の社寺へも其通り祈らるゝ、勿體ない程のお愼みぢや』、『さもムらう、さりながら、病の源を除かずして、命を完うする事は能ませぬぢや、今の儘に棄て置かれたら、天地の變ばかりでなう、やがて日本一國、滅びる時節が參りませうぞ』、『何と云はるゝ』、『日蓮が申すのではない、金口の佛說、經の表に說かれてあるのが、犇しと今の世に當ッて居りますぢや、日蓮は下賤の者なれど、國土の御恩に報ぜん爲、去る正嘉元年八月の、大地震より此事を勸へ始め、當年に至る迄四年が間、一代聖敎を繙き返して、愈々斯くの如きの勸文一卷、認めて持參致しましたれば、何卒足下のお執成に依り、最明寺殿御前へ御披露下されて、一日も早く國土安穩に相成るやう、只管お盡瘁を願ひ度う存じまするのぢや』と、件の安國論を差出しながら、熱誠籠めて賴み入ッた。

光則は輕く會釋をしながら、

『如何なる勸文かは存ぜぬが、國土安穩の爲とあらば、取敢ず預り置き申さう、さりながら、近頃世上の

風説に依れば、御坊こそ詭辯を用ひて、府内の人心を誑惑し、御當家御歸依の禪宗、念佛宗を始め、諸宗を誹謗さるゝの由、だ以て其意を得ず、何分の御沙汰ある迄は、屹度慎み控へらるゝが宜からう』と、當局としては好い機會の積りで、序に戒飭を加へた。

『兎も角も其勸文を、一應御覽下さるゝが、何よりの早解りでムらう、但萬一にも此事お用ひなきに於ては、先づ御一門より事起り、次で他國に攻めらるゝを、お覺悟なされずばなりませぬぞ』と、日蓮は臆する色もなく、一本釘を差して置いて、宿屋の邸を立去ッた。

日蓮がまだ蓮長時代に、京で不思議の對面をした、大學三郎能本は、當時再び鎌倉に歸ッて、幕府の儒員に用ひられ、亡父能員の舊邸を賜ふて、比企谷に居を定めてゐたから、日蓮は先づ之を訪ねて、勸文の執奏を賴んだが、儒員の手から私に提出するよりも、寧ろ公に寺社奉行を經た方が、國諫の理に適ふだらうとの、能本の意見に從ふて、左衛門の邸を叩いたのだとも傳へられる。——光則は時賴の執權時代から、七近臣の一人として、厚く信任されてゐた。

五

安國論を預かッた光則は、直ちにこれを懷中にして、小町大路の執權時賴に出仕した。——入道して職は讓ッてゐても、實權はやはり時賴にあッた。

將軍宗尊親王御前に於て、一門、諸侯列座の上、侍讀學士比企三郎能本をして、これを朗讀せしめたと傳へるのは、後世此勸文に、箔をつける爲の假構であらうが、當時何等の地位もなく、多寡が大道の辻説法に、聲を嗄してゐるのみの、一貧僧の上書に對して、左樣な取扱ひのあらうとは信じられぬ。——日蓮の心血を濺いだ、國家救護の大論文も、恐らく時賴の前では、輕侮の手に繰披かれたらうと思はれる。

旅客來りて歎じて曰く、近年より近日に至る迄、天變地夭、飢饉疫癘、遍ねく天下に滿ち、廣く地上に迸る、牛馬巷に斃れ、骸骨路に充てり、死を招くの輩既に大半に超え、之を悲しまざる族敢て一人もなし

と、莊重なる漢文に書き起された、立正安國論の大意は、打續く災異の因由を、諸經の豫言と對照して、一國謗法の罪に歸し、邪法殊に念佛宗の破析に、最も力を盡した末、

汝早く信仰の寸心を改めて、速に實乘の一善に歸せよ、然らば則ち三界は皆佛國也、佛國其れ衰へんや、十方は悉く寶土也、寶土何ぞ壞れんや、國に衰微なく、土に破壞なくんば、身は是れ安全にして、心は是れ禪定ならん

と、旅客と自分との問答に擬へて、邪法の禁止、正法の流布を、爲政者が當然の義務と斷じ、北條氏一門を始め、國民全體に對して。懺悔改宗を迫ッた、一篇七千餘言、堂々たる大警告であッたが、時賴は禪宗の歸依者で、一門は皆念佛信者である。容易に用ひらるべき筈はなかッた。

傳説に依ると、時賴は此勸文に接して、心中頗る平かならず、其月二十四日を以て、日蓮を邸に召出

し、佛法に托して、政道を誹謗し、人心を誑惑する業と、自ら嚴しく面詰したが、日蓮は少しも恐怯れず、飽く迄正論を唱へて、邪法の寺院を悉く破却し、僧侶を殘らず罪科に行ひ、叡山の講堂を造り直して、釋尊の魂を請じ入れぬ限り、諸神も還らず、諸佛も來ては助けぬと、飽く迄强盛に主張したので、敦厚な時賴も、憤然席を蹴ッて起ち、又日蓮は大音聲を上げて、內亂外寇を豫言し、衣を拂ッて歸ッたとあるが、これも當時の風習から推して、あり得べき事でないらしい。やはり後の消息に、『御尋ねもなく、御用ひもなかりしかば』とある通り、時賴は默殺して、顧みなかッたと察しられる。

無論日蓮の方でも、一度や二度の進言で、直ちに用ひられやうとは、思はなかッたに違ひない。ただ法華經の行者として、進むべき道を進み、執るべき手段を執ッたのだッた。

用ひられねば、用ひられる迄爭ふのが、豫ての覺悟であり、また主義である。何處迄も奮鬪する、邁進する、經文に所謂勇猛精進を、文字通りに體現した、日蓮が他宗析伏の鋒鋩は、益〻峻鋭を加へた。

六

時賴は默殺したけれど、日蓮の方で默ッてはゐなかッた。

上書の顚末は公然と、其口から發表せられて、國家の大事を顧みぬ、爲政者の攻擊ともなッたであらう、今度は念佛宗の門徒が其儘には濟まさなくなッた。

辻說法で足らず、座談で足らず、果は北條殿に上書迄して、他宗の禁絕を圖ッたとは、言語道斷の擧動、棄て置いては天下の害、以後の見せしめに、屹度制裁を加へねばならぬと、反日蓮の躍起運動は、燎原の勢で煽られた。

『賣僧を殺せ、讒賊を殪せ』といふ聲は、期せずして法敵の口々に上ッた。煽動者の中には、相應の地位、名聞のある、僧侶、檀越の名も數へられるが、要するに『國主の御用ひなき法師なれば、害ちたりとも科あらじとや思ひけん』で、附和雷同の輩が、各自に獲物々々を携へ、夜に乘じて名越へ〳〵と押寄せた。

――日蓮の遺文に依ると、數千人と記されてあるが、尠くとも數百人はゐたであらう。

折柄八月二十七日、子の刻（夜半十二時）と云へば、月はまだ出ず、如法の暗夜に、哄といふ人聲と共に、垣を倒し、門を破ッて、潮の如くに亂入した。寄手の中には弓箭を負ひ、兵仗を携へた武士も數多交ッてゐた。松明の光は黑い影を、一層物凄くして見せた。

深夜の庵室には人も少く、武士としては進士太郎善春が、唯一人宿り合せてゐたが、物音を聞くと瓦破と跳起きて、

『驚破、夜討ぞ』といふと等しく、腰刀を拔き放ッて、多勢の中へ躍り入り、縱橫無盡に斬捲ると、續いて能登坊と稱する勇僧も、極の棒押ッ取ッて、振廻し〳〵、傍目も振らず討ッて出た。

『烏合の奴輩、何程の事かあらん』と、目に餘る大敵の中に、兩人は宛ら阿修羅の如く、前後左右に斬り結び、薙ぎ散らし、勇を鼓して防ぎ戰ふけれど、衆寡遂に敵せず、能登坊先づ傷を蒙ッて退き、善春も亦

數創を受けて、心ならずも引退くと、勝誇ッた敵勢は、勢ひに乘じて庵中に闖入し、戸障子を破り、積重ねて、周圍から松明の火を移すと、忽ちめら〳〵と燃え上ッて、見る〳〵炎は屋根を拔けた。――石井藤五郎の家からも、無論應援に向ふたらうけれど、固より及ぶ筈はなかッた。

颯と吹く夜嵐に、火は勢ひを得て燃え募り、本化妙宗最初の道場も、瞬く裡に灰となッてしまッた。

『坊主は何處にぢや、逃すな』、『搜し出して打殺せ』と口々に罵りながら、血眼になッて索めたけれど、日蓮は何處に隱れたか、影さへも見えなかッた。

長き夜も曉近く、東雲の色が見え初めたので、內々氣脈は通じてあッても、表向きには掟に反いた、暴擧に違ひないのだから、夜が明ては面倒と、搜索隊も勢ひを收めて、

『斯程搜しても見當らぬからは、必定火中に焚死んだのであらうよ』と、心地よけに嘲笑ひつゝ、凱歌を奏して引揚げた。

嵐の跡の樣な狼藉の中に、ふす〳〵と白い煙を吐く、餘燼も露に濕ッてゐた。

七

日蓮は死にはしなかッた。――闇に紛れて虎口を脫し、裏山の峯傳ひに、山王山の方へ避難した。傳說に據ると、其夜は庚申に當ッたので、帝釋天の爲に遲く迄、經を誦して法樂してゐたが、四邊も悉く寢靜まッた頃、月も出るかと雨戸を開けて、何心なく庭を見ると、竹緣に一匹の小猿がゐて、心ありげに導く樣、何かの知らせでもあるかと、緣から庭へ、庭から山へと、漸次庵を遠ざかッた後へ、不意に夜討が蒐ッたのだともいふ。――山王山とは賴朝が、正法守護の善神として、比叡山から勸請した、山王權現のある處で、猿は權現の使令だといふのである。

天を焦す火炎を見て、草庵の燒討を察した日蓮は、弟子等の事を氣遣ひつゝ、取敢ず社畔の石窟に入ッて、心ならぬ一夜を明かした。搜索隊の手も、こゝ迄は及ばなかッた。

夜が明けると數多の猿が、代る〳〵窟を訪れて、果實や其他の食物を持參し、厚く供養したので、危く一命を助かッた日蓮は、幸に飢も渴きもせず、三日の間を窟に過して、漸く信徒の手に救ひ出されたとて、後年此處をお猿畠と云ひ傳へる。

庵を燒かれた日蓮は、暫く餘溫の冷める間、鎌倉を避けなければならぬ仕儀となッた。それには燒死の風說が、專ら府內に喧傳された事も、勿怪の幸であッた。

賴む所は下總若宮の富木胤繼、當時鎌倉にあッて、遭難の報を聞くと、直ちに家臣を八方に手分けし、普く行方を搜させた末、漸く山王山に發見して、懇ろに伴ひ歸ッたともいふが、師の身の上を氣遣ふて、密に力を盡した者は、無論胤繼一人ではなかッたに違ひない。

潛行して武州金澤から、海路を下總へ渡ッた日蓮は、直ちに若宮の富木館に入ッて、懇到な歡待を受け、やがて邸內に一庵を營み、近鄕隣國の近親をも倂して、連日の法談に、聽聞者は日一日と加はッた。――

日蓮は胤繼の厚意を喜んで、手づから一尊四菩薩の像を刻み、これを本尊として、庵を法華堂と名けた。今の中山法華經寺の根元である。

胤繼の緣續きで、曾谷次郎左衞門敎信、太田左衞門乘明、秋元太郎兵衞等、後年鐵腸の篤信者が、化に入ッたのも此時だッた。――敎信は後年身処に登ッて、剃髮して法蓮日禮と名けられ、乘明はまた嫡子太郎を、剃髮せしめて法弟とした。後の中老僧日高で、胤繼の妻の甥であッた。

聽聞者の中に、唱阿彌と稱する念佛僧の如き、初めは日蓮の歸依者が、日々增加するのを見て、心中憤懣に堪へず、妨害する積りで紛れ込んだのが、法理を聽いてゐる中に、漸次引入れられて、終には隨喜の涙を垂れ、即座に念佛を棄てゝ、他の信徒と同音に、題目を唱へる樣になり、以來日々怠らなかッた。殊の外の高聲で、四邊に並ぶ者もなかッたとて、日蓮は首題坊日唱の名を與へた。

千足池の龍女が、婦人に姿を現はして、熱心な聽聞者となり、遂に戒を受けて妙正と名けられると、忽然として再び池に入ッたといふ樣な、傳說も殘ッて居る。

八

若宮の法華堂に於ける、百日の說法を了へた日蓮は、更に請ぜられる儘に、其近鄕をも巡錫した。

或日草庵へ、まだ年の行かぬ旅の小僧が、疲れた足を引摺りながら、訪ねて來たとの取次に、何心なく通させて見ると、それは岩本の實相寺にゐた、思ひがけない甲斐坊だッた。

『お上人樣、お久しう存じます』、『おゝ、岩本の甲斐坊ではないか、珍しい對面ぢやが、斯樣な東國へ、何用あッて參ッたな』、『お上人樣を、お慕ひ申して參りました、何卒只今から、お弟子になされて下さりませ』、『ふうむ、豫て悃發とは知ッて居ッたが、さてはあの儘、園城寺へは歸らなんだのか』、『左樣でムります、お上人樣の御說法を承はりましては、二度と三井へ上る心はムりませぬ、何卒お側へお置きなされて下さりませ』、『それで遙々の道を、これ迄訪ねて參ッたのか、近頃殊勝な志ぢやが、而て實相寺の貫主はお許しなされたか』、『お師匠樣のお許しは受けませねど、學頭の智海樣から、お勸めでムりました』、『何、智海殿が勸めたとか、それならば苦しうあるまい、追ッて鎌倉へ歸る迄は、暫く此處にゐなさるが可い』、『有難うムります、有難うムります』と、繰返し喜んで隨身した。――一說には日蓮が、其春實相寺を辭して、鎌倉へ歸る途中、沼津迄後を追ッて來て、入門したとも傳へられる。

文應元年も暮れて、翌る二年には日蓮も、愈々四十の春を迎へたが、二月に復又改元があッて、弘長となッた。――建長八年から、僅か足掛六年の間に、康元、正嘉、正元、文應、弘長と、五度迄年號を改められたのであッた。

松葉谷の草庵跡には、地主の石井長勝が、藤井六太夫といふ者に命じて、再建の工事に取蒐ッてゐた。――後年長勝の事蹟が湮滅すると共に、草庵の再建は、富木胤繼が下總から、態々番匠を遣はして、工事を急がせたとも、また鎌倉にゐた日昭が、密かに篤信の檀方、池上宗仲、荏原義宗、四條賴基等の助力を

得て、建築したとも傳へられるが、要するに歸依の人々が、協力して復興したものであらう。

工事成ッて若宮へ報ずると、日蓮も大いに喜んで、最早餘溫の冷めた時分と、胤繼、敎信、乘明等、其他の信徒に別れを告げ、新たに得た弟子の甲斐坊を伴ふて、約半年振に鎌倉へ歸ッた。暖國の花は悉く葉となッて、杜宇の啼く頃であッた。

新築の法華堂に、日蓮は再び法陣を布き、盛んに毒皷を鳴らす事になッた。――新弟子の甲斐坊は、こゝで更めて剃度を受け、諱を日興、字は白蓮、伯耆坊と呼ばれる事になッた。吉祥麿の日朗が、字を大國阿闍梨と稱し、筑後坊と呼ばれたのは、其以前だッた。

日蓮は此間に、再び伊勢の大廟に詣で、相の山の常明寺に宿して、三七日の法を修し、大曼荼羅を神宮に納めて、正法弘布の祈願を籠め、轉じて更に京に入り、洛東吉田神社の祠官、吉田兼益に就いて、神道の秘奥を究め、其免許狀をも受けたと傳へられる。

伊豆流罪

一

日蓮が再び鎌倉の街頭に現はれた時、駭目して驚いたのは、廣内に漲る三類の法敵であッた。

『狂僧、まだ生て居ッたか』、『今迄何處に隱れて居ッた』、『燒死んだのではなかッたか』と、口々に罵りつゝ、中には足摺りして口惜がるものもあッた。

日蓮は莞爾として微笑みながら、

『如何にも此通り生て居る、生て居る限りは法華經を唱へるぞ、罵る者は罵れ、其舌を成佛させて吳れる、撲つ者は撲て、其腕を成佛させてやらう、足を揚げて蹴らぬか、其足を成佛させて吳れやうに、廣大無邊の大功德を、受けやうとは思はぬか』と、舌端の毒は彌々濃く、惡口も罵詈も、乃至杖木も瓦石も、最早念頭には留まらぬ體だッた。

法敵の迫害は、日と共に益甚だしくなッた。極樂寺の良觀が、愈〻當面の敵として、色彩の濃くなッたのは、此頃からであッた。

良觀の大檀越たる、陸奥守重時が、地獄谷に地を相して、大伽藍を建立し、極樂寺と名づけて良觀を開山とし、自己も其境内に、別業を營んで住む事にしたのは、恰度此前後だッた。――重時は義時の三男で、時賴には大叔父に當り、現執權長時の父として、權勢並ぶ者もない、一門の最長者であッた。

良觀が中心となッて、重時父子に讒すると共に、光明寺の然阿、建長寺の道隆等も、これが加擔人として、北條氏の大奥と策應したので、日蓮の身等に絡はる危險は、刻々に迫ッて來るのだッたが、それと知ッてか知らずにか、法敵の迫害が加はれば加はる程、日蓮が析伏の毒皷は、益高鳴を添へるのだッた。

『如何に強敵が重なるとも、いツかな退く心はなく、さら〳〵恐しいとも思はぬ、假令頭を鋸で引切り、胴は稜鉾を以て突つき、足に鋸を打ツて、錐を以て揉まるゝとも、命の通はん程は南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經と唱へて、若し唱へ死に死ぬならば、釋迦、多寶、十方の諸佛は、靈山會上の御契約に依り、須臾の程に飛來ツて、手を取り肩に引擔いで、靈山へ走り給ふであらう、さすれば二聖、二天、十羅刹女は、受持の者を擁護し、諸天善神は、天蓋を指し、旛を上て、我等を守護し給ひつゝ、慥に寂光の寶刹へ送り下さるぞや、末法の世に生れ合せて、斯程の喜びがまたとあらうか、瓦石も來よ、刀杖も來よ、乃至身命をも召されよ、日蓮は喜んで、五字の題目を唱へ死に死なうぞ』と、恰度鶴ヶ岡八幡の前通り、琵琶橋の畔に立ツて、勇氣と感激とに滿た、大雄辯を揮ツてゐる處へ、忽ちばら〳〵と飛んで出たのは、數多の捕吏を隨へた、小具足嚴めしい武士だッた。

『御用ぢや、神妙にせい』といふ聲に驚いて、群衆は蜘蛛の子の樣に四散した。

今云ッてゐた事が、直ぐ目の前に現はれた、不意の危難に對しても、日蓮は固より騒ぐ色はなかッた。

泰然として、

『用といふのは何事ぢや』、『北條殿の仰せに依り、召捕に向ふたのぢや、それ』といふと、八方から折重なッて、犇々と搦め上げた。觀念した日蓮は、最初から抗爭はず、目を閉ぢてなすが儘に任した。

『坊主立てい』と、捕吏は其縄尻を取ッて、荒々しく引立てた。

日蓮は問註所へ引かるゝ事と思ひ、それなら却ッて諸役人の面前に、法を說く便がともならうと、從容として歩を移すと、警固の武士は反對に、由比ケ濱の方へ追ひ立てた。

煙波漂渺と、寄せては返す濱邊には、既に一隻の船が用意されて、長時が待受けてゐた。

『妄りに邪法を說いて、各宗を罵り、人心を誑惑するのみならず、天下の政道を誹謗するの段、罪科甚だ輕からず、死罪にも行はるべきの處、格別の御憐憫を以て、伊豆の伊東へ配流の旨仰せ出さるゝ、有難く御受仕れ』といふ、嚴重な申渡しであッた。

日蓮は冷かに打見遣ッて、

『御不審あらば召出されて、一應のお調べもあるべきに、さはなうて理不盡の御成敗とは、近頃心得ぬ事ばかりぢや、既に貞永元年、常樂寺殿（泰時）定め置かれた、五十一ケ條のお式目にも、神事佛事を眞先に上げられ、終には起請文迄添へられた、然るに其神事佛事の肝要たる、法華經を手に握れる者を、讒人等の申すが儘に擯出して、却ッてお式目に背き、夜隱に乘じて火を放ち、人を傷むる無道人等を、其儘に棄置かるゝからは、他にも此起請文に、相違する政道が數多ムらう、魯の哀公は、忘るゝ事の第一とし て、移宅に妻を忘るゝと云はれたが、孔子は更によく忘るゝ事、これよりも甚だしき者ありとて、桀紂の君は乃ち、其身を忘れたりと申された、日蓮が一身は兎も角も、法華經の行者を憎むの餘り、國主となッ

て政道を曲ぐる、北條殿御一門の御行末こそ、思へば笑止の至りぢや』と、皮肉を刺す樣な舌鋒で、憚る色もなく喝破するのだッた。

警固の武士が憤ッて、犇めき蒐らうとする處へ、息せき切ッて馳つけたのは、比企ヶ谷の出先にあッて、急を聞いた日朗であッた。松葉谷の庵室に、留守を護ッてゐた日昭も、最も年少の日興も、無論宙を飛んで來た。四條頼基を始め、歸依の信徒も續々と、驅けつけて來た事であらう。

『暫く、暫くお待下されい、我等は上人に隨身の弟子、後事も承はり度く、せめて名殘を惜み度う存ずるに依り、何卒暫しの對面を、お許し下され度い』、『お師匠樣日朗でムりまする』、『日興でムりまする』と、呼はり〳〵近づかうとするが、中ッ腹の武士共に、情のある筈はなかッた。

『えい大切の囚人に、逢はせる事が相成らうか、邪魔せずと、立去れ〳〵』と、威丈高に罵りつゝ、棒を横たへて近寄せず、其間に日蓮を促し立てゝ、用意の船へ乘せてしまッた。

『お願ひでムります、せめて私一人なりとも、お供をお許し下さりませ』と、遮る間を擦り抜けて、纜に縋りついたのは、十九歳の日朗であッた。

『叶はぬ事ぢや、流人に供の許されぬは、昔よりの掟じないか、大切の御用船に、狼藉を働くに於ては、其分に差置かぬぞ』と、船から水棹を振上げて、噛つく樣に叱咤した。――それでも日朗は、涙に身を顫はせつゝ握ッた纜を放さなかッた。

三

心ない船人が、曳と卸した水馴棹に、纜を摑んだ右の腕を、强かに打据ゑられて、あッと叫ぶと其儘、いた〳〵しい日朗は、渚の沙に倒れ伏した。

『暫く、手荒な事はせぬものぢや』と、舷頭に現はれた日蓮は、沈痛な瞳を沙地に落して、

『筑後房、辨の阿闍梨も伯耆房も、よう聞かうぞ、末世に此經を弘めんとすれば、三障四魔競ひ起ッて、其方達迄杖木を蒙る、わしに今日の事あるは、豫ての覺悟ではないが、若しこれなくば經敎の鏡も曇ッて、佛は大妄語の人とならせられる、茲に日蓮あッて、身に經文の儘を行じ、佛說に虛妄なきを證した上は、廣宣流布も疑ひあるべからず、斯程の喜びを何故に歎くぞ、殊に數々見擯出とある、數々は屢々ぢや、今の一度で濟まぬからは、また再會の時節もあらう、流罪とは云へ目と鼻の間ぢや、今日より後は日の出づるを見て、其方達の鎌倉に在る事を偲ばう、其方達も月の入るを見たら、わしは伊豆に居ると思ふが可い、もう船も出る、さらばぢや』と、心强くいふ目の裡にも、遺かに涙は光ッてゐた。

日朗は嗚咽して、口を利く事もできなかッた。日昭は悲痛の聲を張ッて、高らかに、袖を絞らぬはなかッた。

『南無妙法蓮華經』と唱へた。日興も、其他の信徒も、漸くこれに力を得て、同音に唱和した。既や纜を解かれた船からは、

『此經難持、若暫持者、我則歡喜、諸佛亦然』と、例の寶塔品の偈文が、波のまに〳〵高く低く、而も力ある聲で、ゆるやかに聞えて來た。――弘長元年（一二六一）五月十二日、梅雨の霽間の暑い日光も、暫しは曇るかと思はれた。

風定めない相模の海に、船は帆影を斜に落しながら、坤（西南）へと波を分けて進んだ。見送り顏の鎌倉山も、漸く靄に隔てられて、由比ケ濱邊の人影は、もう見返ッても見えなかッた。日蓮は徐かに讀經を續けた。

當時の事を記した日蓮の遺文に、『長時武藏守殿は、極樂寺殿（重時）の御子なりし故に、親の御心を知りて、理不盡に伊豆の國へ流し給ひぬ』とある。重時父子の意嚮は、憎し〳〵の日蓮に對して、無論死刑を選び度かッたのだけれど、出家といふ身分に憚ッて、僅かに一等を減じたのだから、名は流罪であッても、實は機を見て殺す積りで、護送の役人にも、內意を含めてあッたものらしい。

伊豆の山々、心ありて迎へるもの〻如く、天城を中心にして、半島の連山が、漸く目の前に近づいた。

『折角伊東も近づきましたに、どうやら風が變ッて參りましたよ』と、船人は眉を顰めながら、天城の頂きの方を眺めた。

『それは難澁ぢや、暮れぬ中に急いでやれ』と、口には眞實らしく云ふけれど、目配で意味ありげに笑ッた。

俄かに帆を卸して、後は櫓楫に賴ッたが、流れが急な爲め、船足は捗らなかッた。其中に長い日も、やがて暮近くなッた。

四

『申上げます、斯樣に風が强うなッては、浪が荒うて迚も船を、伊東の浦へは入れられませぬ、御覽なさりませ、彼方に見ゆる森の茂みが、仰せ付けの伊東でムりまするゆゑ、寧そ此邊りから、徒步でお出でなされては、如何でムりますな』と、內意を含んだ船の者が、役人の前へ申出た。

『何、あれが伊東と申すか、成程此逆風では、船をやる事もなるまい、徒步で行けと申すからは、磯傳ひに參らるゝのであらうな』、『左樣でムります、道程も左迄遠うはムりませぬ』、『何さまそれも尤もぢや、然らば先づ其あたりへ、船を着けるが可からう』と、聞える樣に差圖をしてから、日蓮の方へ向ひ、『只今聞く通りの次第ぢや、風波の事は詮ない儀ゆゑ、取敢ずこゝより上陸して、勝手に伊東へ參るが可い』と、船着の岩に運び卸すと、蓮唯だ一人を殘して、一同は船へ歸ると同時に、急ぎ帆を卷上げて、相模の方へ駛り去ッた。歸り行く船には、西南の順風であッた。

日蓮が卸されたのは、潮の中の離れ岩で、磯傳ひにも何にも、陸へ渡れる筈はなかッた。暮色蒼然として、浪の音が一入凄まじく、飛沫は法衣の袖を濡らして、夕汐が漸次上げて來る容子だッた。日蓮は靜かに經を讀む外、何うする事も能なかッた。

沖はまだ仄かに明るいけれど、四邊はすッかり薄暗くなッて、黝んだ浪のうねりから、蛇の樣に頭を擡げて來る、汐尖ばかりギラ〳〵と光ッた。岩は滿ち來る汐のまに〳〵、裾を沒し、脛を沒し、やがて腰のあたりにゐる、日蓮の足元迄迫ッて來た。一歩、一歩と退いて、肩から頂き迄攀ぢ登ると、執拗く後から追縋るやうに、同じ速さで迫ッて來た。翼のない限り、最早免れる術はなくなッた。岩を包み了ッた潮は、更に巖上の人の裾から、脛から、膝から、やがて其全身を呑盡さねば已まぬ勢ひで、刻々に羅上ッて來た。

――全身を呑まれる前に、足許の危險が一層加はッた。

『危い〳〵、其樣な處に何をしてムらッしやるだ』と、不意に浪間から聲がして、一艘の漁船が、木の葉の樣に揉まれながら、此方を指して漕いで來た。――日蓮はそれでも泰然として、一心に題目を唱へてゐた。

『飛んでもない坊さまだ、今一刻で浪に浚はれたら、助かる命はムりませぬぞ、さあ〳〵此船へお乘りなされませ』と、手を取ッて親切に扶け乘せた。撲直さうな、屈强の漁夫だッた。

『これは忝けない、迚もないものと諦めた命を、此方のお蔭で拾ひましたぢや』、『氣樂な事を云はッしやる、何處の坊さまか知りませぬが、これは烏崎の俎岩と申して、潮の退いた時は出て居りますが、此通り上汐になると、浪の底に沈んでしまひますだ、何でまた此樣な處へムらッしやッたゞな』と、片手に艫を操りながら、不審さうに其體を見上げ見下した。

十二日の月が雲間を出て、海上はしら〳〵と、夜明の樣に明るくなッた。風も稍凪いで、浪音が急に遠くなッたのは、滿潮が絶頂に達したのだッた。

五

日蓮は濡れた裳を絞りながら、『わしは鎌倉の日蓮といふ沙門ぢやが、此度伊豆へ流罪となり、こゝ迄送られて參ッた處、風波の爲に船が進まぬと申して、斯樣な岩の上へ置去りに致し居ッた、日本一の憎まれ者ゆゑ、死なば死ねとて、打棄て參ッたものであらうよ』、『やれ〳〵、それはお痛はしい、何の樣な罪がおありなさるかは知りませぬが、さりとては非道な人達ぢや、わしは此川奈の濱に住む、彌三郎と申す漁夫ぢやが、しがない暮しではムりますれど、御不自由さへ厭はッしやらぬなら、幾日でも逗留さッしやりませ、及ばずながら女房にも云ひつけて、其位の御報謝は致しますだ』と、懇ろに勸はりながら、波を分けて陸の方へ漕ぎ返した。

川奈の崎は安房の洲の崎、相模の三崎と相對して、鼎の形をなしてゐた。艫柄を握ッた彌三郎の腕には、眞情からの力が籠ッて、月下の立姿は頼母敷けに見えた。船は早汐に揉まれながら、やがて荒磯に着いた。彌三郎は日蓮を背に負ふて、濱邊の砂地へ扶け卸した。

船の始末をしてから、磯傳ひに我家へ伴ひ歸ると、女房もかくと見て、甲斐々々しく洗足手水を進め、手料理の夕餉をも供へた。

『扨々奇特な人達ぢや、日蓮身に犯した罪はなけれど、國主の憎しみを受けて、既に流罪となッた以上、到る處に仇こそあれ、一人の味方もあらう筈はないに、九死の中より救ひ出すのみか、流人と知ッてかゝる供養は、如何なる宿習であらうやら、過去に法華經の行者でありしが、今末法に船守の彌三郎殿と生れ代ッて、此日蓮を憐れみ給ふか、よしそれにもせよ、男はまだしもとも思へど、女房の身として、世に隱れ人に憚りつゝ、何くれとなき待遇は、またなき不思議と申す外はない、日蓮が父母の生れ替りて、我子と育み給ふにあらずば、教主世尊の魂が、夫婦の衆の身に添ふて、法華經の行者を護らせ給ふのでがなあらう、心盡しの數々を、いつの世にかは忘れ申さう、忝けない、忝けない』と、生死の前にはビクともせぬ日蓮も、人の情の嬉しさには、はふり落つる涙を拂ひも敢ず、感謝に聲さへうるんで聞えた。——此心は一ヶ月の後に、伊東から彌三郎に寄せた、消息の文中に盡されてある。

夫婦もこれに感激して、貧しい中から食事萬端、懇ろに供養した。飢饉は此邊り迄及ぼして、米櫃の底を叩く事は、殆んど毎日だッた。

鎌倉からの噂が傳はッて、地頭を始め住民の、日蓮を憎み謗る事は、寧ろ鎌倉よりも甚だしかッた。見る者は目を引き、聞く者は耳を欹てゝ、寄ると障ると此沙汰に、邑中の怨みを集めたが、既に教化に入ッてゐた夫婦は、身を以て窃かにこれを庇ひ、益々心を盡して冊いた。——餘りに迫害が嚴しい爲、狹い家には匿まひ處もなく、裏手の巖窟に忍ばせて、三度の食事を運んだとも傳へられる。

日蓮が初めて着いた島崎は、其後日蓮ヶ崎と呼ばれ、山上に一宇を建立して、海岸山蓮着寺と名け、又彌三郎の宅跡と傳へらるゝ處には、船守山蓮慶寺といふのが建てられた。

六

川奈に一月ばかりゐて、それから日蓮は伊東へ移ッた。

地頭の伊東八郎左衞門朝高が、疫癘に罹ッて重態に陷り、醫藥の甲斐も見えなかッた折柄、一族の綾部正清が勸めて、祈禱の爲に迎へたのだとも云ひ、又恐らくは死んだと思ッた、流人日蓮の生存が、いつか鎌倉に聞えて、幕府の命令に依り、迎へ移されたのだとも傳へる。——川奈から伊東へは、西北へ一里餘り、日蓮ヶ崎は川奈から、更に南へ二里もあるが、此間を總稱して、伊東の崎と云ッた。

八郎左衞門朝高は、伊東次郎祐親の次子、九郎祐清の後裔で、代々土地の領主であッた。日蓮は其祖先の住んだ、和田山城趾の一隅に、型ばかりの草庵を營んで置かれた。——飢饉に續く疫癘は、此邊り迄も流行して、地頭の身にさへ及んだのだッた。

『日蓮は少きより、今生の祈なし』といふ事を以て信念とし、また主義としてゐたから、普通眞言師の行ふ樣な、行法、呪文、呪印等の裝置を整へて、依賴者の要求する儘に、靈異の發動を促す如き、呪法染みた祈禱には與しなかッた。其代り一念三千の理に基づき、自分の信念が法華經を通じて、佛天即ち宇宙の心靈と感應する時、釋迦多寶十方の諸佛は、人の眼を惜むが如く、母の子を愛するが如く、法華經の持者

を守る事、影の形に添ふ如くであらうといふ確信の下に、凡夫即佛、佛即凡夫、我實成佛と稱へて、法華經の行者の祈る祈りは、響の音に應ずるが如く、磁石の鐵を吸ふが如く、明鏡の物の色を浮ぶるが如く、叶はぬ例のない事を疑はなかッた。――他の心靈を賴むのでなく、自分の信念を擴充して、信者の上に光被するのが、法華經の功德だと言ふ趣旨で、朝高の病氣に對しても、祈禱は適宜に行ッたけれど、地頭が一分の信心は、法華經に對する訴訟ともいふべきだから、諸佛神祇も評議の末、よも日蓮を捨てはなされまいと、彌三郎への消息にも記してある。

果して日蓮の至誠は、諸天諸菩薩と感應したか、さしも危かッた朝高の容體が、日を逐ふて快癒に向ッて來た。一族の喜びはいふ迄もない。憎まれ者の流人は一躍して、活如來の如き尊崇を受ける樣になッた。

『いや〳〵、わしの力ではない、皆法華經の功德ぢや、十界互具の一念に、佛心の籠ッて居る事は、誰しも同じ道理ぢやが、唯だ緣なうして通ずる機がなかッたのぢや、幸ひに日蓮が媒介となッて、八郎左衞門殿の佛心と、敎主釋尊の大慈悲心と、感應の緣が結ばれたればこそ、さしもの御大患も、拭ふが如く癒られたのぢや、一分の發心にすら、斯樣の功德がある事に心付かれたなら、益〻信心堅固になされて、無量無邊の功德を受けられい、妙法蓮華經の文字は、即ち釋迦如來の御魂ぢや、一々の文字が如來の御魂なれば、一部八卷二十八品、六萬九千の御魂を、經文の儘に行ぜん人々をば、如來が御眼の如く、守らせ給ふに疑ひはムるまい、假令日輪西より現はれ、潮の滿干ぬ事はありとも、法華經の功德に變りのあらうは ムらぬ、會得が參られたかな』と　日蓮は枕元で、諄々と說法するのだッた。

七

朝高が歸依するに就ては、最初勸めた正淸は勿論、一門擧ッて其化に服した。――朝高は先年海中から現はれた、釋尊の立像を日蓮に贈ッた。

『當所松原の海中より、夜な〳〵光明を放つものこれ有り、人々不審に思ふ折柄、漁師の網に上りしは、此佛體でムるが、村內の者共孰れも念佛の信者ゆゑ、さしも尊しとは思はず、斯く拙者の手許に、預け置いた儘埋れてムッた、然るに此度上人の、厚き御恩を受くると共に、有難き御法談を承はり、無量無邊の功德を感じて、隨喜の涙を覺えしにつけても、勿體なき尊像を、一家の私には致されず、妙法歸依の證として、布施の心に參らする、何卒お納め下され度い』と、自ら立ッて箱から取出し、塵を拂ふて差上げた。

日蓮は恭しく、法衣の袖に受取ッて、戴きながら仰ぎ見ると、金色燦然たる佛體は、如何にも敎主の尊像であッた。

『こは勿體なき御本尊、一閻浮提の大恩敎主も、時未だ到らねば、暫く海底に沈み在したるに、今や末法第五の時、光明赫灼として出現し給ふは、正しく法華經流布の瑞相、一天四海皆妙法に歸するの機運、茲に循り來ッたものでムらう、有難や〳〵、日蓮忝なく頂戴仕る』と、涙を垂れつゝ自我偈を唱へて、

一生の隨身佛とした。――今京都本國寺の寶物になッてゐるのがこれで、傳説に依ると出現の當時、無智の漁民等は阿彌陀佛と信じ、打寄ッて念佛を唱へた處、其頃から疫癘が流行出したので、さては厄病神しあッたかと、地頭の許へ持込んだのだともいふ。後年其海邊に、一宇を建立して、海光山佛現寺と名け、又鶴高の邸趾は、海上山佛光寺と稱した。

地頭の重病が癒ッたと聞いて、今迄誹謗しに浦人も、頓に渇仰の心を起し、續々來ッて信を捧げる樣になッた。領主の一門も心を籠て、日々の供養を怠らず、川奈の彌三郎夫婦も、屢ば訪ひ來ッては、酒を贈り、粽を進め、干飯、山椒抔を給して、謫居の不如意を補ッたので、日蓮は却ッて流人となッて、地方教化の便りを得、心ゆくばかりに經を讀み、題目をも唱ふる事が能た。

醇樸質實な地方人の、優しい心を見るにつけても、思ひ出されるのは鎌倉に於ける、執權始め顯官、高僧の、理不盡な迫害であッた。法華經の勸持品にある、三類の法敵が加へる危害、『數々見擯出』や、法師品の『況滅度後』や、安樂行品の『多怨難信』や、佛讖は悉く事實となッて、犇々と身に中ッて來る。二千年前に諸菩薩が、

『濁劫惡世の中には、多く諸の恐怖あらん、惡鬼其身に入りて、我等を罵詈毀辱せん、我等は佛を敬信して、當に忍辱の鎧を着るべし、是の經を説かんが爲の故に、此の諸の難事を忍ばん、我れ身命を愛まず、但だ無上道を惜む』

と、佛前に誓ッた大願は、一句一句日蓮が、今の身に體驗し、忍受し、實行してゐる處ではないか。

『惡世中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを得たりと謂ひ、我慢の心充滿せん』

とあるのは、極樂寺の良觀を始め、法敵たる諸僧の增上慢を、豫言されたものではないか。經文に虛妄のない限り、これを忍び、これを受けて、不屈不撓に實行する自分が、如來の使であるとの確信は、益固くならなければならなかッた。――而も法敵の巨頭たる、陸奥守重時は、日蓮を流して僅かに半年後の、其年十一月三日、病を獲て極樂寺の別墅に卒した。世には狂ひ死と傳へる。

八

配所の一年は暮れて、明れば弘長二年正月、日蓮は『四恩抄』を認めて、遙かに房州天津にある、工藤左近丞の許へ送ッた。

四恩とは一に一切衆生の恩、一切衆生がなくば、衆生無邊誓願度の願を起し難く、又其中に惡人がなくして、菩薩に難を加へずば、いかでか功德を增長せしめ得られやうといふ事。二には父母の恩、六道に生を享くるには、必ず父と母とがある、若其父母に惡業があらば、我身は科を犯さずとも、享けたる業を成就しなければならぬ。然るに今生の父母が、我を生んで法華經を信ずる身にして與れた事は、三界四天を讓られたよりも、尙ほ重い恩であるといふ事。三には國主の恩、天の三光に身を溫め、地の五穀に神を養ふ事、皆是れ國主の恩である、其上法華經を信じて、生死を離るべき國主に値ッた事は、少々の怨に依

ッて、疎かに思ふべき恩でないといふ事。四には三寶の恩、佛法僧の大恩は、四大海の水を硯に移し、一切の草木を燒いて墨とし、一切の獸の毛を集めて筆とし、十方世界の大地を紙として記しても、記しきれぬといふ事を、細々と認めて、世を恨まず、人を呪はず、法華經行者の赤心を叙べて、迫害の加はれば加はる程、報恩の行の積るのである事を悅び、却ッて迫害者自身が、其爲に罪を重ねつゝある事を歎いて、此悅びと歎きとを、流罪の身になッてからの、二つの大事と記してある。

次で二月には、立正安國論以後、第二の重要著作と稱せらるゝ『敎機時國抄』の稿を脫した。安國論の方は主として、他に對する警策であッたが、此抄は佛法の弘通に關して、自ら主張する法華經の位地を明かにしたもので、これを示すに敎と、機と、時と、國と、序との五大綱を擧げてある。

第一に敎とは、佛敎多門の中に、眞實の大乘は、法華經のみである事を、佛說に依ッて闡明し、これを用ひざる者は、外道であるといふこと。

第二に機とは、佛敎を弘むるに、必ず機根を知る必要のある事を示したもので、智慧第一の舍利弗すら、金師に不淨觀を敎へ、浣衣の者に數息觀を敎へた爲、九十日も說法して、佛敎の一分をも覺らしめる事が能なかッた、況んや末代の凡師は、到底容易に機を知り難いから、これ等は一向に法華經を說くべしといふこと。――金師は貴金屬を扱ふ者で、不淨觀とは人間の肉身を、不淨なものとして其中に、美しい佛心の宿る事を說くのだが、常に身邊に美しい者ばかり扱ッてゐる者には、容易に不淨といふ事の觀念が起らぬ。浣衣の者は洗濯屋で、數息觀とは呼吸を整調して、精神統一を圖ッて行く、今の靜坐法のやうなものだが、絕えず立働いてゐる洗濯屋に、數息觀は難かしい。方法を誤ッては、却ッて佛法を傷けると、舍利弗程の智慧者が、釋尊に叱られた。智者となるべき機根のある者には、先づ小乘を敎へて、次に權大乘、後に實大乘と、漸次階梯を經させる事も必要であるが、愚者と謗法の者とには、必ず先づ實大乘を敎へねばならぬ。信謗共に種卸しが大切であるといふので、智者愚者孰れにも通じ、且其歸結となるべきは、法華經の外にないといふのである。

九

第三に時とは、正像末三期の別で、如何なる良法も、時を知らずして弘むれば、益ない上に却ッて惡道に墮つる。譬へば農夫が田を作るに、春夏に耕作すれば益があるけれど、秋冬に之を行ふ時は、種も土も勞力も同じで、而も一分の益もなく、却ッて損をする樣なものだ。釋尊世に出現して、必ず法華經を說かんと欲しながら、『說く時未だ至らざるが故なり』と稱して、四十餘年秘密にされたのも之が爲だ。正像二千年既に過ぎて、今や末法の初めの二百十餘年、正に法華經のみ弘通すべき時であること。

第四に國とは、國に寒熱、貧富、大小等の差があると同時に、其國情と國民性とに應じて、布くべき敎に一向小乘、一向大乘、大小兼學の別がある。而も日本は前に述べた如く、『此經典東北に緣あり』と云はれた、一向大乘の國であること。

第五に序とは、教法流布の先後を知る事で、先に小乘、權大乘が弘まッたら、後には必ず實大乘を弘むべく、若しまた先に實大乘が弘まらば、後に小乘、權大乘を弘めてはならぬ。要は瓦礫を捨てゝ金珠を取り、金珠を棄てゝ瓦礫を取る勿といふこと。――以上の五綱を知悉して、これが弘通の任に當る人、即ち法華經の行者として、事實に經文を色讀してゐるのは、日蓮自身であるといふのが、一點の歸着點となッてゐる。

更に八大地獄の因果を明して、等活、黑繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱の七地獄のドン底、而も此七大地獄並びに、別處附屬の小地獄に於ける、一切の諸苦を集めて、それに一千倍勝れた極苦を受くる、大阿鼻地獄（一名無間地獄）の狀を說き、これに墜つべき五逆の罪と、謗法の罪との輕重を明した、『顯謗法抄』も此年に出來た。――法華經の行者を惡口し、打擲した者、其後に懺悔してもまだ罪が消ず、千劫阿鼻地獄に墜ちるとある。懺悔した謗法の罪すら、尙ほ五逆罪に千倍する、況んや今の世に充滿する、諸々の謗法者の如く、未だ曾て懺悔の兆さへない者に於ては、生死展轉無數劫に及んで、終に阿鼻地獄を出づるの期がなからうといふのである。

敎機時國抄の歸着、末法に於ける法華經の行者は、地涌の上首上行菩薩が、涌出品に於て付屬された使命を、其遇りに行ふ事であるとの見地から、現に多難の生活に堪へつゝ、忍受の誓願を實行してゐる、自分の立場を基とした、『上行菩薩結要付屬口傳』の稿を了へたのも、やはりそれに引續いてゞあッた。

日蓮の流人生活は、弘長元年から足掛三年に及んだ。此間に日興が、竊に鎌倉から慕ひ來ッて、如何なる咎めを受けやうとも、生死を師と共にすると稱して、强て留まり事へたとの說もあり、又朝高の親戚に一人出家した者があッて、日乘と名乘ッてゐたとも傳へられる。

日蓮がまだ修行時代に、泉州國府で知己になッた、江川太郎左衞門吉久が、伊豆に移ッて韮山に住み、配流の噂を傳へ聞くと、態々山越に訪ね來て、遂に戴髮の弟子となり、後には家を擧げて寺とした。今の本立寺がこれであるといふ。

十

松葉谷の草庵は、日昭が師に代ッて之を守り、日朗を勵まして、日夕の勤行を怠らなかッた。篤信の人々は、日蓮の留守にもよく訪れて、弟子達の扶養に心を盡した。

日朗は毎日由比ケ濱へ出ては、遙かに伊豆の方を望みつゝ、讀經を捧げて師の安泰を禱ッたが、一日岸邊に流れ着いた木片を、何心なく拾ひ上げると、異香薰ずる靈木だッたので、正しく佛の賜ものであらうと、早速庵へ持歸ッて、手づからこれに師の像を刻み、朝夕の給仕を奉ずる事、宛ら生身の師に事ふるが如くであッた。此像は武州堀の內の、妙法寺に傳はッてゐるといふが、木は伊豆の山中に產する、白檀の類であッたかも知れぬ。

鎌倉に於ける災異はまだ熄まなかッた。極樂寺重時の卒して後、其子執權長時も、心地兎角優れぬ勝に、

引籠る日のみが多く、後には五體が痺れる樣で、起居さへ思ふに任せず、最明寺時頼、其子時宗も亦、屢ば惡夢に魘はれて、或ひは祈禱、或ひは卜筮と、手を盡してこれを祓はうとするけれど、驗は見えず、凶のみが現はれるので、上下に憂色晴れず、中にも時頼の如きは、最も心を惱まして、早く悔悟の兆を見せたと傳へられる。

それやこれやの結果であらう、俄かに日蓮赦免の狀が出て、鎌倉へ召返さるゝ事になッたが、而も其狀の日附は、弘長二年十一月十一日で、伊東に着いたのは翌三年、二月二十二日であッた。

別れを惜む伊豆の信徒、喜び迎へる鎌倉の弟子檀那、喜びの裡の悲みと、悲みの外の喜びとは、こゝにも相錯綜して、送る者も迎へる者も、送らるゝ者も迎へらるる者も、見交す眼の中は、皆一樣の涙であッた。

青天白日の身となッて、再び松葉谷の草庵に入ッた日蓮は、これより庵の法華堂を、本國土妙寺と號した。——今京都の大本山本國寺の濫觴である。

草庵に集ッた檀信徒が、歡喜の聲の中にあッて、先づ問題になッたのは、今後の弘法方針であッた。——師を思ふ弟子、檀那の情としては、餘りに鳴り過ぎる毒皷の爲に、却ッて師自らの身をさへ、傷ふ虞のある事を、屢現前に見て、將來を慮るの餘り、暫く激烈な折伏を休めて、平和な敎化に浴し度いとの、希望を述べたのも無理ではなかッた。

『這度は最明寺殿の思召に依ッて、首尾克く御赦免には逢はせられたれど、これに依ッて三類の法敵共が、一層怨を增すべきは、火を睹るよりも明かでムる、法の爲、國の爲とは申せ、少しは御身の爲をも思して、聊か他宗破析の鉾を、お緩めなされては如何でムらう、左程迄に致されずとも、今や御經の功德は、府內を始め當國近國、一圓に輝き渡りて、上人伊豆に在する間も、歸依の人々增しこそ致せ、少しも減ずる氣遣ひはムらなんだ、攝受と折伏と、正法弘布に二道ある事は、豫て仰示さるゝ處でもムれば、暫く攝受の安樂行に依られて、徐ろに敎化を施さるゝが、萬全の策ではムるまいか』といふのだッた。——而も此提案者は、幕府に對する關係上、武士の信徒に多かッた。

十一

日蓮は憮然として、其人々の顏を眺めつゝ、

『暫く御意得申さぬ中に、鐵石と存じた信心が、左程迄退轉致されたか、日蓮が流罪は覺悟の上なれば、其節とても決して、歎きも悲しみも致さなんだ、されば這度の赦免に就ても、一身の爲には左程の恩とも、喜びとも思ふては居りませぬぢや、唯だ方々に見え申して、堅固の信心を承はるを、樂みと存じたばかりぢやに、只今の如きお言葉を承はッては、其唯だ一つの樂みさへ、失はれた悲しさに、日蓮が身の周圍は、闇になッたかと思ひまするぞ』と、急に面を反けると、法衣の膝にはら〳〵と、涙の痕さへ殘ッたのだッた。一座の者は顏を見合せて、唯だ息を飲む外はなかッた。

『如何にも修行に、攝受と折伏との二途ある事は、方々の云はるゝ通りぢやが、末法濁惡の今の世は、攝受の時か、折伏の時か、云はずとも豫て申上げてあれば、固より記憶てゐる筈ぢや、日本一國、法華一純に弘まりて、邪法邪師、一人もなきの時に至らば、深谷にも入り、閑靜にも居して、讀誦書寫、觀念工夫、攝受の行をも修むるであらうが、經敎の掟闌菊に、權宗邪法國にあらん時、何を閣いても謗法を責むべきは、經文の旨、先師の敎ぢや、例へば文武兩道を以て、天下を治むるに方り、武を先とすべき時もあれば、文を旨とすべき時もある、天下無爲にして國土靜かならん時、文を先とすべきは申す迄もないが、東夷南蠻西戎北狄、蜂起して國を敗らんとする時、方々は戰場に於て、武具を捨てゝ筆硯を持たるゝか、時嶮しくして法翳る、杖を持すべし、戒を持する事勿れと、章安大師の釋かれたのはこれぢや、涅槃經の第三に、

若し善き比丘ありて、法を壞らん者を見ながら、置いて苛責し、驅遣し、擧處せずんば、當に知るべし、是人は佛法中の怨なり、若し能く苛責し、驅遣し、擧處せば、是れ我弟子、眞の聲聞なり

とあるのも、御承知の筈ぢや、方々が日蓮の身を案じて、左樣に言はるゝ御厚志は、忝けないと申し度けれど、さある時は此經文に反いて、佛法中怨の責を受けねばなりませぬぞ、南岳大師の四安樂行に、若し菩薩あッて惡人を將護し、治罰する事能はず、乃至其人命終して、諸〻の惡人と俱に、地獄に墮せんとあるこれによるも今の世に攝受を行せんとせば、謗法の惡人と共に、惡道に墜ちん事は疑ひあるべからず、かくても命日蓮に、折伏を休めよと云はるゝか』と、或ひは穏かに或ひは烈しく、情理を盡しての反問に、誰一人として口の利ける者はなかッた。

『法華經に我身命を愛せず、但だ無上道を惜むと說かれ、涅槃經に寧ろ身命を喪ふも、敎を匿さずと誡められてあるは、則ちこゝの事でゐるぞ、今度命を惜むならば、いつの世にか佛になれ申さう、日蓮を大切と思召さば、再び左樣な事を申し出て、日蓮の志を奪はうとなさるゝな、菩提心愈〻强盛ならば、大難も益〻加はること、大風に大浪の起るが如くでゐらう、法華經の行者として、日蓮の覺悟は此外にゐらぬ』と、辭色共に決したのを見ると、列座の弟子、檀越も、今更の如く緘然として、慚愧と感奮との涙を、交々拳に拂ふのだッた。

小松原

一

日蓮が毒皷の威力と共に、安國論の權威は、益〻現はれて來た。

弘長三年、日蓮が伊豆から歸ッた年の八月十四日に、又々暴風雨があり、漸くそれが過ぎたと思ふと、越えて二十四日には、更に大洪水が起り、民力疲弊して、殆んど生色のある者はなかッた。

其間に北條氏歴代の執權中、最も人格者として稱せられる、最明寺入道道崇(時頼)が、二豎の犯す處となッて、手を盡した醫療の效もなく、享年僅かに三十七の壯齢を以て、最明寺の北亭に永眠したのは、十一月二十二日であッた。法華信徒の傳説には、死のとき惡相を現じたとあるが、禪宗の方では端坐從容として、

業鏡高懸三十七年　一槌打碎大道坦然

の偈を殘し、後事を近臣の宿屋左衞門光則、尾藤太入道淨心の二人に托して、溘焉瞑目したと傳たへてゐる。

惶惑の裡に其年も暮れて、翌四年二月、又も改元があッて文永となッた。日蓮も四十三歳になッた。

其三月には又しても、比叡と三井と確執の結果、先づ山の殿堂が燒かれ、次で五月には山僧が、三井の戒壇を燒いた。それは恰も惡法跳梁の責罰とも、像法佛敎の最後とも見られた。

七月五日には、前代未聞の大彗星が現はれて、天下の人心を驚倒せしめた。此七月に南六波羅の探題として上洛した、式部大輔時輔は、最明寺入道の長子で、時宗には兄であッたが、後年執權職を弟に奪はれた無念から、時宗討滅の陰謀を企て、日蓮が安國論に擧げた、自界叛逆の豫言をして、的中せしむるの因を造ッた。――時宗の母は、故の極樂寺入道重時の女で、今の執權長時は叔父であッた。

其長時が八月十日、亡父の三回忌に先だッて、同じ病氣に罹れたので、更に重時の弟、長時には叔父に當る、相模守政村が、代ッて執權となり、同時に時宗は、僅か十四歳で連署となッた。

法華經の持者を擯出して、僅か三年經たぬ中に、重時、時頼、長時の三人が、相踵いで世を去ッた事は、日蓮の歸依者をして、天譴佛罰と稱せしめるに、已むを得ぬ口實を與へたものであッた。――而も六十四歳の重時を除いては、時頼の三十七歳も、無論早世であッたが、長時に至ッては更に若く、僅か三十五歳だッた。

天變地異に加へて、人に及ぶ凶事の漸く頻りなのを見た日蓮は、三災の中に唯だ一つ、七難の中に唯だ二つだけ殘ッてゐる、兵革即ち自界叛逆、他國侵逼の一災二難も、やがて起るに違ひない事を、益信ずると同時に、自分の前途に疊積する、大小無數の禍をも、疑ふ事は能なかッた。

奇禍を出でゝ奇禍に入らんとする、其境間に立ッて、僅かの小暇を得た日蓮の胸には、油然として望鄕の念が湧起ッた。

旭の森の開敎以來、指を僂ふれば既や十二年、其間法戰の絶間なく、勸持多難の生活に、一日として忘れぬ師親の恩をも、遂に省みる機がなく、心ならぬ歳月を送ッて來たのが、今の好機を逸しては、何時また得られるか解らぬと、急に歸省を思ひ立ッて、懷しい安房へ向ふ事にした。

二

日蓮は日昭を召して、

『辨殿、暫く故郷へ參らぬに依ッて、此頃聊かの暇を幸ひ、久々に老母を見舞ひ、舊師をも訪れやうと思ひますぢや、留守中の事は相變らず、其方に總て賴みまするぞ』と云ッた。

愼重熟慮の日昭は、肅んで命を聞いてゐたが、心もち膝を進めると、『師のお言葉ではムりまするが、其儀は如何かと存じられまする、折角の思召し立ちを、お止め申すのではムりませねど、承はれば東條の地頭、左衞門尉景信殿、天津の工藤左近丞殿が、當宗に歸依なされて以來、其仲益々不和となられ、師の坊を憎まるゝ事、一入と申す事でムりまする』、『それは存じて居る、東條と天津とは、豫て領地爭ひのある上、宗門の上迄仇敵となッては、圓く治まらぬのが定ぢや』、『そればかりではムりませぬ、無法人の左衞門殿、近頃は益々我慢增長し、伊勢の御厨の給人と申す事を笠に、清澄の寺領山林を犯すのみならず、殺生禁斷の寺領内に於て、鹿狩を催すと申す樣な、傍若無人を振舞はれると承はる、舊怨のムる師の坊が、左樣な所へお越しある事は、石を抱いて淵に臨まるゝ、危い業ではムりませぬか』、『それもよう存じて居る、なれども母と云ひ、舊師と云ひ、最早孰れも年老けて、いつ如何やうの事があらうも測られぬ、先年父の喪にさへ逢はず、今また敵人に恐れて、母にも師にも逢はなんだら、今生の再會は期し難い、外典にさへ忠孝を說いて、忠も亦孝の家より出るとし、孝とは高なり、天高けれども孝よりは高からず、又孝とは厚なり、地厚けれども孝よりは厚からずと敎へてある、況んや佛法を學ばん者、知恩報恩の志がなうてならうか、危きを冒して進むのも、逆化折伏の慣であれば、必ず氣遣ひは無用にして、唯だ後の事を賴みまするぞや』と、一旦云ひ出した以上は、決して飜さないのが、日蓮の決心だッた。日昭も其上止める事は能なかッた。

日蓮は更に弟子、信徒を集めて、『母の爲、舊師の爲、久々で故郷へ歸るに就ては、辨の阿闍梨をわしとも見て、何事も反いてはならぬ、故郷とは云へど敵の中、若しもの事もあッた節は、直ちに又辨殿を、今後の師と賴む事、やはりわしへの通りにして、信心に退轉のない樣、正法弘布の大業に、各自力を添へられ度い』と、後事を托して鎌倉を立ッた。――それは秋更けた九月初旬、懷かしい房州の山海は、十餘年振の歸省者を、如何なる色に迎へたであらう。

山も水も、自然は昔の儘だけれど、住む人は皆老い、又は長じ、又は失た。日蓮が省みんとする母と師とは、最も老たる者の一對であッた。

海路恙なく安房に渡ッて、先づ小湊の生家を訪れた。六年前に所天を失ッた、母の妙蓮が老病で、長らく牀に就いてゐるとの消息は、豫て日蓮の耳にする處だッた。

不意の歸省に驚いて、喜び迎へる同胞の鬢にも、霜を加へたのに驚いたであらう。何を措いても心懸りは、母の容體であッた。

『打絶えての御無音に、話は山と積ッてムるが、何よりも先母人に、お變りはムりませぬか』。

『其母はこれに居りまするぞ、珍しや日蓮どの』と、妙蓮は病の身をも忘れて、納戸の中からいざり出た。『おゝ母御前、御無事でゐりましたか、日蓮只今、立歸ッてゐりまする』、『ようこそ〳〵、年頃日頃忘れる折もなう、懷しう思ふて居りましたに、念が届いて此樣な、嬉しい事はありませぬ』と、餘りの嬉しさに、涙さへ出ぬ程であッたが、病ひの疲れと、心の弛みとに、張詰めた力の衰へたか、呵といふとばッたり倒れて、其儘息を引取ッてしまッた。一家は上を下への騒ぎとなッた。——水よ藥と介抱しても、些しの驗さへないのだッた。

日蓮は顚倒せんばかりに驚いた。眞先に軀寄ッて、膝の上に扶け起しながら、聲を顫はせて呼活けたけれど、落花は再び枝頭に上らず、閉ぢた眼は開くべくも見えなかッた。日蓮の悲傷はいふ迄もなく、母の骸に打重なッて、身も世もあられず慟哭したが、稍あッて心を取直すと、靜に牀に抱き入れた後、自分は立ッて庭上に出た。

悲しみ慌てる家人を制して、松の根元に式ばかりの壇を設け、花を捧げて水を供へながら、一心不亂に法華經を誦し始めた。——法華經の行者の祈る祈りは、清める水に月の映るが如く、水精の水を招くが如く、琥珀の塵を取るが如く、又大地を指す指は外るゝとも、虛空を繫ぐ者はありとも、假令日の西より出る時はあるとも、叶はぬ事のある筈はないといふ、豫ての信念に基づいて、一旦命終した母の爲に、歸死回生の祈禱を始めたのだッた。

松下の誦經は三日に及んだと傳へる。手づから藥王品の要文を認めて、一掬の水を母の枕頭に捧來り、『病即消滅、不老不死』と、經につれて其面上に灑ぐと、不思議や今迄、眠るが如くに息絶えてゐた妙蓮が、忽然と兩眼を睜いて、爽かに微笑んだ。

『母御前、お氣がつかれましたか、日蓮でゐりまする』、『おゝ其方』とばかり、縋る樣に手を取交して、仰ぐも俯すも、嬉し涙の外はなかッた。家人は固より、居合せた附近の人々も、舌を捲いて驚くばかりだッた。

日蓮は感喜の涙に咽びながら、再び庭に下り立ッて、法壇に謝恩の祈禱を捧げた。爾來此松の樹を、天道松と名づけたといふ。——一說には妙蓮の絕息を、日蓮の歸宅以前とし、臨終の間に合なかッた悲みの餘り、此祈禱を修したのだとも傳へる。

兎にも角にも、佛天の擁護空しからず、老母の病氣は日增に薄らいで、再び起居も自由の身となッた。斯くと傳へ聞いて、近鄕近在から其化を受けんと、來り訪ふ者漸く繁く、小湊の生家は、やがて一種の法場と化した。——當時房總の二國にも、やはり惡疫が流行して、勢ひ猖獗を極めたので、日蓮は乞はるゝ儘に、これが滅壞の祈禱を修し、白布に題目を大書したのを、小舟の艫に結びつけて、波間に長く尾を曳きながら、津〻浦々を漕廻らせたとも傳へられる。

功德を受けた所在の人々からは、活佛の如く敬はれて、いつ迄も逗留を望まれたが、日蓮が歸鄕の要件は、今一つ殘ッてゐた。

四

清澄寺の道善は、弟子思ひの優しい人だけれど、極めて臆病な上、何處迄も山に執して、離れる事の能ない質だッた。

日蓮はそれをよく知ッてゐた。幼少からの敎養、乃至得度の恩は勿論、開敎第一の法談に於て、忽ち寺を逐はれた時も、上には恐しい地頭の景信、下には面倒な弟子がゐて、或ひは嘲し、或ひは凌ぐ、其間に板挾みとなッた結果で、決して師の本意でない事を、固よりよく知ッてゐた。

勘當した弟子に對して、人知れず別れの涙を垂れ、竊かに路次の保護迄加へられた、厚い情の數々を思ふと、表面師弟の緣は斷れて、十餘年往來も絕えてゐるけれど、心は常に其側を離れず、親の恩と師の恩と、夢寐にも忘れる事はなかッた。

母に對する萬分の一の孝養は、漸く盡す事が能た。舊師に對する報恩の途は、其師が權宗邪敎を奉じて、死後は無間地獄に墮つべき、謗法の大罪を犯しつゝあるのを、生前に飜へさせて、無數劫の苦みから救ふ外はない。立宗宣言の說法を、先づ淸澄寺に始めたのも、其微意の爲に外ならなかッたが、今尙ほ無明の夢から覺めず、罪に罪を重ねてゐる事を、よそながらにも見聞しては、他の何人に對するよりも、一倍棄てゝ置けないのが、日蓮の大切な一要件だッた。

併し一旦逐はれた山へ、再び上ッて行く事は能ぬ。況して淸澄は小湊に比べると、同じ東條の領內でも、遙かに景信の館に近く、それだけ危險も多い譯だッた。

西條華房の蓮華寺は、やはり十二年前、其景信の難を避けて、暫しの隱れ家と賴んだ、宿緣のある處だッた。日蓮は竊かにそこを訪ねて、舊識の寺僧に依り、懇ろに道善を華房へ迎へた。

弟子の心が變らぬ如く、師の心も亦變らなかッた。道善は老軀を杖に托して、いそ〳〵と逢ひに來た。秋は疾く過ぎて、木枯の寒い十一月初旬だッた。

師弟となッてからは三十餘年、昔の面影を辿ると、子供の樣に思ッた日蓮にさへ、額に浪の見え初める位だもの、道善の眉や髯は、其霜月の霜よりも白く、一別以來の挨拶に、先立つものは涙だッた。

日蓮は顏を膝を進めて、諄々と法華の正義を說き始めた。恐しい地頭も、面倒な弟子もゐない席では、道善も落着いて、點頭きながら聽いてゐた。それには年の衰へもあッたが、元來氣の弱い人の事とて、點頭いてゐるのが必ずしも、會得した意味にはならなかッた。

一通り聽き了ッてから。

『わしは其方のいふ事を、昔から無理とは思ふてゐぬ、法華經の有難い事も知ッては居るが、生れついて智慧がないから、昇進の望みもなく、又此年になッて、念佛の名僧を立てられもせず、世間に弘まッて居る事ゆゑ、唯だ南無阿彌陀ぶつと唱へるばかりぢや、それにつけて、わしの心から起ッた事ではないが、緣あッて阿彌陀如來を五體迄作り奉ッた、これも過去の宿習であらうが、其方の申す通りぢやと、此科に

依ッて地獄へ墮つるであらうかの』と、張合のない挨拶だッた。

五

日蓮はもどかしさうに、さういふ顔を熟々と見てゐたが、やがてはら〳〵と涙を流した。

『さても悲しい事を仰せられる、阿彌陀佛を五體お作りなされては、五度無間地獄にお墮ちなされませう、申す迄もなく釋迦如來は、一切衆生の父にして、阿彌陀佛は他人の小父とムりまする、然るに其他人の小父を、五體迄作ッて供養されながら、我父の尊像をば、一體も刻み給はぬ事、よも不孝でないとは申されますまい、これが東西も辨へず、一善を修める事も存ぜぬ、海人山樵の類なら、却ッて罪も淺うムりませう、苟且にも佛門にあッて、法を說き敎を弘むる者、法華經釋迦佛を打棄て、阿彌陀佛念佛なんどを信じて、如何に後世を願はるゝとも、爭で其甲斐のムりませうや、一向の惡人は、未だ佛法に歸依致さねば、假令釋迦佛を捨て奉るとも、格別の失も見えませぬが、それはまた緣あッて、信ずる折もある故にムりませう、善導、法然を始めとし、當世の學者、道心者の邪義に就て、阿彌陀佛を本尊とし、一向に念佛を申す人々は、幾度生を替ふるとも、此邪見を飜して、釋迦佛法華經に歸依すべしとは見えませぬ、さればこそ林最後の涅槃經に、十惡五逆にも過ぐる大罪として、設ひ五逆の供を許すとも、謗法の施を許さずと迄仰せられた、一闡提の輩は、二百五十戒を保ち、三衣一鉢を身に纏へる、智者の中にこそあるべしと見えてムりまする、こゝの道理を、よく〳〵お考へ下さりませ』と、面を犯して切に誡めた。一闡提とは不信の梵語、成佛の緣なき者の謂である。——日蓮は此時の心もちを、後に自ら認めて、格別の仲違ひといふではなけれど、東條左衞門の事から、十餘年の間相見る機もなく、自然不和の樣にも思はれた舊師と、久々の對面に方ッて、穩かにいふのが禮儀とは、無論知ッてゐたけれど、生死界の習ひ、老少不定である、二度の見參も覺束なく、今救ひ參らせずば、いつの時をか期する事が能やうと、思ひ切ッて强く云ッたのだとある。

併し優柔不斷の道善には、昔の弟子が折角の心盡しも、充分に徹底する事は能なかッた。長年の習慣で唱へ來ッた念佛を、一朝に止めてしまふには、餘りに年を老り過ぎてもゐた。內心多少の信を寄せてゐても、地頭の怒りと一山の反對とを、向ふに廻して戰ふだけの勇氣も、自ら改宗して山を去る程の確信も、此人には求められなかッた。

懷しい對面は、唯だ懷しさの涙を交したゞけで、日蓮が折角の目的、十餘年來の宿望は、恁うした張合のない相手に逢ッて、空しく水泡に歸した。

『段々との親切を、決して仇には思はぬが、わしには今の淸澄を出ては、最早行くべき住家もない身ぢや、老人の愚痴と勘辨して、何卒惡う思はぬやうに』と、別れを告げて歸り行く、老師の後姿を見送ッた、日蓮の目には新なる涙か、泉の樣に湧き出でた。見返る道善の老眼にも、折柄の時雨が降り添ふたであらう。——雲は風に吹分けられて、道を異にした舊師弟の、手を執る機會は失せたのであッた。

六

天津の工藤左近丞の許から、迎への使者が華房へ來た。

左近丞は夙に戴髪の弟子として、日蓮が伊豆の配所に在ッた間も、絶えず物など贈ッて、存問を怠らず、日蓮も其篤信を喜んで、特に『四恩抄』を書送ッた程の間だッた。――恰も領邑に在ッて、程近い西條に、師の駐錫を聞いた吉隆は、得難い好機として、懇ろに館へ請じ、四恩抄の講話を聽かうといふのだッた。

『外ならぬ工藤殿のお招ぎ、日蓮の當山へ參ッた用向も、最早相果てゐれば、喜んで參上申さう』と、快く承諾して、使者と共に蓮華寺を出たのは、霜月十一日未の刻（午後二時）ばかりの頃だッた。薄緣の舊師を送ッて、篤信の在家に迎へらるゝ、これにも日蓮の感慨は深かッたであらう。

隨ふ者は鏡忍、乘觀、長英等の弟子僧に、信徒を加へて十人ばかり、霜解の田圃道を、題目高らかに唱へつゝ、やがて西條の境を越えて、東條の小松原に寛ッたのは、早冬の日の暮易い、申の刻（四時）過ぐる頃だッた。――一行中に日朗等も、加はッてゐたとの說もあるが、これは疑はしい。

一帶の小松原、松は低いが丘もある。夕暮の色が頓に迫ッて、空には偏圓の宵月が、稍高く上ッてゐるけれど、慌だしい雲に遮られると、其陰からばら〳〵と時雨がして、法衣の袖は濕り勝だッた。颯と過ぎた風に、忽ち松原の騷立ッたのは、風の音ばかりではなかッた。確と先づ日蓮が歩みを停めると、一行も思はず立停ッて、胡散さうに周圍を見廻した。鬨といふ鯨波の聲が、前後左右から一齊に起ッたのは、殆んど其途端だッた。人馬の蹄音は、どや〳〵と亂れ立ッた。

日蓮は石の如く屹立して、一文字に口を結んだ儘、神色自若として、一語をも發しなかッた。

『法敵でムります、お危險うムります』と、身を以て立塞がッたのは、勇僧の鏡忍坊だッた。乘觀坊も、長英坊も、法衣を翿して、左右から庇ふた。――案内の爲先に立ッてゐた工藤の使者が、一散に驅出したのは、敵と見て逃げたのではなかッた。急を主人に告ける爲、さそくの機轉を利かせたのだッた。

群り立ッた伏勢は、いふ迄もなく東條の地頭、左衞門尉景信の郎黨、孰れも小具足に身を固めて、其勢數百人と稱せられた。これに對する日蓮の味方は、僅か十人ばかりの中、女や年寄を除くと、物の用に立つのは三四人に過ぎなかッた。

押取籠めて討たれたら、卵に大石を投げられる樣なものだ。箭ば驟々と飛んで來る。太刀、長卷の閃く影は、枯野に薄が甦ッたかと、凄じく靡き寄る。雲が霽れて、寒月が煌々と照り出した。

最早手を空しうして、死を待つ場合でなくなッた。時鯨しくして法翿る、杖を持すべし、戒を持する事勿れ、さうだと武者顫ひして、護法の太刀を拔くより早く、おッと喚いて眞先に、敵中へ斬込んだのは、豪氣の鏡忍坊だッた、乘觀坊も續いた。長英坊も續いた。足弱は魂も身に添はず、左往右往に迷惑ふた。

『射る箭は雨の如く、打ッ太刀は雷の如し』とは、日蓮が當時の光景を敍して、信徒に寄せた消息の一節であッた。

目に餘る大敵に圍まれて、さしも勇氣の鏡忍坊も、身に十數創を蒙り、朱に塗れて遂に打倒れた。乘觀も長英も、それ〴〵に深手を負ふて、よろほひながら引返して來た。松蔭に日蓮の立姿を見ると、『おゝ、そこにお在なされましたか、敵は御覽の通りの大勢、僅かの味方は孰れも手を負ひ、殊に鏡忍殿は最早、敢ない最後を遂げてムりまする、師の御坊には一刻も早く、此場をお落ち下さりませ』と、二人は我身の苦痛を忘れて、只管師の上を氣遣ふのだッた。

日蓮は目を瞋睹いて、

『すりや鏡忍は最早討死を致したか、其方達も餘程深手の容子ぢや、わし一人安穩に落ちられやう道理はない、又た大切の弟子を見捨てゝ、一人存へる心もない、固より法華經の爲に奉ッた命ぢや、卑怯に逃匿れせうより、此場に於て潔よく、題目を唱へながら唱へ死に死なうよ』、『お情ない事を仰せられまする、鏡忍殿を始め 私 共にまで、それ程の御憐愍をおかけ下さりまするは、忝けないとも勿體ないとも、申さう樣はムりませぬなれど、日本國に二つとない、大切な御命を、斯樣な名もなき者共の爲に、お捨てなさるゝ場合ではムりませぬ、天津と申してゑこゝよりは、僅か十四五町でムりませう、それへお落ち遊ばす迄は、たとへ身は寸々に斬られましても、敵に何百の新手が差替りませうとも、兩人此場に踏留まッて、屹度防戰仕りまする、御猶豫ある程御身の大事、何卒早々お落ち下さりませ』、『いや〳〵其志は嬉しいが、既に鏡忍を見殺しにしたさへあるに、此上其方達迄見殺しにする事は、わしには何うしても能ぬ、死なば諸共ぢや』、『えゝ其お慈悲が、却ッてお恨みでムりまする、恁う申す中にも、敵は何時參るかも測られませぬ、法華經の御爲、日本國の御爲、何うあッてもお落し申さずには措きませぬ』、『はて、法難の爲に死ぬのは、それが即ち法華經の御爲、日本國の爲になるのぢや』と、頑として肯かぬのを、兩人は强て手を取りながら、少しでも安全の地へ移さうと、爭ふてゐる木蔭から、不意に、

『坊主待てッ』と叫ぶ、破鐘の樣な聲が聞えた。蹄の音が戛々と、鐙を反して眞先に進んだ、狩裝束の馬上の武士は、いふ迄もなく景信だッた。

『惡僧日蓮、おのれを待ッ事久しかッたぞ、先年清澄の山中にて、疾くに討取るべかりしを、惡運强う逃失せた爲、今迄命は預け置いたが、我領内とも恐れずして、のめ〳〵これへ參ッたからは、飛んで火に入る夏の蟲、敵はぬ處と觀念して、左衞門が太刀の切味を見よ、それッ』といふと後に續いた、徒歩立の郎黨十餘人、蝗の如くばら〳〵と飛んで出て、左右の兩僧に斬付けた、

一期の大事と、乘親も長英も、痛手に屈せぬ勢ひ猛に、阿修羅の如く怒り戰ふた。――其間につゝと馬を寄せた景信は、鞍から斜に身を乘出して、大太刀を上段に振翳した。

東條左衞門が、僅か一人の日蓮を討たんが爲に、數百人の大勢を催したといふのは、聊か大袈裟に過ぎた樣だけれど、當時其地方に於ける、妙宗歸依者の勢力が、漸く侮り難かッた事を、立證したものゝ樣にも見られる。

豫て密偵を放ッて、動靜を探らしめてゐた日蓮が、左近丞の迎へを受けて、愈〳〵天津へ來ると聞いた時、路次の警衞として、數多の信徒が附て來るとも思ッたであらう。吉隆の許から、迎への武士も出ると察したであらう。自ら打物を取ッて、馬を陣頭に進めたのも、それが爲であッたに違ひない。

其中を日蓮が、僅かの弟子と信徒とだけに護られて、大膽に乘切らうとした事は、全く景信の云ッた如く、飛んで火に入る夏の蟲であッた。併し日蓮としては、決して油斷した譯ではなかッた。舊怨を含む景信が、如何に執拗な性格であるか位は、無論知ッてゐた筈である。知ッて危險に身を投じたのは、冒險其ものが直ちに、法華經の體讀であるといふ豫ての覺悟と、避くべからざるを避けんとして、卑怯な擧動はせぬといふ、性來の强情――勇猛心の發露に外ならなかッたらうと思はれる。多くの信徒の見送りも、左近丞の許からの出迎へも、總て業々しい事は、日蓮の方で恐らく斷ッたのだらう。同時に鏡忍坊を始め、影身に隨ふた三人の弟子僧が、拔群の勇者であッた事も察しられる。

其鏡忍坊は既に殪れた。乘觀、長英の二人も深手を負ッてゐる。景信の太刀風は、鋭く日蓮の頭上に鳴ッた。

『無道人奴』と、思はず一言、受けるともなく拂ッた珠數に、憂然と音がして、火花が散ッたと見えたのは、母珠を切割ッた切尖が、勢ひ餘ッて日蓮の、額を擦ッたのだッた。

初太刀を打損じて、二の太刀は左の腕を掠めた。日蓮は自若として、『妙法蓮華經、序品第一』と、力强い聲で誦し始めた。

『おのれ』と焦ッて、三度景信が打卸さうとする刹那、曳と鋭い矢聲が聞えて、何處からともなく飛び來ッた一箭が、ぐさと馬の平首に立ッた。馬は驚いて棒立にならうとしたので、景信はそれを鎭める爲、覺えず二三間退いた。月は幾度も雲間に出沒した。

新たなる馬蹄の響が、憂々と近づいて、重藤の弓を脇挾んだ、馬上の武士が左右を望みながら、やがて月下に立現はれた。――工藤左近丞が天津の館では、今日日蓮を迎へるといふので、室を掃ふて待受けの用意をしてゐたが、申の刻を過ぎてぱら〳〵と、一時雨通り去ッた後、急に暮色が迫ッたので、路次の程も心許なく、且は師に對する禮として、吉隆自ら馬に鞭ち、北浦忠吾、忠内と、兄弟の郎黨を隨へて、東條の境迄出迎へる途中、曩に遣ッた使の者が、息せき切ッて馳せ戻るのに出會ひ、變を聞くより愕然として、時を移さず駈付けたのだッた。

『おゝ、上人には御安泰で、それに在せられましたか、左近丞吉隆　お出迎へに參りました』、『工藤殿でムッたか、危ふい處へ早速の御加勢、忝なう存ずる』といふ中にも、一旦退いた景信は、再び勢ひ込ん

で襲ひ來ッた。

九

『やゝ、お上人には、お手を負ひなされましたか』と、驚いて驅寄ッたのは忠吾だッた。

『お、これは容易ならぬ、忠吾、それ御介抱申上げい』と、急込み指圖をする吉隆の横合から、

『左近丞殿に物申すぞ、念佛を罵り、禪を謗り、鎌倉殿の御政道にまで、非議を立つる惡僧を、庇護ひ立めさるゝからは、貴殿も正しく鎌倉殿へ、敵對の下心と見受け申す、容赦は致さぬ、覺悟めされ』と、八ッ當りに呼はりながら、荒々しく馬を乘つけた、景信の形相は、惡鬼の樣にも見えた。

『さてこそ法敵は左衞門殿であッたな、邪宗に溺れて正法を妨げ、世にも尊き聖人の、御血を流し奉る事、佛身を傷け奉りし、提婆達多の惡逆にも劣るべからず、諸佛に代ッて此吉隆が、地獄の引導渡し申さう』と、弓を捨てゝ太刀を拔放ッた。

月は再び雲間を出て、氷の樣な光を其白刃に投げた。吉隆の切尖は最も鋭く、勢ひ込んで斬付けたのが、さッと景信の額を擦ッたけれど、多勢の敵に遮られて、遂に目的を果す事が能なかッた。北浦兄弟を除くと、急場の間に合ッた吉隆の從者は、指を屈するにも足りなかッた。敵は新手を差加へて、八方から競ひ蒐るので、心ばかりは焦ッても、衆寡は如何ともする能はず、吉隆は忽ち亂軍の中に包まれて、生死の程も知れなくなッた。――乘觀坊も長英坊も、先刻から同じ運命に捲込まれてゐた。

忠吾、忠内に助けられて、心ならずも其場を立退いた日蓮は、漸く數町を落延て、唯ある泉の畔に出た。振返ると遙かに、鬨の聲が聞えるばかりで、最う追ッて來る敵も見えなかッた。

『嘸お痛みでムりませう、暫く御休息なされませ』、『いや〳〵、決して心配には及ばぬ、これはほんの擦り傷ぢやが、目に血が入ッて歩き難い、幸の泉に洗ッて參らう』、『只今水を汲んで差上げませう』と、兄弟の懇ろな介抱に、日蓮は額の疵を洗ッて、吻と一息吐いた後、纔かに敵地を遁れて、濱荻を過ぎ、天津を越えて、其夜は市ケ坂の岩窟に、寒を凌いだと傳へられる。――日蓮が虎口を脫する時、道傍の松に袈裟を掛けて身代りとした。これを袈裟掛の松と稱し、後世一宇を建立して、袈裟掛山文永寺と名けた。又創洗ひの井戸といふのも殘ッてゐる。

市ケ坂は小湊に程近く、天津の工藤館とは、寧ろかけ離れてゐるが、玆にも岩高山日蓮寺と稱する寺が殘り、當時坂下に住んだ、市之進母子が懇ろに供養し、寒氣の創に泌みる事を憂へて、母の被ッた綿帽子を進めたといふ傳說から、同寺の祖師像には、今も綿を着せてあるといふ。

吉隆は其夜終に、亂軍の中に殉死した。日蓮は迎へられて、天津の館に其死骸を見た。鏡忍坊の遺骸も收められて來た。共に全身刀創の爲、完膚なかッたと傳へられる。――日蓮の遺文に、『弟子一人は當座に討取られ、二人は大事の傷にて候、自身も斬られ打たれ、結句は命に及びたりしが』とある處を見ると、乘觀、長英の二人は、重傷ながら命だけは、取留めたものと察せられる。

十

當時吉隆の妻は、恰も姙娠中で、而も臨月だッたと傳へられる。父は小次郎行光と云ひ、治承年間其父景光と共に、甲州に在ッて石橋山の合戰を聞き、頼朝に味方の爲發向の途中、相州志太山に於て、俣野五郎景久に行合ひ、粉骨碎身して挑戰の結果、遂に景久を追拂ッた、源家有名の忠臣だとある。吉隆は其二男で、初めの名は工藤三郎と云ッた。――市ケ坂の岩窟に居た日蓮を、天津へ迎へ取ッたのは、此行光だといふ說もあるが、頼朝の旗揚した治承四年(一一八〇)から、文永元年迄は八十四年、餘りに年代が隔たり過ぎてゐる事に思はれる。

兎にも角にも日蓮が、吉隆の殉敎に對して、滿腔の哀悼を捧げた事はいふ迄もない。

『無上妙法の爲に、一身を捧げられた大功德、不惜身命の經文を、其儘に行ぜられた左近丞殿は、覺德比丘の身代りとなッて、護法の爲に一命を殞された、有德王の再生とも仰がるゝ、法門第一の忠節、天晴の功勳でムッたぞ』と、涙は滂沱として、止むる術もなかッた。席に在る者も皆泣いて、中には咽せ返る者もあッた。

覺德比丘は歡喜佛の末世に、正法を弘むる爲現はれたのを、當時數多の破戒の比丘が、刀杖を以て迫害した。時の國王有德は、これを聞いて護法の爲、諸々の惡比丘と戰ふて、覺德は危害を免れたけれど、王は身に刀劍鉾槊の創を被り、殆んど芥子程の完膚もなかッた。覺德は其臨終に向ッて、善哉、王は今眞に正法を護る者、當來の世に於ては、其身當に無量の法器とならうと云ッた。歡喜して命終した有德は、果して阿閦佛の國に生れ、郎黨眷屬、倶に戰ひに從ひ、共に歡喜した者は、孰れも菩提の心を退せず、命終して悉く阿閦佛の國に生れた。――阿閦とは梵語で、無怒または妙樂の意を體し、其國を東方妙喜世界といふ。

覺德も其後天命を終ッて、同じく阿閦佛の國に往生し、有德は其如來第一の弟子、覺德は第二の弟子となッた。此王が則ち後の釋尊、比丘は迦葉の前身であッたと、涅槃經に說かれてある。――日蓮と吉隆との關係は、全くこれと異らなかッた。

『是の因緣を以て、我今日に於て種々の相を得て、以て自ら莊嚴し、法身不可壞の身を成ず、此故に法を護らん優婆塞(淸信士)等は、應に刀杖を執持して、擁護する事是の如くなるべしと仰せられた、佛說を眞に守られた殿は、現世にては日蓮が弟子の樣におはせど、未來は正しく有德王の如く、我等が上に立たれ申さう、憚りながら今日只今、日蓮が上人號を參らせ申す、妙隆院日玉上人、靈山淨土へ參られたら、釋迦、多寶、十方の諸佛、梵天、帝釋、四大天王、閻魔大王等にも申させ給へ、日本第一の法華經の行者、日蓮坊が身に代ッて、法難に身を捨てたと仰せあらば、よも芳心のない事は厶るまい、如來現在、猶多怨嫉、況滅度後、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經』と、嚴かに題目を唱へた。一同も合掌して、感激の涙に咽びつゝ唱和した。

葬送は特に僧禮を以て營まれ、塚は小松原に近い遭難地に、今上人塚として殘ッてゐる。

十一

流星光底に長蛇を逸して、地鞠蹈んだ景信は、尙ほも血眼になッて、嚴しく跡を追はうとしたが、曩に吉隆の切尖に、額を擦られた創口が、夜風の爲にか疼痛甚だしく、從者も亦多く討たれて、殘ッた者は意氣沮喪し、進んで隨ふ者もないので、已むなく一旦兵を收めて、東條の館へ引揚げた。

傳說に依ると其微傷が、忽ち熱を持ち、膿爛れて、果は全身に及び、懊惱苦悶晝夜を分たず、手負猪の如く狂ひ亂れて、終に七日の中に狂ひ死んだ、謗法の佛罰に依ッて、十羅刹女の責を蒙ッたのだとある。

――或ひは破傷風の類かとも思はれるが、又一說には東條の菩提寺、惠日山永明寺に傳はッた過去帳に、『寶昌寺殿道悟景信大禪門』、正應四辛卯年八月二十三日逝去とある。正應四年は此年から、足懸二十八年の後で、日蓮の入滅した弘安五年からでも、尙十年目に當る。日蓮の傳記中、最も古いと稱せらるゝ、日朝の『化導記』(文明年間、一四六九――一四八六)に、上人小松原法難の後、景信が尙ほ存生の爲、東條の鄕を堰かれて入る事能はず、故に父母の墓を謁せざること、數年に及んだとある。これが證據だといふのだが、併しまた日耆の遺文(報恩抄)中に、舊師道善の後生の事を叙て、景信等が法華經の十羅刹の責を被り、早く先に失せた事は、一つの助かりと記してあるのを見ると、其長命說も覆へされる。

要するに、景信は此戰ひに於て、目指す日蓮は逸したけれど、多年の宿讎たる吉隆を殪して、其領邑を併せ得たのだが、併し數年の後には、遂に狂死したといふのだらう。――日蓮が市ケ坂の岩窟に創養生をしたといふのも、工藤の家が滅びた爲だッたかも知れぬ。

吉隆が遺腹の子は、後日蓮の弟子となッて、名を日隆と授けられ、亡父の志を嗣いで、天津の館を寺とした。天津山日澄寺がそれで、開山は日蓮、二世は日玉(吉隆)、三世が日隆となッてゐる。

小松原の遭難地には、別に一字を建立して、鏡忍坊日曉を開山とし、日玉の院號をも加へて、妙隆山鏡忍寺と名けたが、後小松原山と改めた。――境內には日蓮手植の松と稱するものが殘ッてゐたが、先年の暴風に吹折られたので、其材料を以て彫刻された法難像が、近く同寺に納められた。

日蓮が眉間に受けた創は、霜夜の風にも妨げられず、幸ひに間もなく快癒した。

『いかに候ひけん討漏らされて、今まで生はべり、愈〻法華經の信心こそまさり候へ』と、消息に認めた日蓮が、日本第一の法華經の行者と、初めて自ら名乘ッたのは、實に此時からであッた。

『日本國に法華經を讀み、學する人是れ多し、人の妻をねらひ、盜み等にて打張らるゝ人は多けれども、法華經の故にあやまたるゝ人は一人もなし、されば日本國の持經者は、未だ此經文に値はせ給はず、唯だ日蓮一人こそ讀み侍れ、我不愛身命、但惜無上道これなり、されば日蓮は、日本第一の法華經の行者なり』(南條入道御書)といふのである。

十二

創の癒た日蓮は、尙ほ暫く留まッて、房總の間を巡化した。

上總藻原の小林民部實信は、豫て日蓮の父重忠と、懇親の間柄であッたが、態々房州迄訪ねて來て、妙宗の歸依者となり、曩に叡山に上せてあッた、一子藤三郎を呼還して、日蓮の弟子とした。——後年六老僧の一人、佐渡房日向であッた。

下總海上郡塙の眞言寺で、住職が一夕の法話に歸伏し、改宗して弟子となッたので、寺を蓮乘寺と改め、寺僧に日正と名を授けたのも此時であッた。——體軀肥滿の日蓮は、豫て少しく中風の氣味があッたので、弟子檀越の勸めに隨ひ、常陸を經て下野に入り、那須の溫泉に浴したとも傳へる。那須野ヶ原の大石に、自ら筆を執ッて題目を記したといふのが、里人の手に彫刻されて、今も其地に殘ッてゐる。後年小兒の食初めには、必ず此石に供養して、災難除けを祈るのが例となり、世に食初佛と稱せられる。

宇都宮に入ッて、君島某の宅へ宿ると、老母が直ちに歸依したので、これに妙金の法名を與へ、又た城主宇都宮下野守景綱の姉も、剃髮して敎化に入ッたので、これには妙正の號を授けた。景綱姉弟に慫慂られて、鹽原へ湯治に赴いたとも傳へられる。妙正は後に一寺を建立して、長宮山妙正寺と名づけた。

上總夷隅郡興津の地頭、佐久間十郎左衞門重貞は、豫て佛法に歸依淺からず、新たに邸内に法華堂を建てゝ、開堂の供養を求めたので、日蓮は迎へられて興津に赴き、十一日間の說敎を行ふた。重貞の一子長壽麿と、季の弟竹壽麿と、共に七歲だッたのが、同時に剃髮して徒弟となッた。日蓮は快く之を諾して、叔父の竹壽に日家、甥の長壽に日保と命名した。共に中老僧十八人の數に列した。

文永元年と二年とは、これ等の巡錫に暮れて、翌る三年の正月には、再び安房に入ッて淸澄にも、暫く逗留したらしい。道善坊の優柔は、相變らずであッたが、先年日蓮を助けて、無事に下山する事を得せしめた、淨顯、義淨の兩人が、兄弟子ながら曾ての後輩に、心から歸伏したのも、此時であッたかと思はれる。——日蓮は後に二人の事を『各々は日蓮が、幼少の師匠にておはします、勤操僧正、行表僧正の、傳敎大師の御師たりしが、却りて御弟子とならせ給ひしが如し、日蓮が景信に怨まれて、淸澄山を出しに、追ひて忍び出られたりしは、天下第一の法華經の奉公なり、後生は疑ひ思すべからず』と云ッてゐる。

法華經の功力に依ッて、一度は蘇生した母の妙蓮も、老齡には敵し難く、文永四年八月十五日を以て、遂に小湊の家に沒した。日蓮が其時歸省したか否かは、確と分明でないけれど、歸省した說の方が事實らしい。孝心の深い日蓮が、四年の間鎌倉へ歸らず、隣國ばかりを巡化してゐたのも、これが爲かと思はれる。

遺骸は亡父妙日の墓側に葬ッて、懇ろに回向したが、後年日家、日保の兩弟子が、此地に一宇を建立して、夫婦の法號に因み、妙日山妙蓮寺と名けた。

蒙古來牒

一

鎌倉に於ける變異は、まだ熄まなかッた。

文永元年の大彗星に次いで、翌二年には、正月元旦に日蝕があり、六月三日には暴風雨があッて、山崩れ、倒れ家等が數多あッた中に、無量寺で秋田城介の十三回忌法要中、突然本堂の梁が落ちて、壓死する者尠からず、八月十七日には、武藏、相摸に大地震があり、十二月四日には、また〳〵大彗星が現はれた。翌れば文永三年、舊臘來の彗星が、漸く影を沒したと思ふ程もなく、一天漆の如くに曇ッて、どろ〳〵の泥雨が降ッて來た。六月にはまた地震があッた。

司天臺の役人共、これ等の天變地夭を相して、孰れも更に大きな凶變の、前兆として言上するので、將軍宗尊親王甚く怖れを抱かせ給ひ、諸寺の僧侶に命じて、これが排攘の祈禱を修せしめ、併せて北條氏の專横を、豫て憤る面々を語らひ、祈禱に托して調伏をも、行はせ給ふとの噂が、いつしか一門の耳に入ッたので、親王は遂に其七月、職を罷めて京へ送り還され、更に御子の惟康親王を迎へて、新將軍の宣下を奏請した。時に親王は御年甫めて三歲だッた。

天變に次ぐに政變を以てし、人心益〻恟々たる間に、三年も暮れて四年となり、其五月にはまた日蝕があッた。

これ等の變異を他處にして、房總の間を遊化してゐた日蓮は、母を見送ッて其中陰が明けると、愈〻鎌倉へ歸るべく、故鄕を立ッて上總に入り、笠森、藻原等、曾遊の地を巡錫して、更に下總の若宮に立寄ッたのは、其年もまた暮れんとする師走だッた。

富木五郎胤繼は、喜び迎へて懇待措かず、最早年内は餘日もなく、殊に寒氣も嚴しいからと、切なる勸め默し難く、遂に若宮に越年した。——胤繼の後妻の連子が、弟子入したのも此時だッた。六老僧の一人、伊豫房日頂がこれだッた。

翌れば文永五年（一二六八）、日蓮は四十七歲となッた。——立正安國論を草してから九年目、文中の豫言は悉く的中して、其正月には蒙古の使者が、國書を齎して博多に來着した。三災七難の中、僅かに殘ッてゐた兵革の災ひ、他國侵逼難の先驅が、愈〻現前して來たのだッた。

蒙古の使者は朝鮮を先導として、朝鮮王の副狀をも共に齎した。太宰府の探題が、これを鎌倉に移送して來たのは、閏正月十八日であッた。書に曰く、

上天の命を眷けたる大蒙古國皇帝、書を日本國王に奉ず、朕惟みるに、古より小國の君、境土相接するだに、尙ほ努めて信を講じ、睦を修す、況んや我祖宗、天の明命を受けて、區夏を奄有し、遐方異

域、威を畏れ德に懷く者、悉く數ふ可からざるをや、朕即位の初め、高麗無辜の民、久しく鋒鏑に瘁るゝを以て、即ち兵を罷めて其彊域を還し、其旄倪（老幼）を反さしむ、高麗の君臣感戴して來朝す、義は君臣と雖も、歡びは父子の如し、計るに王の君臣、亦已に之を知らん、高麗は朕の東藩なり、日本は高麗に密邇し、開國以來亦時に中國に通ず、朕の躬に至りては、一乘の使以て和好を通ずるなし、尙ほ恐らくは王の國、之を知る事未だ審かならざらんを、故に特に使を遣はし、書を持して朕の志を布告せしむ、冀はくは今より以往、問を通じ好を結びて、以て相親睦せん事を、且聖人は四海を以て家と爲す、相通好せざる者、豈に一家の理あらんや、以て兵を用ふるに至ると、夫れ孰れか好む處ぞ、王夫れ之を圖れ、不宣

二

蒙古の來牒が、名は通好を勸むるにあるけれど、實は貢獻を促し、若し我に於て肯かない時は、直ちに兵を以て臨まんとの、威赫を示したものである事は、火を睹るよりも明かだッた。――朝鮮王の副狀も、略ぼ同じ意味の下に、蒙吉の强大と、其德化とを說いて、我頭を押へんと努めたものである事は、いふ迄もない。

書は二月の上旬を以て、鎌倉から京へ轉送された。朝野共に愕然として驚き、且怖れた。朝廷では儀式を停めて、太神宮に奉告し、更に全國の社寺に命じて、國土安穩の祈禱を修せしめた。――時の天皇は、十四年後の弘安四年、愈々元の大擧來寇した砌、身を以て國難に代らんと仰せられた、龜山上皇の御在位であッた。

參議菅原長成が、命を奉じて執筆した、返簡の草案は、軈て鎌倉に下し示されたが、併し幕府の態度は强硬だッた。彼の文辭が無禮だから、返簡を賜ふには及び申すまいと奏して、使者は其儘逐還した。三月には時宗が執權となッて、政村は連署になッた。――日蓮は急ぎ鎌倉に歸ッて、幕府に對する諫曉を、新にすべき時が來た。曩に故鄕へ歸ッてから、足掛五年振の春だッた。

『日蓮が去る文應元年に勘へたりし立正安國論、少しも違はず符合しぬ、此書は白樂天が樂府にも越え、佛の末來記にも劣らず、末代の不思議、何事かこれに過ぎん』と、後年回顧の文（種々御振舞御書）にあるのは、此時の感想を認めたものであッた。

諫曉當面の相手は、いふ迄もなく執權であるが、時宗は當時まだ十八歲の靑年で、萬事は連署の政村や、武藏守宣時が、一門の長者として采配を揮ひ、而して實權は、祖父盛綱以來三代の執事で、侍所司たる、平左衞門賴綱が握ッてゐた。――日蓮は先づ賴綱の父、法鑑入道に對面して、豫言の的中と、これが對策とを論じ、又書面にも認めて、意見を開陳したけれど、念佛信者の法鑑に、手答へのないのは當然だッた。

其中に夏も過ぎ、秋も半の八月となッて、諸社寺に對する祈禱の命令は、尙ほ頻々と發せられるが、

豫言者の日蓮に對しては、何等の音沙汰もなかッた。乃で今度は方面を轉じて、最初立正安國論を、故最明寺に呈する時、執達を賴んだ寺社奉行、宿屋入道光則に書を贈ッて、安國論に對する返答を促した。

『（前略）經文の如くんば、彼の國より此國を攻めん事必定なり。然るに日本國の中には、日蓮一人西戎を調伏するの人たるべしと、豫て之を知り、論文に之を勸がふ、君の爲、國の爲、神の爲、佛の爲、內奏を經らるべき歟、委細の旨は見參を遂げて申すべく候』といふので、八月二十一日附であッたが、五日經ッても、十日經ッても、九月を過ぎて十月に入ッても、遂に回答すらなく、隨ッて召命もなかッた。——入道は先年の關係もあり、無論披露はしたのであらうが、例に依ッて實行の難かしい、過激な要求に對して、默殺の方針を執られた事は、最明寺の時と同樣であッた。

一門の中に唯だ一人、北條彌源太時盛のみは、豫て大學三郎の緣故で、多少心を動かしてゐたから、一度松葉谷の草庵を、訪れた事があるけれど、大勢は一人の手で、何うする事も能なかッた。

三

日蓮は再び、猛然として奮起した。到底尋常の手段では、動かす事が能ないから、此上は執權の面前に、諸宗の高僧と對論して、正邪を一擧に決する外はないと、再び宿屋入道を經て、先づ書を執權時宗に贈ッた。それは十月十一日であッた。

謹んで言上せしめ候、抑も正月十八日、西戎大蒙古國の牒狀到來すと、日蓮先年諸經の要文を集め、これを勸へたること、立正安國論の如く、少しも違はず符合しぬ、日蓮は聖人の一分に當れり、未萌を知るが故なり、然る間、重ねて此由を驚かし奉る、急ぎ建長寺、壽福寺、極樂寺、多寶寺、淨光明寺、大佛殿等の御歸依を止め給へ、然らずんば重ねて又た、四方より攻め來るべきなり、速かに蒙古國の人を調伏して、我國を安泰ならしめ給へ、彼を調伏せられん事は、日蓮に非ずんば叶ふべからざるなり、諫臣國に在れば其國正しく、爭子家に在れば其家直し、國家の安危は政道の直否に在り、佛法の邪正は經文の明鏡に依る、夫れ此國は神國なり、神は非禮を禀け給はず、天神七代、地神五代の神々、其外諸天善神等は、一乘擁護の神明なり、然も法華經を以て食と爲し、正直を以て力と爲す、法華經に曰く、『諸佛救世者、大神通力に住して、衆生を悅ばしめんが爲の故に、無量の神力を現はす』と、一乘喜捨の國に於ては、豈善神怒を成さゞらんや、仁王經に曰く、『一切の聖人去る時、七難必ず起る』と、彼の吳王は、伍子胥が詞を捨てゝ吾が身を亡ぼし、桀紂は龍比を失ッて國位を喪ぼす、今日本國、既に蒙古國に奪はれんとす、豈歎かざらんや、豈驚かざらんや、日蓮が申す事御用ひなくんば、定めて後悔之れ有るべし、日蓮は法華經の御使なり、經に曰く、『即ち如來の使、如來の所遣として、如來の事を行ず』と、三世諸佛の事とは法華經なり、此由方々へ之を驚かし奉る、一所に集めて御評議あッて、御報に預るべく候、所詮は萬祈を拋ッて、諸宗を御前に召合せ、佛法の邪正を決し給へ、澗底の長松を未だ知らざるは良匠の誤り、闇中の錦衣を未だ見ざるは愚人の失なり、三國佛法の分別

に於ては殿前に在り、所謂阿闍世、陳隋、桓武是なり、敢て日蓮が私曲に非ず、只偏に大忠を懷くが故に、身の爲に之を申さず、神の爲、君の爲、國の爲、一切衆生の爲に言上せしむる所也、恐々謹言

文中の阿闍世は、提婆達多の弟子で、父を殺して王となり、閻浮第一の不孝人と云はれた上、醉象を放ッて釋尊を害せんとした、大謗法の惡王であッたが、靈山會上の座に列ッて、法華經を聽いた爲佛果を得た。又た陳隋は智者大師が、法華第一と說いて、國王の前に諸宗を破析し、天台の基礎を築き上げた時代、桓武は申す迄もなく、傳敎大師が御前に於て、南都六宗七大寺の碩學と對論し、悉く之れを歸伏せしめた時の帝で、日本天台の大擁護者であらせられた。――日蓮が執權の面前に、諸宗と對論を望んだのは、此先例に基づいたのだッた。

四

日蓮が諫曉の警告は、執權に發せられたばかりではなかッた。

同時に幕府の實權者たる、平左衞門賴綱、多少の好意を有ッてゐる、北條彌源太時盛、宿屋入道光則を始め、宗門上の敵として、當時鎌倉の位置ある寺院、建長寺、極樂寺、壽福寺、多寶寺、淨光明寺、大佛殿、長樂寺と、各方面に贈ッた書狀は、都合十一通であッた。

平左衞門に對しては、曩に警告を與へた、日蓮が言を用ひざるのみならず、式目に背き、式目の起請を破ッて、理不盡の流罪に處した責任は、一に繫ッて執事たる左衞門自身の上にある事を痛擊し、『宜しく法華經の强敵たる、御歸依の寺僧を退治して、善神の擁護を蒙り給ふべし』と告げ、又北條彌源太に對しては、淨土、眞言、禪、律の諸宗が、日本亡國の根源である事を說いて、『貫殿は相模守の同姓なり、根本滅すれば、枝葉何ぞ榮えん』と警め、尙ほ宿屋入道に對しては、安國論の符合を繰返して、書通十一ヶ所に及んだ事を明し、『定めて御評議の候はん、偏に貴殿の力を仰ぐ、速に日蓮の本意を遂げしめ給へ』と囑んである、

更に建長寺の道隆、極樂寺の良觀等に與へたものは、筆端の毒に、揶揄と、諧謔とを交へて、直ちに肺腑を刺さねば已まぬ、痛烈文字を以て充たされてゐた。

先づ道隆に對しては、佛法外觀の繁昌と共に、世の尊信を受ける高僧等も、一代諸經の勝劣、淺深を知らねば、さながら禽獸に同じだと喝破し、『念佛は無間地獄の業、禪宗は天魔の所爲、眞言は亡國の惡法、律宗は國賊の妄說』と、所謂四箇の格言を、筆に依ッて初めて言明し、鎌倉中の上下萬人、道隆聖人をば佛の如く仰ぎ、良觀聖人は羅漢の如く尊んでゐるけれど、他の諸寺の長老と共に、皆增上慢の大惡人だと、眞額から斬下けてある。

當の良觀に向ッては、『長老忍性、速かに嘲弄の心を釋し、早く日蓮房に歸せしめ玉へ』と、頭から嘲弄してかゝり、『僭聖增上慢にして、今世は國賊、來世は那落に墮落せんこと必定せり』と浴せて、『聊かも先非を悔なば、日蓮に歸すべし』、『所詮本意を遂げんと欲せば、對決に若かず』、『日蓮は日本第一の法華經

の行者なり、蒙古退治の大將たり』と、釣瓶打に痛擊して、殆んど顏色なからしめた。――道門の法敵中、良觀が最も獰惡で、猫の如くに大奧へ迄取入り、其勢力で日蓮を排擠すると、豫て睨んでの痛言であッた。

其他禪の壽福寺に對しては、『早く邪見を飜して、達摩の法を捨てよ』と云ひ、律又は淨土の淨光明寺、多寶寺、長樂寺に宛ては、『墮在無間の根源』と警め、更に大佛殿の別當に向ッては、蒙古の牒狀が、侵逼の前觸である事を反覆してある。

相手に應じて說く處、論點と筆法とは異ッてゐるけれど、云はんと欲する處は一つで、而も其何れにも、同樣の書を各方面へ發した事を告げ、彼等が必要と思ふなら、一處に集ッて評議の上、來になッて來いとの意を示してある、正々堂々たるものであッた。

五

有司に對する警告と、諸宗に對する痛擊と、十一通書狀の結果が、何うなッて現はれるかは、日蓮にも豫測し難かッた。併し從來の經驗として、更に嚴しい責罰、大なる迫害の來る事は、覺悟しなければならなかッた。それは自分ばかりでなく、法弟、檀越の上にも及ぶかも知れぬ。殊に多くの武士の信徒に對して、間接の壓迫が加はる虞は、最も豫想され易い。外に向ッて戰ふ者は、內の結束を固うしなければならぬ。日蓮は別に一書を認め、回狀として門下に發し、一同の覺悟を促した。

定めて、日蓮が弟子、檀那、流罪死罪一定ならんのみ、少しも之を驚く事莫れ、方々へ强言申すに及ばず、是併しながら而强毒之の故也、日蓮庶幾せしむる所なれば、各用心あるべし、少しも妻子眷屬を懷ふ事莫れ、權威を恐るゝ事莫れ、今度生死の縛を切ッて、佛果を遂けしめ給へ

といふ、必死の覺悟を勸めたものであッた。日蓮自身が其覺悟の下に、末法弘通の大業を成すべく、敢て此最後手段に出たのである事は、いふ迄もない。

而も十一通の書狀の手答へは、殆んど認められなかッた。豫期した嚴譴も來なかッた代り、對論の望みも取上げられなかッた。幕府の方針は依然として、默殺主義であッた。

『或は使を惡口し、或ひはあざむき、或ひは取りも入れず、或ひは返事もなし、或ひは返事をなせども上へも申さず、これ偏にただ事にはあらず、設ひ日蓮が身の事なりとも、國主となり政事をなさん人々は、取次申したらんには、政道の法ぞかし、況んや此事は、上の御大事いで來らんのみならず、各々の身にあたりて、大いなる歎き出來すべき事ぞかし、而るを用ふる事こそなくとも、惡口までは餘りなり、これ偏に日本國の上下萬人、一人もなく法華經の强敵となりて、年久しくなりぬれば、大禍のつもり、大鬼神の各〳〵の身に入る上、蒙古國の牒狀に正念をぬかれて狂ふなり』と、後年の追憶（種々御振舞御書）にも憤慨してあるのは、此時の事を記したものであッた。

蒙古の牒狀に騷いでゐる一方、北門には蝦夷が蜂起して、海を越えて津輕の番所を襲ひ、幕吏を殺したとの報があッた。――是より先五月八日には、天に二日が現はれ、又翌文永六年には、二月二十一日の夜、

三月が並び出たと傳へられる。

其三月には、蒙古の使黑的が、高麗の申思詮等、七十餘人を從へて對馬に來り、前年の返簡を促したけれど、これに應じなかッたので、遂に島人二人を虜にして歸ッた。

十一通書狀に對する措置は、表面默殺の形になッてゐたけれど、これを受取ッた諸宗の高僧が、足摺して憤怒した事は察するに難からぬ。それ等が裏面運動の結果か、日蓮側の篤信者として、豫て最も目指されてゐた、富木胤繼、太田乘明、四條賴基等が、法敵たる同じ武士仲間の告訴を受けて、問注所へ呼出された事があッた。それは五月九日であッた。

六

『今日召し合せ、御問注の由承り候、各々御所念の如くならば、三千年に一度花咲き果なる、優曇華に値へるの身歟』とは、胤繼が裁判出廷の日に、日蓮から寄せた書面の一節であッた。

書は對質の際に於ける、注意を細々と認めたものであッたが、訴訟の內容は傳はらないけれど、裏面に宗門爭ひの動機が、あッた事は察せられる。

九月には又々、高麗の使金有成が、蒙古中書省の牒と、高麗の牒狀とを齎して來た。朝議は再び返簡を草して、幕府に示されたけれど、鎌倉では矢張り抑へて發しなかッた。——此間に日蓮は、暫く鎌倉を去ッて、甲州を巡化したと傳へられる。

自ら蒙古退治の大將と稱して、將に風雲を捲起さんとする日蓮が、其間一二年の靜穩は、實に最後の破裂に至る、重要な準備時代として、嵐の前の靜まりと解釋されてゐる。——甲州行の案內者は、久本坊日元だッたといふ。

久本坊は甲州巨摩郡の產、遠祖は阿倍貞任で、貞任滅亡の後、其妻が甲州に遁れて、遺腹の子を產落した、日元は其裔だと傳へられる。——偶鎌倉に出て、日蓮の法談を聽き、忽ち歸服して、當時十一歲になる我子と共に、戒を受けて弟子となり、松葉谷の草庵に留まッて、薪水の役に服してゐた。子は後の中老僧、三位房日進であッた。

日蓮の甲州巡錫には、別に一つの目的があッた。——酒匂を渡り、足柄を越え、須走から富士の東麓を繞ッて、愈峽中に入ると、先づ都留郡の吉田口に向ッた。

富士淺間社の祠官鹽屋平內は、久本坊の舊識であッた。日蓮は數日そこに逗留して、手づから法華經を書寫し、閻浮第一の靈峰、山頂八朶に開いて、其形自ら蓮華に似たるも、法華經との因緣淺からずと、携へて富士山巔に登り、唯ある丘上にこれを埋めて、廣宣流布の祈念を凝らした。後人此嶺を呼んで、經ケ嶽といふ。

自ら噴火口上の境遇に在る日蓮が、手寫の經卷を噴火口上に埋めて、一閻浮提に流布を祈る、時と、境と、法と、人と、蓋し旭の森に於ける、開敎以來の壯觀といふ事が能やう。——嵐の前の日蓮が、精神

的準備の一として、峡中の旅を思ひ立ッた、主なる目的はこれであッた。

吉田を立ッて小立村に至ると、爭ひ迎へた村民が、手に〳〵白紙を持來ッて書を乞ふた。試みに數へて見ると、恰度二十八枚あッたので、法華經の數に相當するのも、不思議な因緣だと、繼合せて一幅とし、これに曼荼羅を大書して、名主の渡邊藤太夫に授けた。今此眞蹟は、駿州岡宮の光長寺に殘ッて、岡宮二十八紙の大曼荼羅と稱せられる。

笹子峠を越えて勝沼に入り、黑川、田波を經て、等々力鄕の北原には、日蓮休息石の遺蹟を留め、後には村名迄改めて、日蓮休息村と呼んだが、今は略して休息村といふ。——日蓮が足跡の印する處、法旗を迎へて歸服せざるはなく、勝沼には上行寺、北原には立正寺、黑川には法蓮寺等が建立されて、孰れも弘敎の道場となッた。甲州は正法有緣の地であッた。

七

甲斐から駿河を經て、再び相摸へ歸る途中、足柄郡板橋村で、路傍の象ヶ鼻石に憩ひ、遙かに房州の山を望んで、父母の墳墓を偲んだと傳へる。

日蓮の爲に僭聖增上慢と呼ばれ、今生は國賊、來世は那落と稱せられた良觀は、相變らず戒律を說いて、日蓮の敎義を罵ッてゐた。——人を貧窶に導くものは酒だ、人を亂行に陷るゝものも酒だ、酒は世間の害物である。況んや貴重の米穀を糜して、食料を減ずるに於てをやである。戒律に深く飲酒を戒めるのは、これ等の百害を除いて、世と人とを安穩に導かんとする爲だ。然るに日蓮邪意を揮ひ、毒舌を擅にして、我願業を妨げんとするは、憎みても尙ほ餘りある振舞、日蓮が死せずんば、眞道は興らぬといふのだッた。日蓮は豫て酒を嗜んでゐた。

僞善を惡んで、末節に拘泥せぬ日蓮は、益々鋒鋩を銳うして、良觀の小乘戒を痛擊した。日本一の法華經の行者は、同時にまた日本一の正直者を以て標榜とした。——諺にも八幡大菩薩は、正直の頂にのみ宿ッて、別の棲所はないといふ。佛法の中に正直の御經は、法華經を除いて外にはない。若し法華經の行者がなくば、大菩薩の御棲所はない筈だ。但だ日本國には一人だけ、日蓮といふ正直者がゐる。されば八幡大菩薩は、日蓮が頂を離れさせては、何人の頂にか棲み給はうといふのだッた。

而して其年の十二月には、十年前の安國論に對して、『旣に勸文之に叶ふ、之に准じて之を思ふに、未來も亦然るべきか、此書は徵ある文也、是れ偏に日蓮の力にあらず、法華經の眞文、感應の致す所なるか』と、感慨の深い奧書を加へた。

文永六年も暮れて、明くれば七年二月十四日、日蓮は先考妙日の爲に、十三回忌の法會を營んで、遙かに其冥福を祈ッた。

此年春から夏へかけて、房總の間に疫癘が行はれ、死者續々と現はれるので、日蓮に救護を求めたけれど、法務多端の爲、行く事が能なかッたとて、新たに自像を刻ましめ、題目を記した白布を手にかけ、身

替りとして遣はしたのを、先年の如く船に乗せて、海岸を漕廻ッた結果、疫癘頓に跡を絶ッたといふ傳説もある。世にこれを布引の祖師といふ。

駿州松野の地頭、松野六郎左衞門の三子松千代・岩本實相寺の徒弟となッてゐたのが、學頭習海の紹介狀を携へて、日興の許へ訪ね來り、更に日蓮に謁して、法弟となッたのも此年だッた。――後の六老僧の一人、蓮華房日持、後年師の遺業を繼いで、蝦夷から韃靼に入り、海外布教の先驅をなした傑僧だッた。

此間にも日蓮は、あらゆる方法を盡して、諫曉の手を弛めなかッた。文永七年も暮れんとする、霜月廿八日附で、門人に寄せた書翰には、『既に年五十に及びぬ、餘命いくばくならず、徒に曠野に棄てん身を、同じくは一乘法華の肩に投げて』とあッて、愈最後の決心が示されてある。――明けて文永八年になれば、正に五十歲に達するのだッた。

龍の口

一

文永八年は春からの旱魃で、二月の末から三月、四月と、連日晴天のみが續き、五月黃梅の季節に入ッても、晝夜をかけて雨はおろか、殆んど雲らしい雲さへ起らず、地は乾き、田は龜裂れて、稻を植る術もなく、川も井戸も泉も涸れて、露さへ賴み難うなると、木は萎れ、草は縺れて、野にも山にも青色なく、六月に入ッては、炎威益々募ッて、さながらの火宅に、人は唯だ奄々と、力なく喘ぐばかりであッた。無論飲水にさへ、不自由する處が多かッた。

百有餘日の大旱魃、渴した者の唯一の賴みは、當時慈善救濟の上で、活如來の如く仰がれた、極樂寺の長老良觀の上に集まッた。執權時宗も亦良觀を召して、雨乞の法を修する事を命じた。良觀も日頃の廣言に對して、否む事は能なかッた。寧ろ進んで法力を示すべく、二山の大衆を指揮して、靈山ケ崎に壇を設け、愈其十八日から、請雨の法を行ふ事になッた。――靈山ケ崎は極樂寺の境內で、地獄谷から南に連り、稻村ケ崎と並んで、遠く海中に突出し、左には三浦半島、右には伊豆半島を望み、前は漫々たる相摸灘で、大仕懸の修法抔には、最も形勝の地であッた。

噂は忽ち鎌倉中に傳はッて、豫て其戒律の堅固を信ずる人々は、必ず法の功驗顯はれ、八大龍王も感應して、忽ち膏雨を下す事を疑はず、祈禱もまだ始まらぬ先から、早くも隨喜の涙を垂れる、氣早な者も尠くなかッた。――常から仲の惡い日蓮が、何うするだらうといふ事も、奇を好む人々の間に、一ッの評判となッた。

日蓮の意中には、無論成算があッた。良觀の法力が、到底日頃の廣言に副ふ譯のない事を、よく知ッてゐた。寧ろ之に依ッて良觀を挫くに、絕好の機會を得た事を、心竊に喜んだ。

府内の評判を氣遣ッて、眉を顰める弟子や信徒に、大丈夫といふ確信を示して、

『金光明最勝王經に、惡人を愛敬し、善人を治罰するに依りて、星宿及び風雨、皆時を以て行はれず とあるを、各〻は何と讀まれたか、國を擧けて謗法の諸僧を愛敬し、法華經の行者を治罰する世に、諸天、龍神が怒を發して、此旱魃を來せる事は、鏡にかけて見る樣ぢや、病の因をたゞさず、災ひの根を知らずして、如何なる藥も、如何なる法も、驗の現ぜん道理があらうか、若し良觀坊の祈禱が、七日の中に成就するなら、此日蓮も彼が弟子となッて、五戒二百五十戒を保つ、持律の者になりもせうが、先づそれよりは良觀坊が、今に賢僧の正體を顯す、心地よい狀を見て居るが可い』と、事もなげに嘲笑ひながら、人を遣ッて良觀の弟子、周防坊と、入澤入道といふ、二人の念佛者を招いた。

『今となッて言說は無用ぢや、此度の雨乞の修法、おぬし達の師匠と仰ぐ、良觀御房の法力で、美事に成就するかせぬか、それに依ッて豫ての爭ひ、法の邪正を定めるのが、何よりの現證ではあるまいか、若し七日の間に驗が見えたら、わしの方から降參して、良觀御房の弟子とならう、若し又其間に驗がなくば、おぬし達先づ日蓮の弟子となッて、良觀御房にも題目を唱へさせねばならぬ、脈か應か、歸ッて師匠に相談して貰ひ度い』と、更めて排戰の第一矢を放ッた。二人は喜んで立歸ッた。

二

日蓮が慈悲の薫發は、必ずしも他宗に對する、毒鼓の宣揚ばかりではなかッた。法敵良觀との對戰に、さながら背水の陣を張ッて、勝劣を一擧に決せんとする、大事の場合に臨んでも、內に向ッて弟子信徒の上には、常に優しい溫情が、妙なる天鼓の響きとなッて、床しく鳴らぬ時はなかッた。

四條金吾賴基の妻が、初めての姙娠を聽いて、『夫婦共に法華經の持者なり、法華經流布あるべき種を、繼ぐ所の王子出生あらん』、『日蓮產まるべき種を授けて候へば、爭でか我子に劣るべき』と、我が事の樣に喜んで、態々日昭を使に立て、文と共に符を授けたのは、五月七日の事であッた。

次で六月八日には、女子を安產したと聽き、『所願潮のさすが如く、春の野に華の開けるが如し』と喜び、自ら命名親となッて、月滿御前と名づけ、『其上此國の主八幡大菩薩は、卯月八日に生れさせ給ふ、娑婆世界の敎主釋尊も、亦卯月八日の御誕生なりき、今の童子また、月は替れども八日に產れ給ふ、釋尊、八幡の生れ替りとや申さん』とも祝ふた。――賴基は寬喜三年の生れで、日蓮よりは十歲の年少であッたから、當年四十一歲だッた。

一方良觀の側でも、日蓮の挑戰に接して、否やのある筈はなかッた。法力の爭ひなら、固より望む處、七日を俟たず大雨を降らして、今度こそは日蓮に、二の句も出ない樣にしてやると、喜び勇んで修法にかゝッた。

愈々十八日となれば、良觀を中央に、修法の衆僧百二十餘人、壇を繞ッて八面に居並び、儀容儼然と

して、式は莊嚴を極めた。――此盛典を仰がんと、府の内外から集まる男女に、山上山下は人垣を作ッた。

一日經ち、二日經ち、三日、四日と過ぎて、讀經に、祈禱に、衆僧の絞る汗は、瀧の樣に流れるけれど、空には汗程の雨氣も見えず、地は燒けて炎熱は加はるばかり、やがて五日目になると、流石の良觀も氣が氣でなく、泉が谷の多寶寺から、更に二百人の弟子を借りて、益々懸命に祈ッたが、依然として何の驗も見えず、六日も暮れて七日目となッた。

『愈々滿願の日と相成ッたが、雨は如何でムるな』と、日蓮は皮肉な使を遣ッた。それはまだ朝の中であッたから、良觀は尙ほ一縷の望みを繫いで、今はまだ修法中だと、苦しい辯疏をしたが、晝になッても、午後になッても、空には一片の雲も出なかッた。日蓮の使は三度に及んで、最後のは最も痛烈を極めた。

長い暑も漸く傾いて、時は最早申の刻（四時）であッた。今日か、明日かと引かされて、毎日集ふてゐた群衆も、暑さと疲れとに倦じて、果は失望の愚痴たら〳〵、散り〳〵に歸ッて行く頃だッた。

身神共に困憊して、殆んど口を利く勇氣さへない、良觀の前へ出た使者は、ありの儘に日蓮の口上を傳へた。

三

いかに和泉式部と云ひし淫女、能因法師と申せし破戒の僧すら、狂言綺語の三十一文字を以て、忽ちに降らせし雨を、持戒持律の良觀房は、法華眞言の義理を究め、慈悲第一と聞え給ふ上人の、數百人の弟子を率ゐて七日の間に、いかで降らし給はぬやらん、是を以て思ひ給へ、一丈の堀を越えざる者、二丈三丈の堀を越えんや、易き雨をだに降らし給はず、況うや難き往生成佛をや、然らば今よりは、日蓮を怨み給ふ邪見をば、是を以て翻へし給へ、後生恐ろしく思し給はゞ、約束の儘を急ぎ來り給へ、雨降らす法と、佛になる道敎へ奉らん

といふのが、使者をして云はしめた、日蓮の口上の要旨であッた。――能因法師は伊豫の國に在る時、『天の川苗代水をせき下せ、天降ります神ならば神』と、一首の歌に旱魃を救ひ、和泉式部も亦『ことわりや日の本なれば照るぞかし、降らざめやはあめが下には』と詠んで、雨を降らしたとの故事を、引例に用ひたのだッた。

良觀は返すべき言葉もなく、涙を流して悲憤した。居合せた弟子信者も、同じ樣に腕を扼して、聲を惜まず口惜がッた。中に入澤入道のみは、最初の約束に隨ひ、遂に日蓮の歸依者になッた。

良觀は此期に及んでも、尙往生際惡く、今一七日の猶豫を求めて、再び修法を重ねたけれど、狂風が吹起ッたばかりで、雨は遂に一滴も降らなかッた。晴の法戰に、見苦しく敗れた良觀は、法具を收る遑もなく、孤鼠々々と逃げ歸ッた。――當時良觀の棄てゝ往ッた、護摩壇と稱せられる物が、今松葉谷の長勝寺に殘ッてゐる。

今度は日蓮の番になッた。良觀に敎へてやると云ッた、雨を降らす法といふのを、愈々自ら試みて、法力を示さねばならなかッた。日蓮が祈雨の靈跡は、靈山ケ崎の北手を過ッて、七里ケ濱の海岸から、數町入ッた山懷、田邊が池の畔と傳へられる。僅かに二三の弟子を連れて、讀經一刻にも滿たぬ中に、雨は沛然として降り來り、殆んど三日三夜に亙つて、野も山も田も畑も、草も木も人も畜類も、一齊に甦へッたといふのだ。――一說には日蓮の法壇も、同じ修法の爭ひであるから、やはり同じ場所を選んで、靈山ケ崎に設けられたともいふが、孰れにしても日蓮の、凱歌を奏したといふ事に於ては、異る處はなかッた。當時日蓮の用ひた法具は、富士の大石寺に傳はッてゐる。

敗軍の將たる良觀は、再び自ら矢面に立ッて、法を論ずる資格はなかッたけれど、無論其儘默ッてはゐられなかッた。憎みは同じ淨光明寺の行敏の名を以て、七月八日附の書簡が、松葉谷の草庵に届いた。――行敏は然阿の弟子だッた。

『未だ見參に入らずと雖も、事の次でを以て申し承はるは、常の習ひに候はん歟、抑々風聞の如くんば、所立の義最も以て不審なり』と、所謂四箇の格言を詰ッて、『事若し實ならば、佛法の怨敵なり、依ッて對面を遂げて、惡見を破らんと欲す』といふ、逆襲的の挑戰狀であッた。

四

日蓮の返簡は、十三日附を以て發せられた。

條々御不審の事、私の問答は事行ひ難く候はん歟、然れば上奏を經られ、仰下さるゝの趣に隨ふて、是非を糾明せらるべき歟、かくの如き仰せを蒙り候條、尤も庶幾する所に候、恐々謹言

對論は望む處だが、私の問答では詮ない。幕府に上申して公の席上に、正々堂々と法議を闘はし、是非を決しやうといふのだッた。現に法力に負けても、約を履まぬ良觀の仲間と、私に法論をしたとて、勝敗を曖昧に附する事は、火を睹るよりも明かだ。それより執權の面前で、公然相手を破析したら、政府の責任としても、彼等の諸宗を禁ぜずには置かれまいといふ、確信の下に突ッ跳ねたのだッた。

良觀も行敏も、引くに引かれぬ破目となッた。他の諸宗をも語らッて、今後の對策に就き、直ちに鳩首凝議を始めた。併し日蓮の胸中には、綽々として餘裕があッた。

七月の十三日は、恰も盂蘭盆であッた。其十二日には、四條賴基の母が、一周忌の供養を受けて、人の子としての孝心と、信者としての信仰とに對する、滿腔の同情を濺いだ、訓誡の手紙を寄せて、弟子に對する美しい、親愛の情を示してゐる。――賴基の母も生前からの歸依者で、妙法尼の法名迄授かッてゐた。

『定めて釋迦、多寶、十方の諸佛の御寶前にましまさん、是こそ四條金吾殿の母よ母よと、同心に頭を撫で、悅び褒め給ふらめ、あはれいみじき子を我は持ちたりと、釋迦佛と共に語らせ給ふらん』と、讃嘆した書中には、自分の多難な生活に對しても、父母追孝の功德の爲に、餓鬼道に墜つべき業障を消して、『未

來は靈山淨土に參るべしと思へば、種々の大難雨の如く降り、雲の如くに湧き候へども、法華經の御故なれば、苦をも苦とも思はず』と認められてある。日蓮が孝心の厚かッた事は、更めて繰返す迄もない。

良觀側が凝議の結果は、再び行敏の名に依ッて、其二十二日幕府に呈出された、日蓮彈劾の訴狀となッて現はれた。それには良觀の副書も添へられた。其他眞言、禪、律、念佛、諸宗の道俗我も〳〵と、日蓮の讒訴に加擔した。

彈劾の要領は、日蓮が佛法の通義を無視して、獨り法華經のみを尊しとし、他の諸宗を讒誣する事、傍若無人を極める、是れ佛法を破ると共に、國家を亡るものであるといふのが主で、中傷の材料としては、無智の愚民を使嗾して、年來の本尊たる、彌陀、觀音等の像を、火に入れ、水に流さしめ、剩へ其庵室には、法華の守護と號して、兇徒を集め、兵器を貯へてゐる、願はくば佛法興隆の爲に、且は衆生利益の爲に、速に惡義を停止せられ度いといふのだッた。

幕府に於ても最早、不問に附する事は能なくなッた、愈八月三日を以て、問注所へ出頭すべしとの差紙か、日蓮の許へ達せられた。係は平左衛門尉賴綱であッた。

五

松葉谷の草庵では、此召喚に對して、多くの弟子信者が、豫て期したる事ではあるけれど、師の身の上を氣遣ふて、孰れも危惧の目を見合せたが、日蓮は獨り自若として、定められた日時を違へず、問注所へ出頭した。

執事平左衛門を正面に、諸役人列座の前で、審問は嚴かに開始された。――諸宗無得道、法華獨り成佛の所以は、日蓮の雄辯に依ッて、堂々と法廷に繰返された。

良觀、行敏等の側では、法理、教義の上よりも、寧ろ感情の方を主として、日蓮を陷れるのが目的であッたから、表向訴狀を呈出すると同時に、裏面へ廻ッては、豫て良觀等が、北條氏大奥の尊信を得てゐるのを幸ひ、故最明寺の後室千田尼を始め、極樂寺重時、其子長時の後室等に手を廻して、常に日蓮が、最明寺も極樂寺も、冥土は共に無間地獄と、言觸してゐると告げさせ、其方からも表役人を、動かす樣に構へてあッたので、色眼鏡を懸けた賴綱の裁判に、片手落のあッた事はいふ迄もない。

『法門は兎も角も、訴狀に依れば先達ッて、良觀房修法の砌、其方弟子を遣はして、再三嘲弄させた上、建長寺、壽福寺、極樂寺、多寶寺、大佛殿、長樂寺、淨光明寺を爛拂ひ、道隆、良觀を始め、禪僧、律僧、念佛僧等の首を刎ねて、由井ケ濱へ梟けよと申したとの事、それに相違ないか何うぢや』、『如何にも聊か相違ムらぬ、佛意に背く諸大寺は、悉く佛敵の巢窟でムれば、これを破却し、燒亡するは、直ちに以て佛意を行ふもの、謗法の沙門を誅せらるべきに、何の不審がムらうや』、『彌陀、觀音の尊像を、火に入れ、水に流させたと申すは』、『其事、如何なる證據あッてかは存ぜぬが、若し證據なくば良觀坊等、自ら愚人を嗾かして、佛像を火に入れ、水に流させ、科を日蓮に負はさんとの企みか、糾明あらば相判り

申さう、先づそれ迄は訴人の方へ、罪は返上申すばかりぢや』、『汝出家の身にありながら、兇徒を集め、兵器を貯ふると申す、此儀は如何に』、『抑も法華經守護の爲の兵仗は、末法惡世に於ける佛法の守法、例へば國主の守護の爲に、弓箭刀杖を備ふると等しく、在世以來の佛誡でムる』と、日蓮は臆する色もなく、敢然として答へたので、並居る諸役人はあッと驚いた。

いくら大膽な日蓮でも、此問に對しては、無論左樣な事はないと、否定するだらうと思ひの外に、堂々と佛の遺誡だと答へる、豫期以上の不敵な態度に、賴綱も思はず目を睜ッた。驚きと共に色眼鏡の下から、ギロリと輝いた瞳には、一層嫌疑を深うした色が、歴々と讀まれたに違ひなかッた。

『然らば尙ほ更めて尋ね問ふが、汝各宗を誹謗し、當家御歸依の高僧を讒誣するのみならず、故最明寺入道殿、極樂寺入道殿を以て、無間址獄に墮ち給へりと申す由、聡と左樣か、上の御諚ぢや、眞直ぐに申し立てい』と、威丈高になッて詰問した。諸役人は固唾を呑んだ。——日蓮は怖ゐる色もなく、莞爾として片頬笑んだ。

六

『近頃異な事を承る、餘のお尋ねは兎も角も、最明寺殿、極樂寺殿を、地獄と申し觸らすとは、何者の讒訴かは存ぜぬが、あざとくも申し構へたものぢや、一定虛言でムる』と、嘯く樣に他を顧みた。固唾を呑んでゐた諸役人は、さてこそ逃げに蒐ッたと、氣色ばんで膝を進めた。賴綱は疊み懸けて、

『すりや、身に覺えがないと申すか』、『尤も、日蓮が斯く申す法門は、最明寺殿、極樂寺殿、御存生の頃より申し古した事で、法華經の御敵とならば、例へ日月四天と雖も、惡道は免れ給ふべからず、況いて娑婆世界の國主大名をや、正法を聞かず惡法に住せば、沈沒して阿鼻獄に墮ちん事は、佛の金口、經々の明鏡、日蓮が私曲を以て、今日初めて申すのではムらぬ、更めてお尋ね迄もなう、最明寺殿、極樂寺殿、疾うにより御存じの筈ぢや』と、これでは何の辯疏にもならぬ。却ッて散々引張り廻した末、彈みをつけて突放した樣なものだッた。

赫となッて意氣込む賴綱を、尻目にかけて一寸句を切ッた日蓮は、急にまた嚴かな態度になッて、『但し斯樣に申し上ぐるも、決して日蓮が身の爲ではムらぬ、偏に此國を思ひ、世を思ふての事でムれば、若し天下の安穩を思さば、彼の法師原を召合せて、互の申す條を聞食されい、さもなくして彼等に代り、理不盡の科に行はるゝに於ては、必ず國に後悔あるべく、日蓮御勸氣を蒙らば、佛の御使を用ひぬになりて、梵天帝釋、日月四天の御咎めに依り、遠流又は死罪の後、百日、一年、三年、七年が內に、必ず自界叛逆難とて、此御一門に同士打が始まり申さう、其後は他國侵逼難とて、四方より敵押寄せ、殊に西方より强く攻められ申すでムらう、其期に及んでの後悔は、何の役にも立ちませぬぞ』と、面を犯して極諫した。賴綱は噛り象て、遂に憤然と色を作した。

『默れ、えゝ默り居らぬか、汝法師の身として、天下の政道に喙を挾み、邪言を用ひて世を惑はす、奇

怪至極のしれ者ぢや、如何なる罪科に行ふとも、上には上の思召しがあるわ、追て沙汰を致さうずるに、屹と蟄して相待ち居れ』と、荒らかに言渡して、其日の法廷は閉ぢられた。日蓮は悠々として草庵に歸ッた。

秋風は立ッても嚴しい殘暑に、南を受けた海邊の夕凪は、一層人の心を焦々させた。其間に噂は噂を生んで、何か謀叛人でも出る樣な、不安な空氣が鎌倉中の、到る處に充滿した。日蓮の弟子からも、反間者が現はれた。

少輔房、能登房、名越の尼抔、臆病愚痴な癖に慾深く、而も自分では智者と名乘ッてゐる輩が、風向を見て敵方に追從し、多くの人を陷せしなりと、日蓮の遺文中に、憎しみの文字が殘ッてゐる。――僅かの事から不平を起し、それが嵩じて怨みとなり、反抗心となッてゐたのが、時を得て戈を逆まに、恩を仇で報いる例は、いつの世にもある小人の慣ひであッた。兇徒を集め、兵器を貯へ抔と、さも逆意の下心でゞもあるかの如く、舊師の事を惡ざまに觸歩いて、一層人心を動搖せしめたのも、これ等の者の所業であッた。

七

幕府からは其後一月餘り、表立ッての沙汰はなかッたけれど、内々評定の容子は、頻々として草庵へ傳へられた。無論それとても、大部分は臆測で、多く信を置くには足りなかッたけれど、詮議の結果は頸を刎ねるか、鎌倉を追放するか、弟子檀那の内所領のある者は、所領を召上げて頸を斬り、或ひは牢に入れ、或ひは遠流すべし等、一として輕く濟みさうな說はなかッた。弟子、信者の憂慮はいふ迄もなかッた。

日蓮は少しも驚かず、寧ろ大に喜んで、氣遣ふ人々を顧みながら、最後の決心を告げると同時に、益々結束を固うする事に努めた。

『風大いなれば波も大きく、龍大いなれば雨も猛き道理ぢや、日本一國・法華經の强敵となるが不便さに、名をも惜まず命をも棄てゝ、强盛に申し張るからは、如何なる大難も存知の旨ぢや、雪山童子は、半偈の爲に身を投げ、常啼菩薩は身を賣り、善財童子は火に入り、樂法梵士は皮を剝ぎ、藥王菩薩は臂を燒き、不輕菩薩は杖木を蒙り、師子尊者は頭を刎ねられ、提婆菩薩は外道に殺され給ふた、佛記して曰く、我滅後正像二千年迴ぎて、末法の始めに、此法華經の肝腎、題目の五字ばかりを弘めん者出來すべし、其時惡王、惡比丘等、大地微塵より多くして、或ひは大乘、或ひは小乘等をもて競はん程に、此題目の行者に責められて、在家の檀那等を語ひ、或ひは罵り、或ひは撲ち、或ひは牢に入れ、或ひは所領を召し、或ひは流罪、或ひは頸を刎ぬべし抔いふとも、退轉なく弘むる程ならば、怨をなす者は、國主は同士打を始めて、餓鬼の如く身を啖ひ、後には他國より攻めらるべし、是れ偏へに梵天、帝釋、日月、四天等の、法華經の敵なる國を、他國より攻めさせ給ふなるべしと說かれてゐるぞ、されば各々我弟子と名乘らん人々は、一人も臆し思はるべからず、豫しも申す如く、親を思ひ、妻子を思ひ、所領を顧みる心は出されな、無量劫より此方、親子の爲、所領の爲に、命を棄てる者は多いが、未だ法華經の御爲に、一度も棄てた例は